

2022 年度学位請求（博士）論文

論文タイトル

石川三四郎の教育思想

—「人格の独立」に着目して—

教育学研究科教育学専攻博士後期課程

17DK-001

貞清 裕介

目次

序章.....	1
第1節 本研究の目的と問題の所在	1
第2節 石川三四郎に関する先行研究の検討.....	3
第3節 研究の方法と本論文の構成	6
第1部 キリスト教社会主義期における石川三四郎の教育思想.....	13
第1章 キリスト教社会主義期の石川三四郎の生涯と思想形成	13
第1節 キリスト教社会主義運動に投じるまでの石川三四郎の生涯と思想形成.....	13
第2節 キリスト教社会主義者としての石川三四郎の生涯と思想形成	19
第3節 小括.....	24
第2章 石川三四郎の社会運動の構築と社会主義運動者との差異	26
第1節 石川三四郎のキリスト教との接触と本郷教会との対立	26
第2節 石川三四郎の社会運動と初期社会主義者との出会い	30
第3節 石川三四郎と初期社会主義者との思想の差異	33
第4節 小括.....	43
第3章 キリスト教社会主義期における石川三四郎の教育思想	44
第1節 キリスト教社会主義期における石川三四郎の道徳観.....	45
第2節 「小学教師に告ぐ」とその時代背景.....	47
第3節 『虚無の靈光』から見る石川三四郎の「人格の独立」	53
第4節 小括.....	57
第2部 「土民生活」思想期における石川三四郎の教育思想	68
第1章 「土民生活」思想期の石川三四郎の生涯と思想形成.....	68
第1節 ヨーロッパ・アフリカ亡命中の石川三四郎の生涯と思想形成	68
第2節 ヨーロッパ・アフリカ帰国後の石川三四郎の生涯と思想形成	73
第3節 小括.....	76
第2章 石川三四郎の「土民生活」論	78
第1節 「土民生活」思想の形成.....	79
第2節 「土民生活」思想の理論と実践.....	83
第3節 「土民生活」思想と農本主義との差.....	87

第4節 小括.....	92
第3章 「土民生活」思想期における石川三四郎の教育思想.....	93
第1節 「土民生活」思想期における石川三四郎の道德観.....	93
第2節 「土民生活」思想期における石川三四郎の自然による教育.....	96
第3節 小括.....	99
第3部 東洋史研究・戦後社会運動期における石川三四郎の教育思想.....	104
第1章 東洋史研究・戦後社会運動期における石川三四郎の生涯と東洋史観.....	104
第1節 東洋史研究・戦後社会運動期の石川三四郎の生涯と思想形成.....	104
第2節 石川三四郎の東洋史研究への着目.....	108
第3節 石川三四郎の東洋史研究における東洋観.....	113
第4節 小括.....	119
第2章 東洋史研究・戦後社会運動期における石川三四郎の教育思想.....	120
第1節 東洋史研究・戦後社会運動期における石川三四郎の道德観.....	121
第2節 東洋史研究・戦後社会運動期における石川三四郎の教育観.....	123
第3節 石川三四郎の無政府主義運動.....	127
第4節 小括.....	131
終章.....	137
第1節 本研究の結論.....	137
第2節 今後の研究課題.....	140
参考資料.....	142
参考文献・引用文献一覧.....	149

序章

第1節 本研究の目的と問題の所在

①研究の目的

石川三四郎（1876-1956）は、明治、大正、昭和前期に社会運動家として活動した、日本の学校教育で語られることが少ない「忘れられた思想家」である。石川が「忘れられた思想家」として評価される要因として、同時代に活躍した武力的な社会運動を展開し人生の最後が劇的であった幸徳秋水（1871-1911）や大杉栄（1885-1923）らと比較して、石川の社会活動が地道でかつ、人間の理性に訴える啓蒙活動に従事していたため注目を浴びなかったことが挙げられる。しかし、啓蒙活動に力点をおいた石川の社会運動や論考は、混乱する日本社会や日本人にとって、人間としての生き方や人格のあり方、社会のあるべき姿を示し、また、ジャン=ジャック・ルソー（Jean-Jacques Rousseau,1712-1778）の社会思想を押さえた広義の教育的な活動であったとも評価することができる。そこで、本研究の目的は石川の生涯とその思想形成、教育活動や著作物や社会活動を通して教育思想を明らかにすることである。

②問題の所在

石川の教育に関する研究において、二つの課題が指摘できる。第一に、石川の教育に関する研究が、1904（明治 37）「小学教師に告ぐ」のみを取り上げて論じられている事が多い点である。第二に、石川をキリスト教社会主義者や無政府主義者として一面的に解釈された研究が多いことである。

第一に、石川の教育に関する研究の課題について取り上げる。近年、教育学における石川の研究としては、小田義隆の「明治社会主義者石川三四郎と教師のしごと」（2021 年）が挙げられる。それ以外の教育学研究において、石川の「小学教師に告ぐ」を中心に扱った研究は、坂本忠芳・柿沼肇編『社会運動と教育』（1974 年）、寺崎昌男・前田一男編『日本の教師 22 歴史の中の教師 1』（1993 年）、土屋基規『近代日本教育労働運動史研究』（1995 年）が挙げられる。これらの研究は、石川の「小学教師に告ぐ」を中心に検討し、明治期の社会主義者として社会主義運動の一環としての活動的な意義を認め、その上で当時の教師像の分析や影響について論じている。それに対し、小田の研究では、「小学教師に告ぐ」以外の石川の資料も検討しており、石川の活動によって教師の権利の獲得と発展

を実現する「教職員組合」の潜在的な思想を根付かせたと評価している。以上のように、教育学研究の分野で絞ると「小学教師に告ぐ」のみを取り上げたものが多く、2021年の小田の研究によってそれ以外の論考も扱われるようになったという状況である。

他方で、石川の「小学教師に告ぐ」以外に教育的な活動の価値に言及した研究としては、ユートピア研究の一環として石川を取り上げた西山拓『共同社会の構築と教育 包括的教育学の試み』（2011年）、社会臨床研究の一環として石川を取り上げた飯島勤「自学の系譜 (1) 石川三四郎の教育志操:『小学教師に告ぐ』をめぐって」(2012年)が挙げられる。この二本の研究では、石川は生涯において教育を重視していた活動を展開していたと指摘している。しかし、西山の研究においては、ユートピア研究の一環で石川を扱い、教育に関する記述は主題となっていない。また、飯島の研究は、石川の教育思想については自己教育という結論を出している一方で、石川の思想形成や当時の時代背景や教育の実際からは論じられていない点がある。いずれにせよ、石川の教育に関する研究としては、「小学教師に告ぐ」以外の論考や社会活動も押さえて論究する必要がある。

第二に、石川を社会主義者(初期社会主義、キリスト教社会主義を含む)の立場として、又は無政府主義者の立場として、一面的な解釈をした教育学研究や石川研究が見られる課題について取り上げる。先の教育学研究においても、「明治期の社会主義者として社会主義運動」と論じられている傾向が強い。そこには、石川の一人の思想家としての評価が反映されていない問題点があるように思われる。石川をキリスト教社会主義者や無政府主義者として評価する研究が多い要因として、石川の著作物は膨大であり、時代ごとに主義や主張が異なるため、研究上の困難さが推察される。この困難さの背景となる石川の生涯について簡潔にまとめると以下のような特徴が挙げられる。

石川は、1913(大正2)年に日本で起きた大逆事件¹に端を発する社会主義者弾圧などの影響から、ヨーロッパとアフリカに亡命することになる。亡命以前の石川にはキリスト教社会主義的な立場をとった論考や発言が多くみられたが、1920(大正9)年にヨーロッパとアフリカから帰国した後は「土民生活(デモクラシー)」思想に基づく無政府主義的な立場をとるような論考が多く見受けられるようになる。一方で、帰国の1年前である1919(大正8)年から石川は古事記の神話に関する研究を始めて、1935(昭和10)年以降から本格的に東洋史の研究に専念することになる。この石川の東洋史研究の内容は1930年代以降の出版物から読み取れる。

このように、石川は時代が進むごとに主義、主張や研究する内容の傾向が変わっていることから、石川研究の特徴として、石川の一生涯を扱う研究は少なく、石川の一時代、限定的な立場を扱う研究が多くみられる。しかし、石川の思想家としての活動は多岐にわたり、彼の思想の本質を押さえるには一生涯を追っていく必要があるように考えられる。そもそも、石川の魅力とは、鶴見俊輔が述べるように「日本の知識人の世界における右翼と左翼とは、日本の国家権力追随の文化人と海外の国家権力追随の文化人というわくぐみの外に出る」²者と評価できる点にある。この観点から見て、先行研究において石川の一生涯を追った数少ない研究として、西山の研究が挙げられる。西山の研究手法は石川の生涯を追って、石川のユートピア的な社会運動論の意義を示している。本研究は、鶴見の評価を踏まえ、石川を論じる上では、キリスト教社会主義者や無政府主義者の枠組みに囚われて論じるのではなく、西山研究の手法のように石川という人物の一生涯に焦点を当てていく必要性がある。

第2節 石川三四郎に関する先行研究の検討

石川の先行研究には、人物研究から石川の周辺人との関わり、彼のデモクラシー論である「土民生活」思想やそれに付随する形で非戦論やユートピア論について研究されたものがあり、それらについては幅広い蓄積がある。さらに、石川の一次資料に関しては、文献研究を進めるために十分な蓄積があると言える。ここでは、石川を対象とした先行研究を概観し、彼の活動の特徴を論じる。

まず、石川の一次資料の蓄積環境について整理していく。石川の一次資料を体系的に収録したものとして1977（昭和52）年から1978（昭和53）年に出版された『石川三四郎著作集』全8巻が挙げられる。この著作集の第1巻から第4巻までは石川が新聞や雑誌に寄稿した記事や論文が時代ごとにまとめられている。第5巻には石川が出版したパンフレットなどが、第6巻には石川の回想をテーマとしたものを収録し、第7巻は書簡がそれぞれに収録されている。第8巻には石川の『自叙伝』が収録されており、彼の生涯を論じるにあたっては重要な一次資料となる。

しかし、この著作集には石川の執筆したものがすべて収録されているわけではなく、特に彼が出版した数多くの書籍などの収録は少ない。石川の代表的な書籍を収録したものに

は1976（昭和51）年に出版された『石川三四郎集』や、それと同年から1984（昭和59）年にかけて出版された『石川三四郎選集』全7巻³が挙げられるが、これらも彼の代表的な書籍を収録したに留まっている。『石川三四郎選集』や『石川三四郎集』に収録されていない石川の出版されている書籍は、国立国会図書館デジタルコレクションや、Kindle版で補完できる状況にある。これらの状況から見て『石川三四郎著作集』が出版された1970年代に比べて、今日では石川の一次資料を補完的に収集して文献研究を行う環境が整っていると見える。

次に、石川の人物研究や「土民生活」思想の先行研究について概観していく。石川の生涯や思想の研究としては、板垣哲夫⁴や米原謙⁵、松岡文平⁶、松村寛之⁷、秋山清⁸の研究が挙げられる。第一に、板垣はおおまかに明治期、大正期、昭和期に区分して石川の思想、心理構造の変遷を追っており、さらに、それぞれの時代における彼の思想の特徴を明らかにしている。第二に、米原の研究は、石川の亡命期の活動を明らかにしている。亡命期の石川の活動については、米原の研究に加えて1922（大正11）年に石川が出版した『放浪八年記』を用いることによってその全容を押さえることができる。また、研究論文ではないが石川の人物像を追って書かれた伝記として北沢文武⁹や大原緑峯（大沢正道）¹⁰のものがある。特に、北沢の著作は、石川の周辺人の証言や資料を中心に石川の生涯をまとめているため、資料的な価値は高い。

つづいて、石川と彼の周辺人との交流を扱った研究は蓄積が多い。ヨーロッパ、アフリカ亡命以前と帰国後で、石川は深く関わった人物が異なるため、彼の周辺人の研究は多岐に渡っている。まず、明治時代の周辺人の関わり方の研究として、石川がキリスト教の洗礼を受けた海老名弾正（1856-1937）との関連を研究した辻野功¹¹や洪伊杓¹²、山泉進¹³、太田雅夫¹⁴、田中正造（1841-1913）を中心に幸徳や堺利彦（1871-1933）との関連について研究した林彰¹⁵や後藤彰信¹⁶、木下尚江（1869-1937）との関連について研究した吉岡諒¹⁷、木下英司¹⁸、内山愚童（1874-1911）との関連について研究した茂木恵太¹⁹がそれぞれ挙げられる。これらの研究では、石川がキリスト教の洗礼を受けた経緯や、石川と初期社会主義者との関わりとそこでの活動について明らかにされている。

大正時代以降の周辺人との関係についての研究としては、エドワード・カーペンター（Edward Carpenter, 1844-1929）との関わりについては稲田敦子の研究²⁰が、ルクリュ家との関わりについては杉淵洋一²¹、野澤秀樹²²、島崎藤村（1872-1943）との関わりについ

では赤尾利弘²³、望月百合子（1900-2001）との関わりについては岡田考子²⁴の研究が挙げられる。これらの研究は、石川が「土民生活」思想に着目し、無政府主義的なユートピア思想を抱く経緯やその理論について明らかにされている。

ヨーロッパ、アフリカから帰国した後に石川が発表した「土民生活」思想については、多くの研究者がその内容について研究している。先行研究としては竹内則之²⁵、平島敏幸²⁶、森元斎²⁷、宮原浩二郎²⁸、山口晃²⁹、木村直弘³⁰、坂井健³¹、岩崎正弥³²、小澤萬記³³、中尾正己³⁴、三原容子³⁵が挙げられる。これらの研究では「土民生活」思想を革命理論として位置づけ、その構造と生成、活動内容や「農本主義」との関係について論究している。

最後に、石川の歴史研究、晩年の無政府主義運動について研究したものとして、山崎好裕³⁶、川上哲正³⁷、綱澤満昭³⁸が挙げられる。これらの研究によって、石川が日本や中国に視点を置いて、歴史研究を行ったことで、日本の無政府主義者の中においても独自の立ち位置を占めることになったと指摘されている。また、西山³⁹の研究においても、石川の古代東洋史研究を評価している。西山は『東洋文化史百講』の評価として、「石川は社会教育における人文学教育、人文学教育の原型づくりに貢献したといえることができる。出版物『東洋文化史百講』と、それを基礎とした社会啓発の試みは、日本社会教育史上の遺産ともいえるものである」⁴⁰と論じている。

先行研究の検討の結果、石川の思想と活動の特徴として、ヨーロッパとアフリカに亡命するまでのキリスト教社会主義者としての活動、亡命の帰国後に石川が発表した「土民生活」思想とその活動、そして東洋史研究と戦後の無政府主義的な社会運動の活動の三つの中心的な思想と活動が見られた。本研究ではこの三つの中心的な思想と活動をそれぞれ、キリスト教社会主義期、「土民生活」思想期、東洋史研究・戦後社会運動期の三期に分けて石川の一生涯を追って論じる。石川の一生涯を追う研究には、板垣のように明治時代、大正時代、昭和時代など時代ごとに分けて論じた論考は見られるが、三つの思想と活動の特徴に分けて論じた研究は管見の限り見当たらない。そこで本研究では、この三つの思想と活動の特徴を捉え、それぞれの教育思想や教育的な活動を論じていくことにより、彼の一貫した「人格の独立」に基づいた教育思想が明らかになると考えられる。

第3節 研究の方法と本論文の構成

本研究は文献研究の手法を基本とする。基礎文献としては、石川の文献を幅広く収録している『石川三四郎著作集』全8巻を中心に据え、石川の著作や同時代人の一次資料を用いる。

本研究では以上の資料を中心に3部構成で論じていく。第1部では石川が誕生した1876（明治9）年からヨーロッパとアフリカに亡命するまでの1913（大正2）年までをキリスト教社会主義期として扱う。第1章ではキリスト教社会主義期としての石川の生涯とその思想形成を論じる。第2章では、キリスト教社会主義期の石川の中心的な活動の土台となった、新聞記者としての活動していた社会運動と社会主義との出会いやキリスト教者との関連、その思想的な差異について論じていく。第3章では石川の道徳観、「小学教師に告ぐ」の検討、『虚無の靈光』の「人格の独立」を中心に扱い石川の教育思想を論じる。

第2部では、石川がヨーロッパ、アフリカに亡命した1913（大正2）年から、1931（昭和6）年の満州事変頃までを「土民生活」思想期として扱う。第1章では、「土民生活」思想家としての石川の生涯とその思想形成をまとめる。第2章では、石川の「土民生活」思想の体系的な著書である『近世土民哲学』を中心に、「土民生活」思想の形成過程を追いその上で理論や実践をそれぞれ論じる。第3章では、社会背景として「土民生活」思想期における道徳観を扱い、その上で「土民生活」思想から見られる自然による教育について論じる。

第3部では、1931（昭和6）年から石川が没する1956（昭和31）年までに焦点を当て、これを東洋史研究・戦後社会運動期として扱う。第1章では、東洋史研究や戦後社会運動家としての石川の生涯をまとめ、石川が「土民生活」思想から東洋史研究に傾倒していく過程を『ダイナミック』を用いて論じ、石川の東洋史研究の東洋観を検討する。第2章では、「滅私奉公」に対して石川の個人主義に重きを置いた道徳観を論じ、人格や生活を喪失した教育者に対しての教育観を論じる。最後に戦後の無政府主義運動の教育的側面を論じる。

-
- ¹ 本稿で扱う大逆事件とは、1910（明治43）年に明治天皇を暗殺する計画が明るみに出て、社会主義者を逮捕・起訴した幸徳事件のことを指す。
- ² 鶴見俊輔「解説」鶴見俊輔編『石川三四郎集』近代日本思想体系 16、筑摩書房、1976年、461頁。
- ³ 『石川三四郎選集』に収録している著作は、第1巻は『古事記神話の新研究』、第2巻は『東洋文化史百講 上』、第3巻は『東洋文化史百講 下』、第4巻は『西洋社会運動史完全版』、第5巻は『哲人カーペンター』、『エリゼ・ルクリュ思想と生涯』、第6巻はエリゼ・ルクリュ著・石川三四郎訳『地上論』、第7巻は『一自由人の放浪記』、『浪』である。
- ⁴ 板垣の研究としては、「石川三四郎（一八七六～一九五六）における思想的出発」『歴史』通号68、1987年、94-114頁・『新紀元』廃刊（明治39年11月）後における石川三四郎の思想『日本歴史』通号470号、1987年、72-96頁・「石川三四郎「虚無の靈光」の思想」『日本歴史』通号466、1987年、90-93頁・「大正期における石川三四郎の思想」『山形大学史学論集』第8号、1988年、1-42頁・「昭和期における石川三四郎の思想」『山形大学紀要 人文科学』第11巻第4号、1989年、403-450頁が挙げられる。板垣は、石川の革命論について「私欲から帰結する対立、支配という政治そのものを否定する志向を潜在させているのであり、そのような政治の否定は、神への帰属という根本的な現世制の否定を通じて」いたことを指摘した。板垣は、石川の革命論をより深化、具体化していった点を「大正期における石川三四郎の思想」、「昭和期における石川三四郎の思想」にて論じた。引用は、前掲「石川三四郎（一八七六～一九五六）における思想的出発」112頁。
- ⁵ 米原の研究としては、「亡命時代の石川三四郎—その周辺」『阪大法学』第48巻第3号、1998年、829-855頁・「第一次世界大戦と石川三四郎—亡命アナキストの思想的軌跡」『阪大法学』通号182号、1996年、199-320頁・『日本的「近代」への問い—思想史としての戦後政治』新評論、1995年が挙げられる。米原の研究では、石川のヨーロッパ・アフリカ亡命期の活動を詳細に論じられている。また、石川の日本人観はリュドヴィック・ノドーの『現代日本』の影響を受けているのではないかと示唆している点が特徴である。米原によるとノドーは「日露戦争のときにロシア軍に従軍したフランス人記者らしい」。引用は前掲「第一次世界大戦と石川三四郎—亡命アナキストの思想的軌跡」314頁。
- ⁶ 松岡の研究として、「石川イズムの形成とその特質」『黒の手帖』第7号、1969年、46-64頁が挙げられる。松岡の研究では、石川の思索を丁寧を追って論じられた。
- ⁷ 松村の研究として、「石川三四郎と「愛国心」」『大阪府立大学人文学論集』第39巻、2021年、13-35頁が挙げられる。松村の研究では、石川が執筆した「無政府主義宣言」

(未発表)が石川の愛国心をめぐる思想的集大成として起草されたものとして論じられた。

- ⁸ 秋山の研究として、「解説」石川三四郎『虚無の靈光』三一書房、1970年、303-315頁が挙げられる。秋山の研究では、石川と直接行動論を唱えた幸徳と大杉らと比較し、石川の農村的生活への傾斜思考に特徴がみられたと論じられた。
- ⁹ 北沢の著作としては、『学問と愛、そして反逆 石川三四郎の生涯と思想 上』鳩の森書房、1974年・『愚かな彼、愚かな道 石川三四郎の生涯と思想 下』鳩の森書房、1974年・『帝力、我に何かあらんや 石川三四郎の生涯と思想 完結編』鳩の森書房、1974年・「石川三四郎伝」執筆余話『初期社会主義研究』第18号、2005年、18-29頁が挙げられる。
- ¹⁰ 大沢の著作としては、「石川三四郎のなかの三つの問題」『初期社会主義研究』第18号、2005年、38-49頁・「石川三四郎年譜(第二版)」同上書、161-180頁・『石川三四郎—魂の導師』リポート社、1987年・「石川三四郎論」『石川三四郎集』筑摩書房、1976年、423-458頁が挙げられる。大沢の著作で石川の伝記のように書かれているものが『石川三四郎—魂の導師』である。また、大沢の研究では、石川研究の基礎が築かれ、その内容として石川の反政治主義について論じられた。大沢は、石川の反政治主義について「政治と完全に断絶して、政治の圏外に、政治を取り巻く別の世界を築きあげ、それによって政治そのものを骨抜きにしていく方向」を目指したとして、田中正造と同様な反政治主義を抱いていたことを明らかにしている。引用は、前掲「石川三四郎論」428頁。
- ¹¹ 辻野の研究としては、「石川三四郎—海老名弾正との関連において—」『キリスト教社会問題研究』通号23号、1975年、83-115頁が挙げられる。辻野の研究では、石川と海老名との接触から対立に至るまでの経緯が論じられた。
- ¹² 洪の研究としては、「海老名弾正の「植民地民」理解：海老名弾正の『土人』と吉野作造・石川三四郎の『土民』の比較を中心に」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第50号、2018年、123-155頁が挙げられる。洪の研究では、海老名の「土人」の概念と比較して、石川の「土民」の概念は「世界人類」の平等の意味が含まれている点が論じられた。
- ¹³ 山泉の研究としては、「初期社会主義と Free Love—石川三四郎の「自由恋愛私見」をめぐって」『初期社会主義研究』第18号、2005年、87-108頁が挙げられる。山泉の研究では、内にして外なる存在を掘り当てる旅こそが、石川思想の独自性を出している点が論じられた。
- ¹⁴ 太田の研究としては、「石川三四郎と本郷教会・平民社」『初期社会主義研究』第18号、2005年、58-75頁が挙げられる。太田の研究では、石川の本郷教会での活動と海老名との口論について論じられた。
- ¹⁵ 林の研究としては、「初期社会主義者たちと田中正造—幸徳秋水・木下尚江・石川三四郎・福田英子を中心に—」『田中正造と足尾鉍毒事件研究』第15号、2009年、37-52頁・

「石川三四郎の修養主義批判」『初期社会主義研究』第 18 号、2005 年、131-136 頁が挙げられる。林の研究では、石川の修養主義批判の目は体制側に属する、接近しつつある道学者や教育者らが説く修養主義を批判したことが論じられた。

¹⁶ 後藤の研究としては、『石川三四郎と日本アナーキズム』同成社、2016 年・「田中正造と石川三四郎」小松裕・金泰昌編『田中正造：生涯を公共に献げた行動する思想人』東京大学出版、2010 年、73-80 頁・「石川三四郎と吉野作造の思想的軌跡とその交差一本郷教会時代と石川の帰国をめぐる」『国史談話会雑誌』第 47 号、2007 年、75-92 頁・「特集『新紀元』—社会主義と基督教 石川三四郎の神観念と統合原理の模索—『新紀元』から一九三〇年代へ」『初期社会主義研究』第 19 号、2006 年、74-83 頁・「石川三四郎の思想形成と伝統思想」松永昌三編『近代日本文化の再発見』岩田書院、2006 年、81-110 頁・「石川三四郎の自由恋愛論と社会構想一本郷教会と平民社における自由恋愛論争と国家魂論争」『初期社会主義研究』第 18 号、2005 年、76-86 頁が挙げられる。後藤の研究によって、個の変革と社会の変革の同時遂行を可能ならしめる原理を模索していることが論じられている。

¹⁷ 吉岡の研究としては、「石川三四郎と木下尚江の思想交渉—社会運動と内省のはざままで」『初期社会主義研究』第 26 巻、2016 年、217-234 頁が挙げられる。吉岡の研究では、石川のキリスト教が社会主義の建設に必然的に向かうと確信していたことが論じられた。

¹⁸ 木下の研究としては、「石川三四郎のキリスト教社会主義形成とその意義」『比較思想研究』第 30 号、2003 年、20-23 頁が挙げられる。木下の研究では、石川の実現を自由・平等・友愛の精神的な要素を重視したと論じられた。

¹⁹ 茂木の研究として「石川三四郎の思想形成と仏教—内山愚童との関係を契機として—」『早稲田大学大学院社会科学部研究科社会学部論集』第 27 号、2016 年、53-68 頁が挙げられる。茂木の研究によって、石川の初期の思想形成において仏教からの影響を受けており、そこに内山がかかわっていることが論じられた。

²⁰ 稲田の研究としては、「先駆的共生思想の日英比較研究：エドワード・カーペンターを中心に」『2010-2012 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書』、2013 年・「近代文明批判における『陰』認識：石川三四郎とエドワード・カーペンターの思想的接点をめぐって」『聖学院大学論叢』第 24 巻第 2 号、2012 年、55-64 頁・『共生思想の先駆的系譜 石川三四郎とエドワード・カーペンター』木魂社、2000 年・「内発的発展論の比較思想的考察：エドワード・カーペンターと石川三四郎の思想的接点をめぐって（II）」『聖学院大学論叢』第 12 巻第 2 号、2000 年、43-51 頁・「『養芽論』における内発的発展論：エドワード・カーペンターと石川三四郎の思想的接点をめぐって（I）」『聖学院大学論叢』第 11 号第 3 号、1999 年、13-24 頁・「石川三四郎における歴史意識の基底—エドワード・カーペンターとの接点をめぐって—」『聖学院大学論叢』第 7 巻第 2 号、1995 年、1-12 頁・「非戦論の一系譜—石川三四郎の土民思想—」古典共同研究会編『古典共同研究会論集：関屋光彦教授退任記念』古典共同研究会、1980 年、133-144 頁が挙げられる。稲

田の研究によって、石川とカーペンターの交流や思想的な影響、認識の共通点について明らかになっている。稲田は両者の共通点について、「第一に『強権資本主義』文明批判、第二に対外侵略批判、第三に現実の生活破壊への批判である。これら三点は単独の問題ではなく、相互に関連を持っているものである」として、近代文明の批判として指摘する先駆者と論じられている。引用は、「近代文明批判における『陰』 認識：石川三四郎とエドワード・カーペンターの思想的接点をめぐって」61頁。

²¹ 杉淵の研究としては、「ヨーロッパ体験が開示する石川三四郎の人的ネットワークルクリュ家との交流を中心として」『社会文学』第33号、2011年、178-190頁が挙げられる。杉淵の研究では、ヨーロッパの社会運動に身を投じ、その先端にいた人物達との交流があった点に特徴があると論じられた。

²² 野澤の研究としては、「石川三四郎におけるエリゼ・ルクリュの思想—その受容と差異—」『地理学評論』第79巻第14号、2006年、837-856頁・「エリゼ・ルクリュの地理学とアナキズムの思想」『空間・社会・地理思想』第10号、2006年、20-36頁が挙げられる。野澤の研究では、石川の思想形成に影響があった人物であるエリゼ・ルクリュの思想を明らかにし、その上で石川とエリゼ・ルクリュの思想の受容と差異について論じられた。野澤は、エリゼの思想の受容と差異について「石川三四郎はエリゼ・ルクリュと世界観、宇宙観を共有しながらも、一方で彼独特の人間観、人生観(無常、虚無、厭世)による世界観、宇宙観を有していたということであろう」と指摘した。引用は、「石川三四郎におけるエリゼ・ルクリュの思想—その受容と差異—」852頁。

²³ 赤尾の研究としては、「石川三四郎の見た滞仏中の藤村」『亜細亜大学教養部紀要』第37号、1988年、39-53頁が挙げられる。赤尾の研究では、石川の視点で滞仏中の島崎の様子が論じられた。

²⁴ 岡田の研究としては、「望月百合子にみる石川三四郎の影響」『初期社会主義研究』第18号、2005年、109-120頁が挙げられる。岡田の研究では、望月の教育は、扇動者ではなく教育者であろうとする活動が見られたことを論じられた。

²⁵ 竹内の研究としては、「石川三四郎の『土民生活(デモクラシー)』思想—その生成と構造をめぐって」『武蔵大学人文学会雑誌』第12巻第1号、1980年、39-70頁が挙げられる。竹内の研究によって、石川の「土民生活」の革命理論の構造とその生成について論じられた。竹内は、石川の革命理論について、社会主義革命を決して単なる政治的、制度的変革にとどめるのではなく、それを担う人間自身の精神的、文化的変革をも要請していると論及した。

²⁶ 平島の研究としては、「石川三四郎の社会哲学」『学習院史学』第32号、1994年、35-49頁・「石川三四郎の「土民思想」」『学習院大学文学部研究年報』第37号、1990年、95-130頁、「石川三四郎に於ける社会主義とキリスト教」『学習院大学文学部研究年報』第36号、1989年、43-75頁が挙げられる。平島の研究では、石川为社会美学とは石川独自の「人間的科学」に基づく社会哲学であることが論じられた。

- ²⁷ 森の研究としては、「ロシア革命からみた石川三四郎における『土民生活』について」『初期社会主義研究』第 27 号、2017 年、35-47 頁が挙げられる。森の研究では、ロシア革命によって強権的態度から逸脱していくような思考と実践が「土民生活」であることが論じられた。
- ²⁸ 宮原の研究としては、「社会美学のコンセプト (3) —石川三四郎の社会交響楽=複式網状組織—」『関西学院大学社会学部紀要』第 108 号、2009 年、29-49 頁が挙げられる。宮原の研究では、社会と美を正しく結びつけることの大切さを示したことが論じられた。
- ²⁹ 山口の研究としては、「特集石川三四郎 土民生活—放浪と居場所のふれあうところ」『初期社会主義研究』第 18 号、2005 年、50-57 頁・「モロッコの石川三四郎とその後：地理的環境論への道」『近代日本研究』17 号、2000 年、177-223 頁が挙げられる。山口の研究では、石川の「土民生活」論の空間性に持たせたかったものは、「日々住民の営みを静かに支えてくれる、魂の復興を根差すものである」ことが論じられた。引用は、「特集石川三四郎 土民生活—放浪と居場所のふれあうところ」56 頁。
- ³⁰ 木村の研究としては、「〈摩擦〉〈震動〉〈感染〉—宮澤賢治『セロ弾きのゴーシュ』におけるトルストイの芸術論と石川三四郎の動態社会美学のインターフェイス—」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第 10 号、2011 年、55-84 頁が挙げられる。木村によって、「石川らからの思想的影響関係から説明されうるし、〈震動〉〈感染〉といったキーワードが石川らによって全て大自然に根差す概念とされていたこと」が論じられた。引用は、「〈摩擦〉〈震動〉〈感染〉—宮澤賢治『セロ弾きのゴーシュ』におけるトルストイの芸術論と石川三四郎の動態社会美学のインターフェイス—」79 頁。
- ³¹ 坂井の研究としては、「石川三四郎と宮沢賢治—『非進化論と人生』と『農民芸術概論』—」『宮沢賢治研究 annual』第 14 巻、2004 年、129-147 頁が挙げられる。坂井の研究では、宮沢の『農民芸術概論』は石川の講演や著作からの影響を受けていた可能性を論じられた。
- ³² 岩崎の研究としては、『大正・昭和前期農本思想の社会史的研究』京都大学博士論文、甲第 5864 号、1995 年・「石川三四郎の『土民生活』と農本主義—権力への抵抗思想—」『農林業問題研究』第 24 巻第 2 号、1988 年、66-73 頁が挙げられる。岩崎の研究によって、石川の「土民生活」思想の位置づけを大正期昭和期の農本思想に基づいた活動者との比較を通してその特徴を論じられた。
- ³³ 小澤の研究としては、「石川三四郎の反進化論」『高知大学学術研究報告、人文科学』第 43 号、1994 年、165-172 頁が挙げられる。小澤の研究によって、石川の進化論の否定の内容が「「科学」なるものによって「当為」が決定されうるというイデオロギー」であったことが論じられた。引用は「石川三四郎の反進化論」171 頁。
- ³⁴ 中尾の研究として、『大正文人と田園主義』近代文芸社、1996 年が挙げられる。中尾の研究では、石川の農園における共同生活の企図は、未来を託す「社会運動」の核となることを期待し、文化人の集合による文化運動を期したことが論じられた。

- ³⁵ 三原の研究として、「農本的アナーキズム」 本山幸彦教授退官記念論文集編集委員会『日本教育史論叢』 思文閣出版、1988 年、471-490 頁が挙げられる。三原の研究では、石川の人間観が西欧の個人主義を基盤とする限り、日本人の国民性に対する評価は常に低いことを論じられた。
- ³⁶ 川崎の研究としては、「大陸と反逆：宮崎滔天と石川三四郎のアナーキズム」『福岡大学経済学論叢』 第 67 巻第 1 号、2022 年、1-12 頁が挙げられる。川崎の研究によって、石川の『古事記神話の新研究』では、日本に限らず世界的視座を持つ研究の一端であったことが論じられた。
- ³⁷ 川上の研究としては、「石川三四郎のみた中国」『初期社会主義研究』 第 18 号、2005 年、137-160 頁が挙げられる。川上の研究では、日本のアナキストの活動の中において、在野にあって中国の歴史自体への考察を進めた点に独自の視点があった点が論じられた。
- ³⁸ 綱澤の研究としては、『日本近代と民族的原質』 風媒社、1976 年の一つの章に「石川三四郎の思想」とある。綱澤の研究では、石川は政治的な天皇制を無限に相対化する透明性だけはもっていたことが論じられた。
- ³⁹ 西山の研究としては、『協同社会の構築と教育 包括的教育学の試み』 シーエーピー出版、2011 年、『石川三四郎のユートピア構想—近代日本の知識人による理想社会論構築と社会改革の試み—』 早稲田大学博士論文、甲第 2763 号、2009 年、『石川三四郎のユートピア—社会構想と実践—』 冬至書房、2007 年、「特集石川三四郎 ユートピアンとしての石川三四郎—知識人の田園回帰と社会実験」『初期社会主義研究』 第 18 号、2005 年、121-130 頁、石川三四郎の非進化論—共生社会の探求』『社会思想史研究』 第 27 号、2003 年、118-135 頁、「石川三四郎の理想社会論—新興共同体の連帯について—」『ソシオサイエンス』 第 8 巻、2002 年、227-240 頁が挙げられる。
- ⁴⁰ 前掲書『石川三四郎のユートピア構想—近代日本の知識人による理想社会論構築と社会改革の試み—』 36 頁。

第1部 キリスト教社会主義期における石川三四郎の教育思想

第1章 キリスト教社会主義期の石川三四郎の生涯と思想形成

本章では、石川三四郎が誕生した 1876（明治 9）年からヨーロッパとアフリカに亡命するまでの 1913（大正 2）年までをキリスト教社会主義期として、石川の生涯とその思想形成をまとめ、彼の活動範囲を追っていく。また、キリスト教社会主義期の石川は、精神面が未熟で多感であったため、精神的動向も押さえて論じていく必要がある。石川の精神面については、「私の精神史」や『自叙伝』がある。特に、「私の精神史」は精神面や感情面が詳細に振り返った著作となっている。「私の精神史」は『思想の科学』から生活信条の執筆依頼を受けて世に出されたものである。これらに加えて、同時期の石川の精神面を研究した、板垣哲夫の「石川三四郎（一八七六～一九五六）における思想的出発」や西山拓の『石川三四郎のユートピア構想—近代日本の知識人による理想社会論構築と社会改革の試み—』がある。これらの先行研究も踏まえて、石川の思想形成を追っていく。

ただし、キリスト教社会主義期の石川の思想形成において、特に影響が大きいキリスト教徒と社会主義者との関係については、第 2 章で扱うこととする。

第1節 キリスト教社会主義運動に投じるまでの石川三四郎の生涯と思想形成

本節では、石川が誕生した 1876（明治 9）年から朝報社を退社する 1903（明治 36）年までの期間を扱う。石川は平民社に入社した後に、本格的に執筆、言論活動を展開していくため、朝報社退社までの期間とした。

石川は 1876（明治 9）年に、埼玉県児玉郡山王堂村（現在の埼玉県本庄市）の五十嵐家の三男として生まれた。彼は 1879（明治 12）年に、3 歳で近所の相続者がいなかった石川家¹の家督相続人となり、その後徴兵を逃れる目的で石川の姓を名乗るようになったが、引き続き兄たちと同じ五十嵐家で生活を送っていた。1882（明治 15）年の春、石川は 6 歳で本庄小学校²に入学し、1890（明治 23）年に本庄小学校高等科を卒業したが、1884（明治 17）年に地方の財政難から本庄町児玉郡立児玉中学校が廃校になったために進学先がなくなってしまった。また、1884（明治 17）年上野・高崎駅間の鉄道の開通に伴い、実家である五十嵐家の船着問屋は経済的に打撃を受け、本庄町に運送店を開いたものの失敗に終わった。晩年の石川は『自叙伝』にて、この一連の事件を「明治維新並びに交通機関の発達、

即ち鉄道の敷設に伴う経済開発によって滅ぼされた私の故郷」³と振り返っている。このことから、明治政府の経済開発は当時の山王堂村に対して大きな打撃を与えていたと石川は認識していたようである。

五十嵐家が苦境に陥っていてもなお、石川の父である五十嵐九十郎（1835-1896）は、子供らの教育に対して熱心であった。石川は『虚無の靈光』の「序（我が家・我が村）」にて次のように振り返っている⁴。

殊に此苦境にありながら、父の最も心を注がれたのは我等の教育であつた。次兄が十一二歳、予が八九歳の頃、父は我等が爲に特に漢學の家庭教師を雇ふて四書五經、三字經、大統歌、杯といふ書物を講習せしめた。又、小學校が夏季休校の折には必ず學校教師を聘して我等に夏期學校を開き、村内の子弟と共に我等に學業を授け、以て休學中も尚ほ學を廢せしめざらんことに注意した

石川は父の雇った家庭教師や教員から漢学を習い、学校が休校中でも学業をとめることなく学べる環境にあった。また、石川は老母の寺子屋的な教育によって情操や知識が培われたと振り返っている。石川は家庭が困窮の立場にある中でも、教育を疎かにしなかった父や老母の姿から、教育という行為の重要性を感じるきっかけになったのであろう。ただし、石川はこの幼少期の教育について「自然界に対する知識がこのよう（山に木が生えていることや、東京湾の海面の広大さ）にあわれにも貧しかったのは、全く当時の教育法の欠かんであった」⁵と振り返っている。石川にとって、当時の教育の傾向として自然界そのものに対する教育を疎かにするという印象があったと言える。

幼少年期の頃、石川は病弱であり、神経質、癩癩持ちでもあり、また内気、引込思案でもあった。他の子どもたちとはあまり遊ばず、一人で本を読んで過ごすことを好んでいた。この頃の生活を石川は「私の病弱から来た神経質の結果で、多くの人と雑居してその摩擦を受けるに堪えなかったために相違いありません」⁶と回顧している。それに対して、少年時の同年輩の者の目には、石川は「とてもあばれん坊と一緒に遊んで居っても、こわかった」⁷と映っており、「平和な朗らかな人間ではなかった」⁸のである。このことについて板垣哲は「外界に対し、繊細で傷つきやすい自我を防衛しようとして、閉鎖的に内向するとともに、傷つけやすさを隠蔽するために攻撃的態度を顕示しているのである」⁹と指摘している。

また、石川の内向性を助長させた原因として、五十嵐家の使用人にすぎない石川家に養子に出されたことも影響していると考えられている¹⁰。石川は 20 歳近くなるまで石川という姓を自ら用いることはなく、親密であった福田英子（1865-1927、旧姓は景山である。以下、福田（英）と記す）が「五十嵐さん、五十嵐さん」と石川を呼んでくれたことに、嬉しかったと述べている¹¹。このことから、板垣は「石川にわたる思想形成も、幼少年期における自我防衛としての内向性獲得の延長上における営為としてみることができる」¹²と述べている。

1890（明治 23）年、石川は 14 歳の時に茂木虎次郎（1864-1928、後に佐藤虎次郎と名乗る）の誘いもあって実父に伴われて上京することになった。そして、石川は同郷の自由党員である茂木と橋本義三（生没年不明、後に粕谷義三と名乗る）が共同生活をしていた家の玄関番をしながら、福音教会（現在の詳細は不明）で英語を勉強し、また、山本芳翠（1850-1906）の画塾に通うなどして教養を身につけ始めた。

下宿先には中島信行（1846-1899）らをはじめ多くの自由党員が頻りに集まって、社会問題や財産平均論、権力闘争の議論を沸騰させていた。石川は、茂木からアメリカで見聞したシカゴの無政府主義者の大ストライキの物語を聞いて、「私は少年の血を湧かしたものです」と述べている¹³。これらの討論を聞いていた石川は、次第に社会問題と、政治運動に関心を持つようになった。

その後、石川は茂木らと同じく自由党員の福田友作（1865-1900）の書生になり、その妻の福田（英）とも親しくなった。この時期の石川は、帝国教育会文学会、国語伝習所を経て、哲学館（現在の東洋大学に当たる）に入学したが、生活環境の悪化により中退し、1895（明治 28）年に帰郷することになった¹⁴。

上京した際の石川は、哲学や文学を中心に学んでいた。幼少年期からの内向性の延長上において、生活の苦しさ、急進主義的政治運動の環境はかえって内面における思想の追及を強めたと考えられている¹⁵。このことについては石川自身も次のように述べている¹⁶。

こうした先輩の感化によって私は政治運動、社会運動に興味を持つようになったに相違ないが、その後の研究の題目は却って思想の方面に選ばれた。老儒根本通明先生の論語や孟子の講筵に侍して儒教を学び、次いで今の東洋大学の前身、哲学館に入学して、極めて初歩の哲学的研究に没頭した。それは、十六、七歳から十八歳までの期間であったが、私は文字通りそれに没頭した。その時分川上音

二郎の書生芝居を観たことがあったが、川上のステージにおける憤慨悲憤の科白の中に、学者のいうように、この地球が太陽と衝突して、粉みじんに砕けてしまえばよい、というような一句があった。この一句は私の心に異常な衝戟を与えた。

この時期の石川の状況は、『自由新聞』が分裂したのを受けて茂木らの家から福田家に預けられたが、その家も離散し進退が窮まっていた。その時に石川は川上音二郎の科白を聞いて「自分の現在の窮境どころではない、地球そのものが無くなってしまえば万事休すだ。(中略)川上の科白を聞いて憂鬱など吹飛んでしまった」¹⁷と記すほど印象深いものとなっている。

また、哲学館での在学期間は1年だったが、このことについて石川は「ただ勉強して立身出世をすることのみを考えていた少年に何か思索の新しい窓が開けたのである」¹⁸と述べており、この時期に思想の一転機が訪れたのである。その内容は「「愛」だとか「仁」だとかという題目で心を砕くようになったのも、この時代からであった。ソクラテスの「汝自身を知れ」ということと、地球そのものの運命とを結びつけて、我自身のはかなき存在に想到し、自分自身が粉みじんに崩潰するようになったこともあった」¹⁹というものである。石川は自身の破滅と地球の破滅を重ね合わせることにより、虚無的傾向に陥っている。このことについて板垣は、「思想の追及は、自己と世界との脆弱さ、破滅の認識へと徹底され、また「仁」、「愛」といった、他者との深い結びつきを希求するに至っているのである。この虚無的傾向と、それに対置される「愛」の結合の希求とは、以後石川の思想追求の核心となっていると考えられる」²⁰と論述している。

石川が上京している間の1891(明治24)年に、石川の兄たちが中心になって、新県道の整備をめぐる県と対立し、結果として「埼玉硫酸ふりかけ事件」²¹を起こしている。石川はこの事件を経て「このやうな事件に遭遇する度毎に、私は、叛逆的行動に興味をそられるようになりました」²²と社会運動には関心があるということがにじみ出ている。この事件については、西山によって「石川にとってこの事件は、話し合いで解決への道が見えてこない場合、破壊的行動に出ていいのか否かという点について考える機会となった」²³と指摘されている。たしかに、直接行動の場面に接する機会は石川の今後の生涯においていくつかあるが、暴力的な行動について石川は消極的な立場を表明している。

帰郷した石川は、1896（明治 29）年から 1897（明治 30）年の 1 年半を群馬県室田村室田高等小学校での代用教員として働いた²⁴。その下宿先である長年寺における生活について石川は「曹洞宗の寺でお小僧達が四、五人、方丈に作男を合せて六、七人の生活でした。（中略）お経を唱えながら各々御飯をつけ、お経の間に喰べ始める。（中略）こうして毎日の生活が続けられたのですが、その生活は心持のよいものでありました。（中略）宝鏡三昧とか、三回契、般若心経という経文を読むことに馴らされました」²⁵と振り返っている。石川は曹洞宗長年寺での生活に満足しており、経文を読むことに馴れるほど寺での活動もしているなか、「私の精神史」では次のようにを述べている²⁶。

あしかけ二年教員奉職中、私の生活はかなり放蕩をきわめた。それは川上の科白の影響ばかりではなく、その当時の環境がまた強力に私を誘引したのである。やがて私は同僚の引き留めるのを振り切って、この職を辞し、深い愛着を感じず生徒達と別れを惜しんで再び故郷に帰り、更らに東京に出た。一時放蕩に身を持ちくずしながら、なお自らを棄て得なかったのである。人間のはかなき運命を知りながら、なお自分に無限の愛着を感じるのであった。

石川は、長年寺での生活において放蕩を極めたようである。彼は「自叙伝」で、「鼠が二匹、三匹と溜ると皮をむいて醤油をつけて焼き、それを肴に一杯飲む。それは非常にうまく、その酒宴がお小僧達の無上の楽しみになっていました」²⁷と記している。このように石川は教員活動の傍ら、僧侶としての活動も行っていた。

石川は、小学校教員での活動もあって、1897（明治 30）年に中学校教員の検定試験を受けるが失敗した。その後、小学校で赤痢が流行したこともあって 1897（明治 30）年には小学校教員を辞めることになった。石川自身もこの小学校で流行した赤痢に感染し、一度帰郷していたが、父である九十郎が帰郷した石川の赤痢に感染し亡くなった。

板垣は、その時の石川の心理について「より深い結びつきを求める愛着と同時に、それが満たされないことに対する反発との葛藤が内蔵されていたと考えられる」²⁸と述べたうえで「この父のこのような死にかたは石川に罪悪感を負わせ、罪責への償いとしての自己の確立、発展に石川を邁進せしめたと考えられる」²⁹と論じている。たしかに、翌年石川は「何とかしてちゃんとした職を持たなくては永続性の生活につけないと感じました」³⁰と思い、中学校教員採用試験を受けるに至っているが、これも失敗に終わっている。その

後、石川はこの試験の失敗に反発して、再び苦学生生活をめざし上京することになった。

石川は、二度目の東京生活において福田家に寄宿しながら東京法学院（現在の中央大学に当たる）、および神田区錦町英語専修学校（現在の詳細は不明）に通っていたが、もっぱら法律より英語の学習に専念した。しかし、石川は愛着を希求して複数の女性と接触しており、そして、その女性関係で苦勞することとなる。

1899（明治32）年には、実業家だった石川家の長女との縁談が石川にもちあがったが、福田家にいた女性（姓名不明）との間に子供ができたために破談した。また、清水しげという女性とも恋愛関係に発展し、この女性の願いで弁護士試験と高等文官試験を受験することがごとく失敗に終わる。このことについて、板垣は「恋愛の失敗は、女性への憧憬、欲求を増大させると同時に、自我防衛としての石川の内向性をさらに強めていると考えられる。さらに社会的地位を獲得しようとした三度の受験の失敗も、虚無的傾向、体制に対する反逆志向を強め、また内向性を増大させたのである」³¹と論じている。この破談をきっかけに、石川は本郷教会の海老名弾正から洗礼を受けることになった。

その後、石川は弁護士試験や高等文官試験を受験したが両方とも失敗した。全ての受験に失敗し、浪人状態にあった石川は、堺利彦と弁護士の花井卓蔵（1868-1931）の紹介により新聞社の朝報社に入社した。石川は、社主である黒岩涙香（1862-1920、本名は黒岩周六である）の命令により秘書となる。また、同社にて結成された社会改革を目的とする理想団³²にも石川は参画している。そこで、石川は内村鑑三（1861-1930）に出会い、さらには、社外から参加していた安部磯雄（1865-1949）、木下尚江らを知ることになった。朝報社に入社した石川が受けた影響について、西山は「朝報社が発行していた『萬朝報』は社会問題に関して積極的に迫っていた新聞であり、社会矛盾を感じるには絶好の環境であったため、社会運動家になるには順調な道に進んだ」³³と論じている。

当時の朝報社の印象について石川は「『萬朝報』は進歩的な青年の渴仰的になっていた。内村鑑三、幸徳秋水、堺枯川などという錚々たる記者が黒岩涙香を助けて筆陣を張っている時期であった。然るに入社して間もなく、満州、朝鮮を介しての日露両国間の交渉が紛糾して来て、民論は激越をきわめ、まことに風雲急なるを見るに至った」³⁴と振り返っている。つづいて、石川は黒岩との付き合いについて、「従順に従つてさへみれば、いくらでも可愛がつてくれる人でした。併し私は一年足らずでその秘書を止めることにしました。黒岩さんはしきりに引止めて下さったのですけれど、当時の非戦論に動かされてみた私は無理にも我を通して遂々やめてしまひました」³⁵と綴っている。石川は日露戦争へ

の非戦論の立場を明確にし、以後もその姿勢を貫いていくことになった。1903（明治36）年11月、日露戦争開戦の気運が高まり、非戦論を掲げていた幸徳、堺らが社主黒岩との見解の相違から朝報社を辞職した。退社した幸徳、堺は、非戦論を掲げて平民社を設立した。石川も両者の誘いがあって同社に入社することになる。

第2節 キリスト教社会主義者としての石川三四郎の生涯と思想形成

本節では、石川が平民社に入社した1903（明治36）年から、ヨーロッパ・アフリカへの亡命をする1913（大正2）年までの期間を扱う。本節では、石川のキリスト教社会主義者としての生涯と思想形成を中心にまとめていく。

平民社が刊行した週刊『平民新聞』は、社会主義系の中央機関紙的な役割を果たしていたが、その中で石川は平民社の中心人物として文筆活動を行っていた。石川は「理想社会構築への意思をもつ人々が集う共同生活を体験し、平民社そのものが理想社会の雛型のような存在であった」³⁶と考えるようになった。その一方で、石川は極めて多忙な生活を送り、心身ともに限界が訪れた結果、一度小田原の療養所で過ごすことになっている。

1905（明治38）年、週刊『平民新聞』は石川が紙面上に発表した「小学教師に告ぐ」の記事によって廃刊に追い込まれることになる。その後、平民社は社会運動の場を『直言』に移して発行している。『直言』は、週刊『平民新聞』の後継紙として、それまで社会改良主義の立場から加藤時次郎が発行していた月刊『直言』を週刊新聞化し、日本社会主義の中央機関紙とした。その特徴として、紙面で際立つのは、ロシア第一次革命への関心、女性解放問題への着目、木下が立候補した衆議院議員補欠選挙の報道などである。

しかし、日比谷公園焼き討ち事件の際に政府は東京に戒厳令をしき、軍隊を出動させて鎮圧にあたる一方で、勅令206号「新聞・雑誌の取り締りに関する件」を公布し、『直言』は7ヶ月で廃刊となった。その際、平民社も解散に追い込まれ、石川は社会運動の活動の場を失った。

石川の平民社時期の論調について、板垣は「社会主義を明瞭に主張するようになっているが、社会主義実現の根拠として、愛や正義といった精神上のありかたを強調し、その前提の上に社会主義を主張している」³⁷と論じている。一方で、石川は平民社での活動を「予の此の時の苦悶は、理想と実際との甚だしき懸隔と衝突とを殊に著しく感じたに係はらず、之に対する自己の態度を確立する能はざりし為と、その智的には稍々確定したる後

にも感情の之に伴はざりしが故とに基因するのである。再言すれば、予の信仰が、未だ予の生命となつて確立するに至らなかつた故である」³⁸と振り返っている。このように、石川は平民社時代においても未だ精神面の問題を克服できずにいた。石川の精神面は、キリスト教の「愛」と社会主義運動の理想が一致せず、自己の感情と態度が分離していたところに問題が生じていた。

その後、石川はキリスト教社会主義者と協力して月刊雑誌『新紀元』を創刊した。この『新紀元』はキリスト教と社会主義の実践家が集まり、人道的立場を示していた。また、『新紀元』を刊行していた時期の石川は「私の精神生活に最も大きな感化を与えたものは、田中正造翁と谷中村事件であった」³⁹と振り返っている。田中正造は、石川が編集兼発行人を務めていた『新紀元』に接近していた。大沢正道によれば、「『新紀元』の創刊に先立って谷中村を訪れた木下は、手不足に悩む田中から相談を受け、新紀元社に手伝いに来ていた加藤安世青年を推薦した」⁴⁰としている。そのときの様子について、石川は次のように論じている⁴¹。

加藤安世君を訪ひ、其より同君の指導にて全村を一周し、更に破堤修行の事業に専心し居る村の老若男女と、之を督励する田中〔正造〕翁とを訪ひ、田中翁の説明を聞きながら、同村買取事務所のある藤岡町に行つた、昼飯を同町に喫して、茲に踵を廻らせて再び修築の場所に帰り、民衆が業務を終るを待つた、予は此時、若き婦人までが、元気よく働き居るを目撃して、深き深き同情の涙に咽んだのでやる、あゝ何等の悪漢ぞ、あゝ何等の無情漢ぞ、此の優しき乙女の小さき胸に迸る愛村の血潮の如何に尊きかを知らざるとは

石川は加藤安世を訪れて、村を一周し破堤箇所の修繕に専念している村人などを紹介してもらった。また、石川は田中の元も訪れ説明を聞きながら、藤岡町を訪れ、昼飯を満喫した後、修築の場所に帰り民衆が業務が終わるのを待った。石川はこのとき、元気に働く人々の姿を見て感動している。そして、石川は田中を訪れたときに次のような言葉をかけられ感激している⁴²。

予、頃者、栃木県谷中村に、田中正造翁を訪ふ、翁曰く、「私は昔から儒教の精神で固められたものでがすで、何でも上から下を治めると言ふ方に許り心が向い

て、下層人民の中に入つて、彼等自身に力を付け、彼等自身に事をヤラせる方にヤ、マダ此頃まで眼が着かなかつたでがす」と、嗚呼、正義の苦闘、人道の難戦、二十年の長き実験を経て、翁亦此言あり、嗚呼、翁の肉体は仮令遂には滅ぶとも、谷中村は仮令滄海と化すとも、此の一言は永久に伝えて以て改革者の一大教訓たらん、吾れ此の一言を耳にせるの時、感謝の熱涙の吾が全身を搾りて湧出するを覚えぬ。

嗚呼、斯の如くにして始めて能く彼等の自覚を起し、彼等の信を受け、彼等をして健実不撓の精神を懐かしむるを得べし、世の改革者、又た一点疑惑すべきの余地無き也

このように、田中は彼自身が谷中村に入り村民たちに力を付けさせ、その村民たちが自ら行動をすることの重要性を説いていた。石川は、田中の言葉を受けて、自身の社会運動の方針を固めていくことになった。その方針は、上から下を治めるという国家権力に対しての反対行動であるとともに、自分たちの自治を確立させるものであった。そして、石川は改革者が見習うべきものとして、運動者からの信頼を受け、伝道をすることの重要性を説いている⁴³。石川は、田中の運動に参加したことによる心境の変化を次のように振り返っている⁴⁴。

家も財産も社会的地位も、一切を棄てて、虐げられる農民のために献身する翁の精神生活に対して、私は無条件に頭が下がるのであった。私は学生時代にさまざまな悩みを懐いて基督教に帰依し、海老名弾正先生の洗礼を受けたが、キリストの十字架の問題が、今、田中翁に接するに至って、初めて現実の問題として、私に迫って来た。(中略) 一方に飽くなき悪魔の化身の如き官憲と戦い、一方には自分を裏切った一部村民のために万斛の涙を注ぎ、「悪魔を斥け得ざるは己れ悪魔なればなり」と歎息する翁の心情は崇高なること神のごとくであった。しかも翁においては、それは特別の努力の現われでなくて、自然の日常生活なのであった。私は翁とともに谷中村に入り、翁の戦いのお伴をしながら、とても翁の真似事もできない自分の弱さを感じた

石川は田中の運動に参加することによって、キリスト教の十字架の問題と自身の弱さを実感することになった。石川はキリスト教の十字架問題については「「十字架」は人間のことであり、現実の問題であり、何人も免れることのできない運命にある。(中略)生者は必滅であるが、それは一切の生物の運命を客観したに過ぎない」⁴⁵とまとめている。この問題について、石川は「「十字架」は単なる消極的観念ではない。已むに已まれない人生の行動である。生まれながらにして負わされた運命には相違ないが、そこには更に積極的の美と義との本能が動いている。それを愛というてもよろしい」⁴⁶と克服しようとしていた。

そして、石川は『自叙伝』で田中の生涯において、特に記憶に遺っていることについて次の内容をあげている。石川は「しかしいま私の記憶に遺っている翁の全生涯は、翁が自らを教育してきた修行史である、ということです。翁にとっては、政治でも社会現象でも自然現象でも、すべてが天授の教訓であります」⁴⁷と述べている。ここで注目したいのは、田中が自らを教育するという姿勢である。この田中との出会いやその行動を通して、石川は自らと闘うという自己教育の思想がここで芽生えたとも言え、後の「土民生活」思想の基礎となっている。

1906（明治39）年の石川は、田中との接触によってキリスト教社会主義運動に疑問を抱きはじめていた。時を同じくして、『新紀元』の参画者内で運動方針の違いが起り雑誌『新紀元』は廃刊に至った。だが、1907（明治40）年には福田（英）を主宰として雑誌『世界婦人』を始めることとなり、それと同時に、堺や幸徳とともに日刊『平民新聞』を創立した。しかし、同年4月にその日刊『平民新聞』は山口孤剣が執筆した「父母を蹴れ」が朝憲紊乱罪に問われ、結果的に廃刊となった。

この事件により、石川は発行兼編集人という立場の責任を問われ、軽禁固6ヶ月を言い渡された。また、石川は日刊『平民新聞』の廃刊と同年の2月に行われた社会党第二回大会の控訴裁判⁴⁸により、7ヶ月の軽禁固が追加され計1年以上の獄中生活を送ることとなった。

1908（明治41）年に、石川は1年と3ヶ月の獄中生活を終えた後、福田（英）の家にお世話になることとなった。そこで、石川は福田（英）が主宰していた『世界婦人』への寄稿やリーフレットの編集に携わることになった。しかし、この『世界婦人』も後に廃刊となった。一つ目の原因は、石川が寄稿した『虚無の靈光』である。1908（明治41）年に石川の『虚無の靈光』が新聞紙条例に問われたことにより、罰金100円という判決を受け

『世界婦人』は財政的に厳しくなった。二つ目の原因も、1909（明治42）に石川が寄稿した『墓場』である。この『墓場』が、新公布された新聞紙法に違反するものとして告発され、最終的に廃刊に追い込まれた。また、この事件により石川は4ヶ月の禁固刑に処され、1910（明治43）年に入獄することになった。

2回の入獄中の石川は、学習計画を読書と勉強に明け暮れる日々を過ごした。社会主義関連の読書内容としては、ジョン・レーの『現代社会主義』やマルクスの『資本論』、クロポトキンの『パンの略奪』そして、エドワード・カーペンターの『文明、その原因と救済』と『英国の理想』などである。これらの著書のなかで、石川の興味を一番引いたのはカーペンターであった。石川はカーペンターの著書を読み、進化論に対しての懐疑を抱いたため、後に進化論を否定する文明観が見て取れるようになってくる。

石川は「マルクスの弁証法的歴史観の非科学性を確認し、クロポトキンの暴力革命論の現実性を疑い始めたのは、この時であった。そして、社会改革の上に真に重要な貢献をするものは個人の道徳的努力である、ということ学ぶことができたのも、この時である」⁴⁹と振り返っている。石川はこの時期から社会改革の方針を個人の道徳的動力に訴えて内面の改革に焦点を当てていくことになった。

そして、もう一つ獄中での石川に興味を引かせたのは『古事記』である。石川は『古事記』について、「言葉使いが自由であること、従って言葉が如何にも豊富であること、思想と言葉とが自由で豊富であって、その中に含まれた事実には寒地体から熱帯地に及ぶ多くの地方色が伺える」⁵⁰として、その研究と新解釈を進めていった。そして、この約10年後の1921（大正10）年に『古事記神話の新研究』を出版するに至っている。

石川が入獄した同年の6月には、政府当局が社会主義者根絶を狙った大逆事件が起こった。事件当時の石川は獄中であったため、出獄後に家宅搜索や尋問は受けたものの無罪放免となった。この事件を受け石川は死刑廃止運動を起こすものの賛同者は得られず、結果この運動が実ることはなかった。この後、石川は入獄前から患っていた気管支炎の治療のため、横浜の根岸海岸で福田（英）と一緒に療養生活を送っていくことになった。

大逆事件後、社会主義運動は冬の時代に入り、石川に対する監視も強まっていた。石川には常に刑事が2人ほど監視していたため、知り合いの花井に翻訳や代筆の仕事に分けてもらい生活するのがやっとならざるを得なかった。そのような時に、石川が転向するなら支援をしてもいいと、以前に社会運動を彼に説いた佐藤が声をかけてきた。しかし、石川はこの申し出

に反発し支援が得られにくい状況に陥っていた。この時、石川は次のような悩みを『自叙伝』に記している⁵¹。

今日の資本主義的社会組織の不合理を唱え、それを改革せねばならぬと主張する者が、自らその制度の余沢によって些かでも搾取的生活をしたのでは、主張も唱道も意義をなさない、こうした不合理な生活から些かでも自分の身を軽くする方法は、今の社会に行われる最下位の労働を出来るだけ分担した上、自分の生活を最小限度に縮めること

佐藤との接触により石川は上記のように考え、新宿のペンキ屋の師弟の格で修行しようと思いましたが、自身の置かれている状態から実現できなかった。そのような生活を送っていた1912（大正元）年、石川は『西洋社会運動史』の出版を決意していた。これは時の総理大臣がリベラル寄りだった西園寺公望であったこともあって出版に踏み切ることになった。しかし、発行予定日であった1913（大正2）年1月1日は、既に桂太郎内閣が組閣していたため、石川は製本したものを処分することになった。ところが、既に内務省の検閲課には発送していたため警察署へ出頭することになった。とはいえ、著書は既に処分していたため罪に問われることはなかった。『西洋社会運動史』の処分以後、政府当局からの風当たりが一層悪くなったため中国から亡命していた鄭毓秀^{ていいくしゅう}とベルギー領事のゴベールの勧告により、1913（大正2）年に石川はヨーロッパに亡命をするに至った。

第3節 小括

本章では、キリスト教社会主義期の石川の生涯と思想形成として、1876（明治9）年から1913（大正2）年の期間を扱った。キリスト教社会主義期の石川は、学問の基礎を培うために勉学に励み、「埼玉硫酸ふりかけ事件」や「足尾銅山鉍毒事件」等で抱いた政治への不信感、キリスト教者と社会主義者との接触、田中との交流を経て自身のキリスト教社会主義の社会運動に懐疑的になっていったことが特徴として挙げられる。本節ではこれらに焦点を当てて、本章の内容をまとめていきたい。

はじめに、キリスト教社会主義期で石川が学んだ学問状況について論じていく。石川は父や老母による家庭教育によって漢学を学び、学校が休校の間も学業に励むことになった。

この点から、石川は教育に対する重要性を肌で感じて育っていったと言える。一度目の東京遊学では、福音教会で英語を勉強し、山本の画塾にも通った。特に、山本の画塾においては、後に石川がパンフレットで発行する『ダイナミック』の挿絵で用いるなど、その経験が活きる場面はあった。また、根本の論語や孟子の講筵に儒教を学び、哲学館に入学して哲学を中心に学ぶことになった。二度目の東京遊学においては、東京法学院と神田区錦町英語専修学校に通っていた。石川は東京法学院での法律の講義より、英語専修学校での英語の学習の方に関心があったと振り返っている。晩年の石川においても法律に対して嫌悪感を示す論考が見られることから、キリスト教社会主義期から一貫していたとも言える。

また、石川は 1907（明治 40）年からの獄中生活において、社会主義に関する本を中心に読書に専念していた。石川の回想に出てくる書物は、ジョン・レーの『現代社会主義』やマルクスの『資本論』、クロボトキンの『パンの略奪』そして、エドワード・カーペンターの『文明、その原因と救治』と『英国の理想』などであった。石川はカーペンターの著作に関心を示し、文通を始めるほどであった。それに対し、石川はマルクスの弁証法的歴史観の非科学性の確認や、クロボトキンの暴力革命論の現実性を懐疑的な態度を示し始めた。他にも、石川は『古事記』にも興味を引き、日本の神話や歴史にも興味を示した。晩年の東洋史研究の兆しは、キリスト教社会主義期から芽生えていた。

次に、「埼玉硫酸ふりかけ事件」や政治への不信感についてである。そもそも、石川は幼少期の頃、五十嵐家が明治政府の鉄道政策によって、経済的に困窮になりつつあるのを実感しながら生活を送っていた。さらに、埼玉県 of 県道の施策によって石川の二人の兄が絡む「埼玉硫酸ふりかけ事件」が起き、五十嵐家の家運はより傾く結果となった。石川は、これらの政府の行う施策に不信感を募らせる一方で、暴力的な行動に対し考えるきっかけにもなった。他にも、石川は大逆事件以後に接触した佐藤との再会によって、政治家に対しても不信感を募らせていく。佐藤は、政治家以前では自由党員として社会問題に向き合い資本主義の社会組織に対して不合理を唱えていたが、後に政治家となった際には、社会組織の一員となって搾取的な活動を行っていた。石川は政治家の主張や唱道に不信感を抱き政権の権力闘争や、暴力的な革命運動に対して懐疑的な立場をとる要因となったであろう。

最後に、石川が、キリスト教者と社会主義者との接触と田中との交流を経てキリスト教社会主義の社会運動に懐疑的になったことである。石川は度重なる試験の失敗と女性問題によって海老名の本郷教会のキリスト教に接近し、堺との接触により社会主義者と共に活

動していくことになった。このようにして、キリスト教社会主義者としての基盤を確立したが、谷中村の鉍毒事件と田中の活動によってキリスト教社会主義の社会運動に対しても不信感を抱くようになった。石川は田中の自然の日常生活的な活動に心を打たれており、この経験が後の「土民生活」思想の一つの方針のきっかけとなる。石川は田中との行動後、キリスト教と社会主義に対して懐疑的な立場を示し、本郷教会と社会主義運動から徐々に乖離していくことになる。次章では、石川のキリスト教と社会主義者たちとの接触とその乖離について論じていきたい。

第 2 章 石川三四郎の社会運動の構築と社会主義運動者との差異

本章では、キリスト教社会主義期の石川の思想形成に深く関わった、キリスト教徒と社会主義者との関係を扱う。同時期の石川は、本郷教会で海老名からキリスト教の洗礼を受けていた。石川は、海老名の説教を聞きキリスト教の博愛的な精神、人類社会への献身の精神を身に付けた。その精神は、石川の道徳観や教育観に反映されてき、本部第 3 章や第 2 部以降にもその影響はみられる。しかし、石川と海老名は日露戦争や恋愛観で対立していき、結果的に石川は本郷教会と疎遠の関係になっていった。

つづいて、同時期に石川と活動していた社会主義者として、堺や幸徳、木下らが第 1 章で確認された。石川は社会主義新聞の論説記者として、日露戦争の非戦論から女性問題、環境問題等多様な社会問題を取り上げた。特に、石川が関心を引いた社会問題として、足尾銅山鉍毒事件が挙げられる。石川は、谷中村で活動していた田中の社会運動の取材を続けていくうちに、キリスト教社会主義運動に疑問を抱いていった。そして、石川は堺や幸徳と社会運動に対する論争の結果、反政治、反暴力的な社会運動を模索していくことになった。石川がキリスト教社会主義運動を成熟させた結果は、第 1 部第 3 章第 3 節や第 2 部以降の「土民生活」思想で扱う。

第 1 節 石川三四郎のキリスト教との接触と本郷教会との対立

本節では、石川がキリスト教の洗礼を受けた海老名に加えて、内村との関係についてまとめ、キリスト教徒としての活動から乖離していく過程を論じていく。石川は、自身に対

して海老名以外にキリスト教において影響を与えた人物に内村がいることを、「基督教界の二大人物(内村氏と海老名氏)」で論じている⁵²。

独立雑誌は予をして初めて内村先生を想わしめ、(中略)予は先生に依りて始めて心を基督教に傾けたり、今を去る四年前、予は種々なる事情に因り、熟々人生の無常を思い、慰藉求むるに道無く、鬱々として苦悶懊悩すること一年有余、適々壹岐殿坂なる本郷会堂は予をして海老名先生に接せしめき、予は先生の説教に激動せしめられ、端なく一道の光明に接したり内村先生は予が発心の師にして、海老名先生は予が再生の父なり

この資料によれば石川にとって内村は初めてキリスト教に信仰心を生じさせた人物ということになる。石川によると「内村さんはその前(朝報社に入社する前)に『東京独立雑誌』というものを発行して、キリスト教的精神に基づいた一種の社会評論を続けて居られた。その頃から特色ある人物として内村鑑三の名は私の頭に刻みつけられてあった」⁵³と振り返っており、朝報社に入社する以前から内村の影響はあった。

その後、石川は内村と朝報社の理想団で一緒に活動した際に内村のキリスト教に感銘を受けている。石川は朝報社での内村の活動について次のように振り返っている⁵⁴。

萬朝報の客員となった内村さんの職分は、確か英文欄の執筆にあったと思うが、それと同時に、萬朝報の社会運動の一種とも見るべき理想団の精神的支柱として自ら重要な地位を占めるようになられた。この理想団を外廓運動として当時の萬朝報が一般社会に呼びかけた影響というものは素晴らしい勢を以て世の中を動かした。今日の時代では何処の新聞も一種の傍系事業として社会事業のようなことをやるのが通例になっているが、その当時は萬朝報だけがこういう社会運動をやっていたのである。内村の精神的助勢は真に大きな力であった

石川が振り返っているように、内村は紙面では英文の記事をあげ、理想団の活動についても精力的に行っていたようである。石川は理想団の活動中に内村と接点をもっており、その影響もあったと推察される。ちなみに、石川はキリスト教の影響を受けた海老名と内村について「海老名氏の思想は進歩的、社会的でありましたが、内村氏の教義は保守的、

個人的でありました。しかも内村氏の薫りは芸術的であり、海老名氏の色彩は倫理的でありました。内村氏は詩人風のところがあり、海老名氏は教育的でありました」⁵⁵と評している。

石川はキリスト教を取り入れたことについて『自叙伝』では、「本当に人類社会への献身と言うことを教えられ、全我をそれに傾倒しようとする情熱を養われたのは全くキリスト教によってでした。海老名弾正氏の『新武士道』という説教などにはどの位感激せしめられたことでしょうか」⁵⁶と述べている。この「新武士道」とは、武士の精神とキリスト教の博愛の精神を備えたものであり、石川はこれに感激している。石川に影響が見られる「新武士道」の一説として以下の内容を引用する⁵⁷。

かの軍人に於て往々見る所は、一方忠君を誇りつゝ他方には人民に侮辱を加ふることなり、これ眞の忠君にあらず。もし國君を愛せは其愛は必然國民に及ぶべきなり。夫れ國家を一人格として之に心身を獻くるは人塵之を口にして又よく之を行ふ。されど吾人は更に進むを要す、即ち國家を組織する一箇々々の民人を愛し、之に向かつて心を竭し力を盡さざるべからず、これクリスチャンの心なり。尚一步クリスチャンの進む所は即ち世界的同情なり、吾々の愛は世界に注がざるべからず、古への武士の偏狭なる忠、生麥事件の如き、むしろ吾人の耻づる所、忠の心愛の心が此世界的同情を發し來るに至らずんば、以て舊武士道を語るべし、新武士道に至つては未だ俱に語るべからざるなり

この中で石川が感激したのは、世界的同情である。この世界的同情という博愛の精神が、この先の石川に大きな影響を与えた。例えば、石川の「人道主義」という論文では「人の幸福は人類互に相愛するより大なるは無し、平和は此愛より來り、進歩は此愛より來る。蓋し愛は是れ万善の本源たる可きなり。(中略) 此愛を以て夫婦相愛し、朋友相愛し、兄弟姉妹相愛し、四海万人相愛す、博愛は即ち是れ^{ヒューマニター}人道の本義たり。(中略) 然り人道は天地の衷情より發源し、人道主義は之を實現拡充せんと欲するなり」⁵⁸と述べている。このように、石川は愛をキリスト教の博愛の精神と結びつかせることで、全人類への献身を思想に取り入れていったといえる。

このように、石川はキリスト教に傾倒していったが、海老名との関係は決して良好とは言えなかった。石川と海老名が対立する要因となったのは、日露戦争をめぐる戦争論と恋

愛観⁵⁹である。石川は日露戦争に対しては、前章でも論じたが非戦論の立場を示し、朝報社を退社し平民社に入社した。一方で、海老名は日露戦争に対して肯定的であった。しかし、この日露戦争における立場の対立はあったものの、石川は日露戦争開戦以後も本郷教会に立ち入っている。石川と海老名の対立が明確になったのは恋愛観の方であった。石川が海老名との対立に至った経緯について次のように振り返っている⁶⁰。

私は本郷教会の日曜日の夜の伝道説教に右の論文（「自由恋愛私見」）と同じような演説を試みました。その日の朝の海老名弾正先生の説教が「貞操論」であったのに対して、私の話は正反対のものでありました。若い時には前後も左右も顧みず、非礼の行動にも気づかず、思わぬ失敗を招くものです。いつも私の説教の後には先生が立って握手をしてくれるのに、その時にはそれがありませんでした。はっと気が付いた時、先生は内ヶ崎君に耳打ちし、直ちに内ヶ崎君が演壇に立って私の自由恋愛論を反駁するのです。成程私は海老名先生の朝の説教を反駁したことになったのだ、と気がつきました。格別悪気があったわけではなく、私の個人的な強烈な要求を圧え得なかったためなのですが、その後の私は同教会と縁が切れてしまいました。……

石川の『自叙伝』によれば、石川の「自由恋愛私見」と海老名の「貞操観」では価値観が異なっていたことを示唆している。なお、上記の石川の『自叙伝』の記述については事実誤認の可能性が指摘されている。後藤彰信の論考によって「海老名と石川が同日に男女関係論を説いた事実は確認できない」⁶¹と指摘されており、辻野功によって「これを契機に石川と教会の縁がきれてしまったのではなかった。（中略）この事件があってから一年以上後にも、彼（石川）が本郷教会で説教していることが記録に残っているからである」⁶²と論じられている。とはいえ、石川と海老名や本郷教会との関係が徐々に疎遠になっていったのは確かであろう。なお、この石川の「自由恋愛私見」については社会主義者たちからも評判は良くなかったと振り返っている⁶³。

夫婦生活には恋愛が至上命令である。それが消えたら直ちに離別するこそ真の貞操だというのでありました。多くのクリスチャンを讀者に持っていたので、この

文章に対する読者の非難はものすごいものでありました。社内でも幸徳、西川両君は「こんな文章を出すと読者の志気を弱める」として非難しました

石川の恋愛観はキリスト教徒や社会主義者たちからも非難が多かった。石川の恋愛観は、自身の男女間の失敗の経験も影響しており、その苦悩を覗かせるものとなった。石川とキリスト教の関係は、内村と海老名の影響を受け、最終的には海老名との日露戦争や恋愛観との相違によって次第に疎遠となるものであった。ただし、石川社会改革は、全人類的な視座を与えた点は特に大きな影響であったと言える。

第2節 石川三四郎の社会運動と初期社会主義者との出会い

石川三四郎と初期社会主義者との出会いの場となったのは、朝報社の理想団であった。理想団は1901（明治34）年の7月2日に『万朝報』第2791号の紙上に発表された「平和なる檄文 理想的團結を作らん」という創立宣言によって誕生した。理想団という呼び名は「平和の檄文 理想団團結を作らん」では、「何故に理想團と謂ふや、是れ宗教的の團隊にも非ず、政治の黨派にも非ず、又或る觸感す可き利益を目的とせる會社にも非ず、單に社會改良の理想を以て合する團衆なればなり、固有の名稱ハ別に定むるも可なり。別に定めずして直ちに之を固有の名稱と爲すも可なり」⁶⁴と記されている。このことから理想団は、理想団という名称には拘りはなく、どこにも属さない社会改良を目的とした団体であるということがわかる。

この理想団は1901（明治34）年7月20日、神田錦町青年會館で発起集會が開催され、正式に発足した⁶⁵。理想団の目的は上記で挙げた、社会改良と社会救済が主である。特に、社会改良と救済部分で主眼においたのは、「理想團の主として力を盡す可きハ、社會の何の部分なる乎、曰く其の人心なり」⁶⁶と記されている点から「人心」であると考えられる。この「人心」の現状について同記事では、「政治にも教育にも遺憾ながら宗教にも社會公衆の信任に依りて立つ一切の公の事業にも、私利私心の爲め腐敗墮落せざる者執れに在るや、若し社會が破れ傾く時ありとせば今日正しく其時なり」⁶⁷という惨状と記述している。

このことについて有山輝雄は、「『社会救済』の方法はまず最初に個人の『修養』である。そして次に、『修養』を目指す各個人が團結する。これが理想団である。そして、この理想団が外に外に活動の輪を広げていけばやがて社会全体の改良に達するというのである」

68と論じている。つまり、この理想団は各個人の修養を行い、その活動を社会全体に広げることが社会改良に繋がることを目標にした組織である。石川にとって理想団は初めての社会運動の場となり、ここでの活動が石川の社会運動の基盤となっている。

石川は理想団の会員との交流や活動を通して、社会運動の基礎やキリスト教の理解を深化していった。石川はこの理想団以外にも自由投票同志会に所属した。この自由投票同志会は1903(明治36)年1月22日に組織することを告知している。この組織は選挙運動を改良するために設立したものであり、理想団とは別としている。このことについて、有山輝雄は「自由投票同志会の発起人⁶⁹は全員理想団であったが、理想団とは別組織としたこと、また前年の議員予選会⁷⁰に比し投票者の自責自戒をより一層強調していることなどから議員予選会には理想団内部に批判があり、自由投票同志会はその批判をとり入れた形で組織されたことを窺わせる」⁷¹と論じている。つまり、この自由同志会は以前の選挙での風評被害を防ぐために設立されたものである。ちなみに、この自由投票同志会は1903(明治36)年1月31日の『万朝報』において「主意を実際に擴張せんが爲め理想團と協同」⁷²することを宣言している。

この自由投票同志会において石川は公開演説を始めて行ったのである。これは1903(明治36)年2月7日発行の『万朝報』において告知がある。その告知の内容としては、「八日午後一時四谷見附外大泉に開く」⁷³と記述しており、内村や幸徳らも参加している。その演説について石川は『自叙伝』で次のように振り返っている⁷⁴。

あんな苦しい思いをしたのも生まれて始めてのことでありました。それは四谷見附外の三河屋という牛肉屋の二階の大広間を会場に借りた時でした。原稿を持って演壇に立ったのですが、どうしても話の結末がつかないのです。聴衆が退屈して咳ばらいする、内村鑑三先生は心配顔で会場を右往左往する、何と言ったか、わずかに演壇を下りると全身びっしょりの汗でした

この時、石川が話した内容については不明だが、彼にとっては初めての演説活動であり、大きな社会運動の一步を踏んだと考えられる。しかし、当時の石川は独自の社会運動論を構築できておらず、理想団員との関わりを通して社会主義運動の基礎を養っていた。

平民社は、朝報社を退社した幸徳や堺が中心になって設立した。内村も幸徳や堺と同日に朝報者から退社したが、平民社に参加することはほとんどなかった。幸徳と堺が朝報社

を退社した理由については「退社の辞」にて、「予等二人は不幸にも対露問題に関して朝報紙と意見を異にするに至れり」⁷⁵と述べ、朝報社との意見の相違であることが示された。もともと、朝報社是对露問題に対しては非戦論の立場を示していたが、「ブルジョア民主主義の立場にあった同僚記者圓城寺清（天山）、松井廣吉（柏軒）などが、早くから強硬論を表明していた」⁷⁶うえに、当時の世論も対露戦争に傾いていたため、その時流に乗っていくことになった。石川は対露戦争に対しては非戦論の立場をとっており、堺らから平民社に誘われたこともあって、朝報社を退社することになった。

週刊『平民新聞』の記事の内容は、非戦論や社会主義に関することが中心であった。それ以外に、平民社は小学校教育にも目を向け活動をしていた。石戸谷哲夫は「小学校教員が、その一部にもせよ、社会主義思想を知り始めたのは、明治30年代後期、日露戦争の頃からである。主として平民社の働きかけによるものだった。労働組合としての教育組合を結成することも、平民社がはじめて示唆した」⁷⁷と論じている。平民社は小学校の教育に関心を持っており、教員に対し様々な活動⁷⁸を行っていた。

石川の平民社の活動は、演説や谷中村の取材そして、文筆活動であった。石川の記事は、消費者組合やキリスト教、平民社の日常など多岐に渡る⁷⁹。その中で、石川の「小学教師に告ぐ」は、1899（明治32）年に改正された新聞紙条例に抵触したために摘発され、週刊『平民新聞』を間接的に廃刊に追い込んだものである。この摘発により、平民社の中心人物であった幸徳と西川光次郎（1876-1940）が逮捕され、罰金を受け印刷機も押収された上に、様々な弾圧に遭い週刊『平民新聞』の発行が困難になり廃刊に至った。

石川が本格的に社会主義を表明したのは、平民社に入社した時期である。この平民社において、石川は朝報社でほとんどできなかった執筆活動もすることになった。石川が朝報社を退社し、平民社に入社した時に週刊『平民新聞』にて次のように述べている⁸⁰。

予今平民社に入る、入らざるを得ざるもの存する也、何ぞや、曰く夫の主義てふものあり、夫の理想てふものあり、然りと雖も予の自ら禁する能はざるものは畜に是れのみならず、否寧ろ他に在て存する也、堺〔利彦〕、幸徳〔秋水〕、両先輩の心情即ち是れのみ、彼の〔西郷〕南州をして一寒僧と相抱きて海に投ぜしめしは是れに非ずや、彼の荆軻をして一太子の為に殉ぜしめしは是れに非ずや、徒らに理想と言ふ勿れ、主義と呼ぶ勿れ、吾れは衷心天来の鼓吹を聞けり、曰く人生意気に感ずと、

平民社を設立し中心的に活動していた人物には、幸徳や堺などがおり、石川はそのコンビに好感を持っていた⁸¹。平民社時代においても、朝報社時代と同様に石川は初期社会主義者たちと主義主張が大きく異なることはなかった上に、この頃も社会主義の基礎を養っていた時期ともいえる。しかし、竹内則之は「かれの意識の底流には、たえず堺、幸徳らの説く社会主義理論に対する異論や疑念があったことを看過してはならない」⁸²と論じている。たしかに、石川は平民社解散後、木下や安部らの協力を得て、月刊『新紀元』を創刊しており、この後、堺や幸徳とは違った社会運動を模索するようになった。

第3節 石川三四郎と初期社会主義者との思想の差異

石川が初期社会主義者との見解の相違を示しはじめたのは、『新紀元』での「階級戦争論」を発表してからである。この「階級闘争論」を石川が発表した後に、堺から厳しい批判が行われた。最初に石川の「階級闘争論」の内容をみていきたい。石川は「階級闘争論」の序盤で、マルクスの批判をしている。その内容は以下の通りである⁸³。

夫れ近世の産業革命が、新たに全世界を分割して資本家階級と労働者階級の二階級を造りて、互に相背馳せしめつゝあることは、何人も拒否する能はざるの事実也、マルクスの主張が今猶ほ世に生命あり勢力ある所以のもの、蓋し此に存す。

社会主義の精神、社会主義の理想、及び社会主義の運動は、決してマルクスの創設せしものに非ず、殊に博愛の熱情烈々として迸発せしもの、吾人却てマルクス以前の社会主義者に於て多く之を見る、然もマルクスを以て社会主義の開祖の如く尊ぶ所以のものは何ぞや、其の科学的研究の精緻を極め、経済学説に新機軸を立てたるは、素より著しき理由なりと雖ども、然も階級戦争を唱導せるの一事は、蓋し更らに重要なる理由とすべし

石川はマルクスの功績としてあげられている、社会主義の精神、理想、運動などはマルクス独自のものではないと批判している。それなら、マルクスを尊ぶところはどこにあるかと疑問を呈している。石川は続けて、次のように論じている⁸⁴。

然れども、一利ある所、必ず一害を伴ひ、特長を發揮する所、又た短所を包蔵す、故に苟も一世を指導し、改革せんと欲する者、能く審らかに其の利害得失を考察して以て真個の精神を貫徹する努めざる可らず、然れども知能限りある個人を以て之れに当る、難中の難といふべし、偉人マルクスの如きすら、猶ほ且つ自説の深所に於て、却て自ら溺れたるが如きの觀無き能はず、後学の徒、又た以て深く鑑みて可なり

石川は改革を指導する者は、利益がある一方で損害もあるということを考察していく必要があると説いている。しかし、それは知能に限りがある個人では難解であり、後学の徒である者たちも深く鑑みる必要がある。石川は改革する者は、改革の長所の面を盲目に信じ、短所の面を見ていない点を批判している。そして、石川は改革の任に当たる者に対して次のように論じている⁸⁵。

社会は斯の如く兩分(労働階級と資本家階級)せられぬ、されど苟も愛人憂世の精神を懐いて之が改革の任に当らんと欲する者は、決して一方に味方して他方に敵対すべからず、須らく偏癥の意見を去つて、万民平等、同胞相愛の精神を發揮すべし。

然り、素より偏見無きを要す、然れども吾人又た一世を指導せんと欲する、審らかに歴史的発展の形跡を尋ね、深く社会進化の大勢を察し、以て将来発展すべきの真生命を捕へ、之を保有し、之を拡充し、之を活動せしむるに努めざる可らず

石川は改革を欲する者は、改革の味方になる者の意見を取り入れるだけでなく、敵対する者の意見も取り入れるべきであると論じている。ここに、石川の博愛精神が見られ、キリスト教色が見られるところでもある。そして、石川は歴史を振り返り将来を見据えて、活動することを求めている。そこで、石川は労働階級に対してどのようにすべきか、次のように述べている⁸⁶。

然らば吾人は、如何にして此の労働階級を保有し発展し行くべきや、如かず、彼等をして先づ自助の精神を昂起せしめんには、如何にして自助の精神を起さしめん、曰く、先づ彼らをして階級的自覚を懐かしめよ。

抑も階級的自覚とは何ぞや、他なし、自己が其階級の一員たるの自覚是れ也。約言すれば愛階級心なり、犠牲の精神なり、資本家階級を憎悪するの精神に非ざるなり、私欲セルフイッシュに非ざるなり。

然らば如何にして彼等を階級的自覚に導かん、又た如何にして其の自覚を健全ならしめん、曰く、吾人先づ自から此の階級に投ぜざる可らず、而して此の階級に一体となりて階級的自覚に入らざる可らず、斯の如くにして真に彼等に同情し、真に彼等の信を受け、又た力ある忠告を彼等に供するを得べし

ここで、石川は労働階級に対して階級的自覚を持たせることを重視している。それは、労働階級者がその一員として自覚することであって、石川は階級的自覚とは愛階級心であって、資本家階級を憎悪する精神や、私欲ではないとしている。石川は改革の指導者たる者たちが、労働階級たちから信を受け、忠告していくことこそ大切なことであるとしている。つづけて、石川は資本家階級を打破しての改革は社会主義の理想に反していると論じている⁸⁷。

労働階級は、真に健全なる発達を遂ぐべし、社会の真生命を懐いて義と愛との充てる新社会を建立すべし、殊更ら資本家憎怨する如きは寧ろ無用の徒事に属す、若し夫れ資本制度を打破せんとするは、畢竟するに憐れむべき資本家を救済する所以なり、階級戦争に於ては、資本家階級は素より労働階級の敵なりと雖ども、然れども社会主義の前には両者共に同胞なり。

然り、社会主義の理想は目的にして、階級戦争は其の手段なり、此の理想ありて始めて階級戦争も生命あり光明ある活動たらん、之れ無くんば畢竟私慾我利の盲動たるに終らん也

このように、石川は資本家階級も労働階級も社会主義の前には同胞だとして、資本家階級を憎悪することは無用だとしている。石川にとって社会主義の理想は目的にして、階級

戦争はその手段として、この理想あってはじめて、階級戦争も生命ある活動となるのであって、それを失って私利私欲の活動は盲動に終わるとしている。

このような主張を行った石川に対して、堺は『光』で批判している。堺は「階級戦争論について」と題する反論を行い、その副題には「山路愛山君と石川三四郎君に質す」が付されている。堺は次のように石川を批判している⁸⁸。

なにも好んで「労働者の利欲を挑発し、ことさら階級憎悪の念を助長」せねばならぬと言ふ者はあるまい。ただし、労働者を目ざめしめんがために、その利害に訴ふるものはもとより当然のことである。石川君は、ことに之を「利欲」と呼んで、さも浅ましきもの労働者の利害に訴へ、平民階級の利害に訴へ、国家全体の利害に訴へ、人類全体の利害に訴へるのがなにゆえに彼らを侮辱し誘惑することになるであらうか。

石川君はまた、「階級憎悪の念」を甚だしく忌むべきものとしているが、悪制度を憎み、悪組織を憎むのが、なぜ忌むべきことであらうか。我々は今の社会の、階級相対立し、階級相反目し、階級相殺傷しつつある実情を、なるべくありのままに露出して、平民労働者および上流階級の有志者をして、なるべく早くその非をさとらしめたいのである。この悪制度、悪組織を憎むの念をして、少しでも強くあらしめたいと思ふのである。しからずんば、大改革、大革命の力はどこからも生じて来ぬのである

堺は、石川の「私欲」、「階級憎悪の念」について批判している。「私欲」について、堺は階級者に利害を訴えることが何をもって、侮辱にあたるのかを指摘している。また、「階級憎悪の念」については、堺は悪しき制度、組織を憎むのが、なぜ忌むべきことであるのかと指摘している。また、この憎む念が生じなければ大改革、大革命の力はどこからも生じないとしている。その後、堺は石川に対して、「石川君にして、もしこの当然の忌み、断じてこの種のことを見ざらんと欲するのであれば、今日より直ちに去って一歩たりとも足を政治界に踏み入れぬがよい」⁸⁹としている。

それに対して、石川は『新紀元』の第9号にて「堺兄に答ふ—『光』十四号『階級戦争論に就て』に答ふ」で反論している。石川は革命の手段について改革か伝道の方法かで異なるとして堺に批判に答えている。その内容が以下のとおりである⁹⁰。

予は、社会主義を実現する方法に二つの方面があると思ふ、一つは改革(又は革命)運動で、他の一つは伝道(又は教育)運動である、而して此の二方法は決して全然隔離するもので無く、両者相待つて始めて其効を奏するのであろう、加之、改革其自身が伝道となることもあれば、伝道其自身が改革となることもある。

唯だ其の主眼とする所に由て、両者の態度は定まるのである、然らば予の主眼とする所は何れにあるか、無学鈍才なる若輩を以て烏滸がましい次第であるが、予は伝道者たる態度を以て立ちたいと願ふものである、而して此の態度を以て立たんことを希望する余は、ドウしても「労働者の私慾」を絶叫するに忍びないのである

石川はまず、社会主義を実現する方法に二つの方面があるとして、一つは改革(革命)として、もう一つは伝道(教育)であるとしている。石川はこの二方法は決して隔離するものではないとしつつも、主眼に置いているのは伝道であるとしている。なぜ、石川が伝道にこだわるのか。それについて石川は次のように論じている⁹¹。

予は日本の自由民権運動の歴史を顧みて、其の改革運動が甚だ盛大なりしに関らず、教育運動の皆無なりしを思ふ、そして其民権思想が今日に及んで殆んど痕跡をも留めず、彼の大運動も泡沫の如く消え去つたことを惜しむのである、此に於てか、予は自ら無識短災をも顧みず、日本の国民をして精神的に社会主義者たらしむるの運動に身を投じたいと志す所以である

石川は自由民権運動の歴史を振り返ってみても、改革運動は盛んだったにも関わらず、教育運動は皆無であった上に、民権思想が今日までに痕を残さず消えてしまったことを惜しんでいる。であるから、石川は教育運動を行い、日本国民を精神的に社会主義者にする運動に身を投じたとしている。そして、石川は社会主義の革命運動について次のように述べている⁹²。

予は固より社会主義が経済上の問題たることを疑はぬ、然れども、其の経済上の原理は、必ずや人生の根本義より割出されたもので無くてはならぬと思ふ、ソ

コで問題は人生観に到達するのであるが、予は人生の理想は円満なる相愛にありと信ずるのである、而して此の観念より社会主義を唱導する予は「労働者の私慾」に訴ふるの必要を認めない、否な、之を言ふは却て社会主義を毀損するのでは無いかと思ふ。

若し社会主義の理想が、形式的に社会組織の変更のみを以て実現せらるゝものとすれば、如何なる手段方法を以ても、早く吾党の勢力を強大にして、法律上の改革を実行したいのであるが、予はドウしても組織の変更と精神の改革とが平行せんことを希はずしては居られんのである。

斯く言ふても、予は決して彼の革命運動に反対するものではない、予も将来に於て、或は小なる革命者となるかも知れぬ、乍併、其の時も、予は断じて「労働者の私慾」に訴へやうとは思はぬ、浅薄なりとも自ら犠牲の精神を起し、人にも犠牲を説き、此に始めて革命運動をも起すことが出来るのではあるまいか

石川は社会主義が経済上の問題と認めているうえで、それよりも人生観にあるとしている。石川にとっての人生の理想は円満なる相愛であると論じている。そのため、石川は社会主義を唱導する立場においては、「労働者の私慾」に訴える必要はないとして、かえって毀損するものだとして、堺に反論している。また、社会の改革についても、社会の組織の変更と同時に精神の改革の重要性を訴えている。石川は堺らの革命運動に対して反対する立場をとらないとしながらも、「労働者の私慾」に訴えることはしないと断じている。ここからも、石川と堺の主張は社会主義革命の方法に差異が見られる。

さて、石川の「堺兄に答ふ」において「吾党」とある。これは1906年に結成された日本社会党のことである。この日本社会党には堺も参加している。その機関紙が『光』であり、創刊の言葉に「本紙をもって、マルクス派社会主義の運動を続けん」とある。つまり、『光』はマルクス派社会主義の運動の系統を継ぐと表明している。その日本社会党の参加を『新紀元』側にも求めており、木下は参加している。それに対して、石川は「折角『新紀元』の運動がその緒について、これから益々発展しようとしている時に、その仕事を中心であるべき私がそれを離れて政治運動に投ずることは非常に冒険であると考えて、私はこれを謝絶しました」⁹³として、日本社会党の参加には応じなかった。その点において、石川は堺や木下とは別の社会運動の方法を模索し始めたともいえる。

つづいて、石川は堺に対して「堺兄に与えて政党を論ず」で日本社会党に参加しなかった経緯について論じている。以下からはその内容を紹介し、検討していきたい。この石川の論考は、石川の政党観が表れている資料として重要なものである。まず、石川は政党の持つ改革の力について言及している⁹⁴。

想ふに、政党なるものは、新たに改革の元気を人民の中に興奮する所以の道に非ずして、寧ろ既に奮起せる人心を寛和統率するの一手段に過ぎず、蓋し革新の元気は、党の評議員等の決議によりて生ずるものに非ず、又た党员の多きが故に起るも真の元気に非ず、然り、革新の元気を鼓吹するは唯だ人民の衷心に投ずる新一点火にあり、而して之を投ずるは伝道にあり、言論を以て、行為を以て、するの伝道にあり、伝道に二種あり、一は扇動にして、一は教育なり、先づ扇動して万民の覚醒を促し、而して後、徐ろに之を教育せざる可らず

ここで石川は政党について、新たな改革の力を人民の中に興奮させるものではなく、人心を寛和統率の機能を果たす一つ的手段でしかないとしている。加えて、革新の元気は、党の評議員等の決議によって生じるわけでもなく、党员が多ければ生じるわけでもなく、生じる方法はただ伝道であるとしている。その伝道には二つあるとして、一つは扇動であるとして、もう一つには教育があるとして、扇動によって万民を覚醒させ、その後教育させることとしている。そして、今の日本にこそ伝道が重要であると石川は次のように説いている⁹⁵。

予は、今日の日本は尚ほ伝道の時代なるを信ず、故に伝道の中心たる簡単なる事務所の必要は之を認む、未だ政治的勢力の中心たる政党に、吾人の全身全力を傾倒せざる可らずといふ程に之を重要視すること能はざる也。吾人は勢力の集中を計るが為に、勢力の源泉を開拓せんとする伝道事業を妨害する如き近視眼的行為は断じて避くるを要す、伝道の生命は伝道者の熟誠と人格にあり、政党の勢力は党员の頭数と統一にあり、伝道には自由を要し、政党には服従を要す、故に伝道者は寧ろ政党外の自由の天地に在るの勝れるに如しかず、此の間の消息は大兄の既に深く実験せる所ならん

日本はいまだ伝道の時代と石川は信じており、よって伝道の中心たる事務所の必要性を認めており、政治的勢力の中心にある政党はそれを重要視していない。石川は伝道に重要なものは伝道者の熟誠と人格にあるとして、政党は党員の頭数とその統一にあるとしている。そして、伝道には自由を政党には服従を要するとして、伝道者は政党外という自由の天地で過ごすとして、政党には参加しないことを石川は表明している。つづいて、日本社会党の革命観にも疑問を呈している⁹⁶。

思ふに、革命は主観の權威を信ずるに依つて行はる、何となれば、革命は客観に於ける一切の障礙を否定するによりて行はるゝものなれば也、故に革命は主観主義の発言に過ぎずして、或る意味に於て之を天才主義といふ可きなり、即ち革命は天才發揮の結果に外ならざるなり、而して此点に於て、亦た政党運動と甚だ相容れざるものあり、蓋し政党は個人の主観的權威を慮ること無くして独り客観の多数によつて事を決す、政党は凡人主義に非ざれば成立せざる也、是れ凡人主義者と自称する大兄が、身を政党に投ずる可とする所以なりと雖ども、然れども、又た同時に、革命主義者たる大兄が政党に依つて事を為さんとするを否定する所以に非ずや

石川は革命が主観の權威によって行われ、客観の障害を否定することによって行われるならば、革命は主観主義であり、天才主義と言えらるゝとしている。革命は天才を發揮した結果にほかならず、その点において政党運動とは相容れないとしている。そして、政党は個人の主観的權威を配慮することなく、人数によって事を決定する点では凡人主義では成立しないとして、石川は堺を批判している。そして、石川は最後に日本社会党に入らない理由を述べている。その内容は以下のとおりである⁹⁷。

最後に及んで、僕が目今日本社会党に入る能はざるの事情を述べんと欲す。

堺兄足元、予は上来、社会改革の手段として左程に政党を重要視せざる所以を陳べたり、然れども、其の如きは、予が入党せざる重要な理由を非ず、予の今ま入党する能はざる、寧ろ他に多くの理由を存する也。

第一に目下の日本社会党は、未だ黨員数の一二多少を争ふの時代に非ず、蓋し政党が其数を以て其主張を争ふは、夫の代議会に於て代表者を有するに至りし以

後の問題なり、然るに社会党は未だ一人の代議士を有せず、僕また代議士たるの資格を有せず、僕の入ると入らざるとは、日本社会党に於て殆んど何等の軽重する所無きなり、而も僕や、他に於て重大なる、使命を有すと自信す、而も其の使命は社会主義の爲めに最も重要なる勤務の一部にして、加ふるに其は心身の上に最も自由あるを肝要とす、使命とは何ぞや、他なし、我が『新紀元』の事業即ち是れなり、所謂「宗教的趣味を帯びたる社会主義の宣伝」即ち是れなり、小なり雖ども、十字架を以て社会主義を宣伝するの重任を負はんとすること即ち是なり

ここでは、石川が日本社会党に入党しない理由を論じている。石川は政党に入党しない理由として、政党による社会活動を重要視してない以上に、他に多くの理由が存在していたからである。日本社会党は党員数による争いの時代ではなく、政党がその数を以て主張を争うのは、議会において代表者を有した時の問題であると石川は論じている。そのうえで石川は代議士の資格も使命も持っていない、社会党に入党しても寄与するものはないと論じている。当時の石川の使命とは、『新紀元』の事業活動をあげ、社会主義を宣伝する責任を負うことであった。また、石川は『新紀元』の活動について「宗教的趣味を帯びたる社会主義の宣伝」と表明している。

石川の革命の手段については「階級闘争論」からはじまり、堺との誌面における論争を通じておおよそ把握することができる。石川の革命の手段は、現状の日本においては政党による政治運動ではなく、伝道による教育運動の方が有効だと論じている。石川にとって伝道とは、万人を扇動し覚醒させた後に、教育を施していくことであるとしている。この頃の石川にはその具体的な方策は打ち出せてはいないが、堺の革命の手段においてはすでに差異が生じている。また、石川は社会主義革命が達成された後の、社会像も堺とは異なっている。

ここまでは、石川と堺との革命の方法やその手段についての差異に論じてきた。つづいては、幸徳の社会運動との差異について論じていきたい。幸徳は石川の「堺兄に与へて政党を論ず」に対して、『新紀元』の誌面において「政黨なる者の定義が、單に「議會で多数を占めるを目的とする党派」即ち選挙の勝利のみを目的とする者ならば其弊や確かに君のいふ通り」⁹⁸であるが、「君のいふ如き政黨たらしむるか、將た革命的たらしむるかは、一に我等の責任に存すること」⁹⁹と論じて、反議会主義の立場をとっていた。また、幸徳

は「予が思想の変化」と題する表題を発売し、直接行動をとる思想を頭わにした。以下、「予が思想の変化」の内容を検討していきたい¹⁰⁰。

余は正直に告白する、余が社会主義運動の手段方針に関する意見は、一昨年の入獄当時より少しく變じ、更に昨年の旅行（渡米）に於て大に變じ、今や數年以前を顧みれば、我ながら殆ど別人の感がある。（中略）

余は正直に告白する、「彼の普通選挙や議會政策では眞個の社會的の革命を成遂げることとは到底出来ぬ、社會主義の目的を達するには、一に團結せる労働者の直接行動（ヂレクト、アクション）に依るの外はない」、余が現時の思想は實に如此くである

ここで、幸徳は社会主義運動の手段や方針の意見について、入獄や渡米によって変化したことを告げている。今までの普通選挙や議會政策では、眞の社会主義は絶対成し遂げられないと幸徳は論じている。幸徳は労働者の直接行動によってでしか成し遂げられないとしている。つづいて、幸徳は議會政策の欠点と伝道活動について論じている。その内容は次のとおりである¹⁰¹。

議員は墮落すれば夫れ切である、議會は解散さるれば夫れ切である、社會的の革命、即ち労働者の革命は、結局労働者自身の力に依らねばならぬ、労働者は紳士閥の野心家たる議員候補者の踏臺となるよりも、直ちに自ら進んで其生活の安固を圖るべきである、衣食の満足を得るべきである。

普通選挙の運動、議員の選挙も亦一種の傳道になるかも知れぬ、併し傳道の爲にすとならば何故に直接の傳道をしないで斯る間接の手段を取るのであるか、有力なる團結訓練を事としないで、果敢ない投票に信頼せしむるのであるか、一人の選挙競争に費す所、今の日本で少なくとも二千金を下らぬのである、斯る費用のみにても是れを純然たる労働者の傳道團結に費したならば、如何に大なる効果を見ることであらう

ここで幸徳は議員が墮落すればそれまで、議会も解散すればそれまでと、議会運動を批判している。そこで、幸徳は労働者の野心に訴え、議員候補者の踏み台になるのではなく、自分の生活の判定を図るべきであると訴えている。幸徳は普通選挙の運動や議員の活動も一種の伝道になるとしている。しかし、幸徳は伝道が目的ならば、なぜ直接の伝道をしないうで手のかかる間接的な伝道をとるのかとして批判している。幸徳は伝道による活動においても直接行動をとる手段を選び、石川の教育的な伝道による手段とは大きく異なっている。

このように、社会主義運動の中心にいた幸徳や堺、石川はそれぞれ異なる革命の手段や方法を模索し主張している。幸徳は革命による直接行動をとる立場をとり、堺は政党による議会政策の立場をとり、石川は教育的な訴えを施して活動をする伝道の立場をそれぞれとっていた。以上のように、石川、堺、幸徳らは初期社会主義者と一括りにされるが、実際にはそれぞれの社会運動の方針は異なっていた。その中で、石川の特徴として、教育的な社会運動を模索していた点にあり、その一つの集大成として第2部で詳述する「土民生活」思想が形成されていった点である。

第4節 小括

本章では、石川のキリスト教の洗礼と社会主義運動の活動の様子から、それらの活動から距離を置く過程を論じてきた。石川のキリスト教との関連は、内村の『東京独立雑誌』によってキリスト教の洗礼を決心して、海老名の本郷教会に入信することになった。石川は海老名の「新武士道」の説教を聞き、人類社会への献身と博愛的な精神を養い人道主義を掲げるに至った。石川は、平民社解散時に社会主義者たちが中心に発行した『光』とキリスト教者たちが中心に発行した『新紀元』に分裂した。石川はキリスト教者たちが発行した『新紀元』側に就いて、社会主義運動以外の活動方法を模索した時期でもあった。

石川と本郷教会との関係は、海老名の日露戦争に対する態度と恋愛観の相違によって徐々に距離をとっていくことになった。石川は、日露戦争に対して非戦論の立場を示し、また、恋愛観においては自由恋愛を主張しており、これらの主張が海老名と異なっていた。

次に、石川と社会主義者との関係、特に堺、幸徳、木下との社会運動に対する考えを中心にまとめていきたい。石川と社会主義者との関りは、朝報社内の理想団から始まった。理想団内での石川は、社会運動に馴染んでおらず、未熟な面を覗かせていた。その後、日

露戦争の非戦論を唱えた堺らは、朝報社を退社し平民社を設立した。石川も堺らの勧誘もあり追って入社していった。平民社の石川は、演説活動以外に執筆活動にも精力的に行うようになったが、その活動が最終的に週刊『平民新聞』を廃刊に追い込むことになった。その後、一枚岩であった社会主義者たちは、それぞれの社会運動論を掲げ分裂していくことになった。

石川は、堺や木下が興した日本社会党での政党運動と、幸徳の暴力的な社会運動どちらにも与しなかった。石川にとって政党運動による活動は扇動であるとし、石川が求める伝道的な社会運動とは相いれないものであった。幸徳は、伝道を主目的とする社会運動に対しては、手のかかる間接的な運動として、直接行動を起こす社会運動の立場を示した。以上のように、石川の伝道を重視した社会運動は、堺や木下の扇動による社会運動や幸徳の直接行動に社会運動とは立場が違うことを示した。この石川の立場は、キリスト教への接触以外にも「埼玉硫酸ふりかけ事件」による暴力革命への消極的な姿勢や、田中とともに活動した谷中村での運動による個人の生活に基づく社会運動も影響しているだろう。キリスト教社会主義期の石川が理想とする社会運動は、手のかかる間接的な伝道であり、個人の人格を重視する活動であり、その人格によって社会革命を起こすものであった。

第3章 キリスト教社会主義期における石川三四郎の教育思想

本章では、キリスト教社会主義期の石川の教育思想として、道德観、「小学教師に告ぐ」、『虚無の靈光』を中心に検討していく。第二次世界大戦以前の教育は、修身科が重んじられており、ナショナリズムの高揚や秩序の維持などに道德が関係していた。そのため、当時の教育は道德と密接な関係であり、教育思想を論じるにあたり、まず道德観を明らかにする必要がある。当時の道德の問題として、日露戦争によるナショナリズムの高揚からくる愛国心が挙げられる。そこで、本章では石川の「愛国心と他愛国心」を中心に上げ、キリスト教社会主義期の道德観として論じる。

その上で、キリスト教社会主義期の石川の教育思想として「小学教師に告ぐ」と『虚無の靈光』を検討していく。「小学教師に告ぐ」では当時の教師の待遇と教育内容の問題に言及し、教育内容においては愛国心の問題が取り上げられている。『虚無の靈光』では、社会と個人の間を考察し、「人格の独立」の重要性が示されている。この「人格の独立」

が石川の社会運動の核となり、啓蒙的な教育運動と称された要因であることを論じる。

第1節 キリスト教社会主義期における石川三四郎の道德観

本節では、キリスト教社会主義期における石川の道德観について整理していく。この時期の日本の道德観の特徴として、1890（明治23）年の「教育ニ関スル勅語」の渙発や日清戦争、日露戦争も相まって日本国内のナショナリズムが高まっていったと纏める事が出来る。つまり、この時期における道德観として、愛国心に関する内容が必然と取り上げられる時代でもあった。特に、日露戦争期はその方向性が顕著に出てきた時代でもあった。例えば、1904（明治37）年2月10日に出された文部省訓令の「宣戦ニ付キ教育ニ従事スル者ノ心得方」では教育者と教育を受ける者への心構えが書かれている。以下はその内容である¹⁰²。

之ヲ要スルニ陸海ノ軍人カ死ヲ決シテ戦ヒ艱苦欠乏ヲ忍ヒテ国家ニ報ユルノ精神ヲ移シテ以テ教育ニ従事スル者及ヒ教育ヲ受クル者ノ精神ト為サンコトハ本大臣ノ切ニ望ム所ナリ教育ノ任アル者ハ宜シク平時ニ於ケルヨリモ一層奮励シテ職務ニ努カスヘシ是レ実ニ国家カ教育者ニ期待スル所ニシテ有事ノ時ニ於テ教育者カ国家ニ報スル所以ノ道モ亦之ニ外ナラサルナリ

この訓令には、当時の文部大臣である久保田譲（1847-1936）が望む教育が示されており、その内容は軍人のように国家に報いる精神を以て教育を行うことと示されている。また、『教育時論』には、「文相の戦時教育談」と題する報道に「我國民の忠君愛國の精神の發現である畢竟今回の連戦連勝は其原因多々あるべきも此精神は實に其主要なる原素なりと云ふて宜しからうと思ふ。此の帝國特有の精神を維持し益々之を鞏固にすることは此際に於ける教育者の最も力むべき所である」¹⁰³と書かれており、忠君愛國の精神を強固にするような教育が求められていた。この忠君愛國を育む重要性を説く言説は『教育時論』においても多く見受けられ、「勅語を拝誦して」では机上の勉強よりも重視していると書かれている。その内容は次の通りである¹⁰⁴。

抑も今回の戦役は、如何に多くの活資料（訓示）を以て、吾が國民に教訓を與へたるか。此の教訓によりて吾が國民は益々國家的勸念を深刻し、社會思想を發揮し、共同精神を的確にし、自他の力量、長短を較知して、以て正當なる自己感情を得、浸りに他に驕らず、浸りに自ら侮らず、助長補短、將來の大發展大飛躍を爲すに必要な識見を得、心膽を鍊りたること、蓋し幾何ならん。然り而して吾等教育者も、亦吾が次代の國民を教育する上に就きて、机上の研究以外、否、机上の研究によりては、到底得ること能はざる、教育上の默訓暗示を得たること、亦蓋し幾何ならん。文部省視學官の語るところによれば、既に此の種活資料を應用して、着々効果を収めつゝあるもの少からずといふ、亦悦ばしからずや。

この資料によると、訓示を國民に与え、その教訓により國民の國家觀念の理解を深め、社會思想や共同精神を發揮して、それをもって自己の感情を律することができるようになり、日本の發展に必要なると示されている。自己の感情を律するには、教育者や教育の活動をする上で、机上の研究では得ることはできないとしている。また、文部省の視學官は、これらの訓示を應用して着実に成果を上げていることを報告している。このように日露戦争下の日本の教育者たちは、より一層國家に尽くすような仕事を期待され、拳国一致体制を築くために訓示を用いた道徳的な教育を行っていた。このような時代背景であったため、教育活動においても戦争に関する活動が報道¹⁰⁵されている。

それに対し、『新紀元』の演説の報告では、「今日の小学教員ほど困難なるものは無し、殊に其の修身科の教育に至りては吾人は到底兒童の間に答ふること能はざるもの多し、例へば同じ修身科に於て一方に博愛を教へながら、他に忠君、愛國を教ゆるといふ如きは到底可能の事に非ず」¹⁰⁶と小学校教員からの嘆きも聞かれた。このように教育界においても「忠君愛國」を育む修身科の報告があることから、社會主義者たちも看過できない問題であった。石川もこの「忠君愛國」について以下のような考えを示している¹⁰⁷。

されど此の美しき犠牲の精神を浮世のかりそめの道に陥いるゝ社會は真に罪ではあるまいか。忠君も、愛國も、義理も、恩愛も、元來人情の源より流れ出でたる人の道に相違は無い。然るに其れが、本來の道を逸して、迷妄の横道に流れ入り、遂には本源の人情と衝突するに至るのであります。而して其の迷妄の横道は社會の組織の中にあるのです。即ち人情の本然に背いたる社會組織の中にあるのです。

彼の封建制度の下に於て、忠君道徳が人情を束縛し、資本家制度の下に於て、富の圧制が人情を忘却するといふ如きは、最も著しき事実であります

石川は、「忠君」や「愛国」等の言葉を人情から出たものと評価しているが、日露戦争期の社会組織においては、人情を束縛する用語になっていると論じている。このことから見ても、石川は日露戦争期の社会組織下における「忠君愛国」の道徳観に対しては批判的な立場を示していた。

この「忠君愛国」に対して、石川が愛国心観を示したものとして週刊『平民新聞』第31号1904（明治37）年6月12日に発表された「愛国心と他愛国心」が挙げられる。この論考で石川は愛国心について「我は日本国を愛す、日本国を愛するが故に同じく他国をも愛す、他国を愛するが故に自国を愛せずと言ふ可らず、我に愛国心あり、故に深く世の所謂敵愾心てふものを憎む、蓋し国家を過まり、国民を蠱惑する之れより甚だしきもの無ければ也」¹⁰⁸と論じている。石川は愛国心について、自国と他国の両方を愛するものとして、それ故に他国を倒そうとする精神や国家が誤り国民の心を乱すものを憎むべきものと論じている。この敵愾心については、前週に発刊された週刊『平民新聞』の記事における「仁愛と国家」において「敵愾心に理性の中心を奪われたる現時の日本人」¹⁰⁹と日本人の理性を奪っているものと表現している。このことから、当時の日本人の愛国心について他国との敵対する関係で強化していることを石川は批判している。

石川にとって愛国心とは「愛自国心と愛他国心とは衝突するべきに非ず、寧ろ愛自国心ある者は必ず愛他国心ある可き也」¹¹⁰と論じている。その内容は自国への愛国心は他国と衝突するものではないとして、対外関係において強化されていった「忠君愛国」の理論とは対になっている。石川の愛国心の特徴は「忠君愛国」の理論とは異なり、愛国に求めるものは忠君ではなく、愛によって自国と他国をも愛し世界に視点を置いていた点にあると言えるだろう。

第2節 「小学教師に告ぐ」とその時代背景

本節では、石川三四郎が週刊『平民新聞』第52号、1904（明治37）年11月6日の紙面にあげた「小学教師に告ぐ」の内容を中心に据えて論じていく。まず、石川の「小学教師

に告ぐ」を掲載した週刊『平民新聞』第 52 号では、「社会主義者を教育界に入れよ」と題して、教育の記事を多く掲載したと書かれている¹¹¹。以下はその内容である¹¹²。

吾人は日本の教育社会に向つて、社会主義を弘通せんとを切望するが故に、本號は特に此目的に供せんか爲めに編輯し、多く教育に関する論文を掲載したり

本紙讀者中、自ら教育家たり、若くば教育者に知人を有せらるゝ諸君は、願はくば本號を成べく多數の教育家に讀ましむるの手段を取られんことを、特に本號が各地多數の小學教師諸君に讀まれんことは、吾人の尤も喜ぶ所也

このように、週刊『平民新聞』第 52 号は、教育界に社会主義の思想を広めたい意図をもって、教育号として編集されていた。その教育に関する論考のなかでも、第 52 号の 1 面を飾った石川の「小学教師に告ぐ」は、日露戦争下における日本の小学校教育の問題を取り扱ったものである。この記事は、石川の教育に関する初めての体系的な論稿であって、明治期の小学校教育の問題点や本来あるべき小学校教育の姿について論じられている。石川は「小学教師に告ぐ」の冒頭で、小学校教師の職務の重要性について論じている¹¹³。

抑も小學教育は教育中の教育なり、教育の基礎たる教育なり、次代の人民を造る可き唯一手段たる教育の根本事業なり、且つや其造る可き次代の人民は、現代の其れに比して一段の進歩を來すことを要す、蓋し進歩は人生を幸福ならしむる所以にして教育の必須要件なればなり、然り而して此職に在るもの、又た必ず其智と徳とに於て現世に超越し、現世を導きて一段の向上を爲さしむるの能あることを要す、是れ蓋し職務の當然の結果なり、諸君の責務や眞に重しと言ふ可し

石川は小学校の教育について人民の教育の基礎であり、次世代の人民を育む唯一の手段であるとして、その重要性を論じている。その点において、小学校教育に携わる教育者は、知識と道徳を向上させていく職務を担い、その重責を負っている。しかし、当時の小学校教師の仕事について、石川は次のように批判している¹¹⁴。

諸君の事業たる教育は國家強制の教育なり、總ての國民は法律が命ずる限度に於て其兒童を就學せしむるの義務あるなり、然り如何なる貧者と雖ども其義務を負

ふこと如何なる富豪にも劣らざる也、而も國家は一ヶ月の授業料をも免除せず、一本の筆をも給與せずして、而して如何なる貧者にも之を命ずるなり、諸君は就學を督勵せんが爲めに常に民家を廻訪す、されば其困窮に陥れる貧家に遭遇すること多からん、諸君は彼等の前に立てるの時果して如何の感かある、彼等は一ヶ月の授業料を支給する能はざるのみならず、一本の筆を買ふこと能はざるのみならず、唯だ一日を支ふるの衣食すらに窮するなり、然り諸君は能く之を知れり、而して國家の威力に依て之に就學を督勵するの時、諸君は如何の感かある、彼の貧者は心中必ず諸君を冷罵するならん、「無情なるものよ」と、又た思はん、「此等は諸君に依つて辱しめをこそ受くれ、曾て一點の恩澤をも受く可きものに非ず」と、諸君は之を思ふて慄然として怖るゝ無きや是れ實に諸君の國家を呪ふものに非ずや

この引用部では、教育者が従事している仕事の一つとして、小学校へ強制的に就学させている点が述べられている。それは、国家の強制によるものであり、教育者はその一端を担っていた。石川は貧困者には1ヶ月の授業料を免除せず、一本の筆さえ援助されることもなく、就学が義務づけられている。また、教師は就学を督励させるために、常に民家を回って、貧困家庭に陥っていても国家権力により就学を督促させる。国家権力を背景に教師が貧富家庭においても小学校に督促させることに対して、石川は教師の職務ではないとして批判している。また、このような貧困家庭でも強制的に就学させる義務教育の問題点を指摘しているといえるだろう。

日露戦争期の小学校の就学率が約90%近くまで上がった背景には国民の教育への関心のたかまりや、1900（明治33）年に改正された「小学校令」によって尋常小学校の授業料の徴収が廃止されたことなどがあげられる。その一方で、多賀秋五郎は「このような数字の陰には、国家権力を背景とした当事者のきびしい出席督促のあったことに注意しなければならない」¹¹⁵と論じている。このことから、当時の小学校教師は各家庭を回って、就学を督促していたのであろう。

ただ、「小学教師に告ぐ」で石川は「国家は一ヶ月の授業料をも免除せず」と論じているが、1900（明治33）年に改正された「小学校令」において、基本的には授業料を無償と定めた点は、矛盾しているだろう。ただ、その「小学校令」第57条には「特別ノ事情アルトキハ府県知事ノ認可ヲ受ケ市町村立尋常小学校ニ於テ授業料ヲ徴収スルコトヲ得」¹¹⁶と

定められているように例外規定も定められている。当時は日露戦争下だったこともあり、市町村にとって教育費が負担となっており、授業料を徴収していた自治体もあった。

たしかに、『明治以降教育制度発達史』には公学校収入に授業料が示されており、1903（明治36）年の授業料は約500万円であり、その翌年の1904（明治37）年は約530万円であった。授業料が増加している背景は、授業料を新たに徴収し又はさらに増収となった学校が増えているからである。それは、『教育時論』の「学校授業料」にて、「明治三十七年度より新に授業料を徴収し又増徴したるもの市町村立小學校に在りては四百九十五校」¹¹⁷として、前年度よりも授業料収入が増えた学校が増えていることを報告している。

また、同じ『教育時論』の「小学児童に対し献金奨励の法果して誤なきか」には、「何々小學校児童一同の出金幾圓と、そが名儀こそ立派なれども、元來彼等は獨立の働あるものに非ず、其自ら調達したるの金果して幾何かある、多くは其教師の命により、父兄に請求して而して己れが名儀にて校に持來りしものなり」¹¹⁸と教師が父兄に出金を求めている記事も見られる。このように、教育費の削減に伴い授業料を増加させ、献金として教師が父兄に負担を求めることもしていることから、当時の家庭において教育費の負担も増えているといえる。このような時代背景であるから、国家権力によって小学校に就学を奨励することは、貧困家庭には厳しいと言える。

石川は小学校教師の待遇の問題点について、給料の面から指摘している。以下に引用するのはその指摘内容である¹¹⁹。

然れども顧みて諸君の境遇を見よ、諸君が得つゝあるの俸給は幾何を數ふるや、諸君が受けつゝある世の尊敬は何程を價するや、一人の民をも教化せず、一錢の富をも増殖すること無き彼の國務大臣の十分一の俸給を得るものは、諸君の中に於ては全く之れなきにあらずや、否な老朽俗吏の遁隱者たる縣知事の十分一を得るものすら殆ど稀なるに非ずや、而して郡長、村長、助役程にも世の尊敬を受けず、甚だしきは巡查郡書記等にも劣るあるに非ずや、諸君の境遇や眞に憐れむ可きなり、然も國家は諸君を此境遇に置きて而して彼の大任を帯びしむ、其矛盾や甚しき哉

石川は、小学校教師の職務が人民の教育の基礎であり人民を育む重責のなかで、尊敬を受ける教師の給料の問題点について指摘している。石川は、一人も教育をしない國務大臣

の給料の十分の一の給料を貰っている小学校教師は誰もいないとしている。さらに、郡長や村長などの世の尊敬を受けない者よりも給料が低いことに対して、石川は教師の環境や待遇の劣悪さについて言及している。

教育費の削減並びに給料の削減は『教育時論』でも教育問題として取り上げている。例えば、「時局と小学校教育費」において「市町村教育費の如きは、むろん大削減をなさんとする、某元老等の計畫は、已に内閣にても、略ぼ同意し」¹²⁰ていると書かれている。その教育費の削減により、教師が退職するケースもあることを『読売新聞』の「学制研究会の檄文」では「時局の爲め市町村が教員の退職するまでに教育費を減少せしを遺憾とし長文の警告書數萬部を印刷し一昨日各教員に配布したり」¹²¹と報じられている。このように、教育費の削減によって教師が退職するケースもあり、『教育時論』や『読売新聞』から見ると日露戦争下において教師の待遇は悪くなっているといえるだろう。

日露戦争期の教員の給料について石戸谷は「俸給の割引や支払い延滞が、全国各地で行われたものようである」¹²²と論じている。また、石戸谷は小学校教師の仕事量がこの時期から増加したとして、「町村にあって青年団を指導したり、補習学校の教育に当たったりする者は、主として小学校教員である。教員は二部授業などのほかに、この方面の仕事も増加されたのであった」¹²³と論じられており仕事量が増加している。さらに、石戸谷は「教員全体の平均月俸額についてみると、戦時中も教員の待遇はいくらか上向いている。（中略）物価は明治三十六年からずっと上昇を続けていたのであるから、教員待遇の実質は、日露戦争とその前後、悪化の一路をたどっていたわけである」¹²⁴と論じている。このことから、当時の教師は仕事量が増加している一方で、物価上昇に対して給料があまりにも安いと、教師の重責とつりあってないと言えるだろう。また、石川は教師の教育内容が人民のためになっていないとして、次のように論じている。¹²⁵

諸君（教師）の事業は人民の教育にあり、然れども諸君の職務は國家の職務なり、而して國家は國家の爲めに其人民を教育せんとするも、人類として之を教育せんと欲せず、一國の民を造らんことを欲する也、世界の子を造らんことを欲せず、小なる〇〇（國家）道德を教へしめて大なる博愛道德を斥く、而して前の小なる教育を棄て、後の大なる教育を施さんとするものあれば、直ちに國賊の名を以て放逐せらる、諸君の職務は實に斯の如きものなり、諸君の職務は人類を完全ならしめんが爲めに非ずして、之を不具ならしめんが爲めに存する也、且つや國

家の威力を以て之を行ふ也、世に殘忍なる、又た之より甚しきものありや、而も世は諸君を呼んで先生と言ひ、教育家と稱す、何ぞ其甚だ無意味なるや、否な畜に無意味なるのみならず、先生とは一の輕蔑語となれるなり、教育家とは無能者の一名稱となれる也

この部分では、教師の仕事内容についての問題点を指摘している。石川は、教職は国家の仕事だが、教育は国家のためにするべきではないと述べている。石川は、教育は国のためではなく、民衆のためにあるべきと考えを示している。石川にとって教育は、一国の民ではなく、世界の子を育てるべきであり、小さな国家道徳を教え込むのではなく、大きな博愛の道徳の教育をすべきだと論じている。このような教育内容を、本来教師が行わなければならない仕事として、石川は主張している。

「小学教師に告ぐ」では、一点目に小学校教師の職務、二点目に小学校教師の待遇、三点目に小学校教育の内容の三つの視点から論じられている。

一点目の小学校教師の職務について、石川は子供に対し人民の基礎になる教育を施し、次世代の進歩のために仕事をすると論じている。石川はキリスト教社会主義期において、群馬県室田村室田高等小学校での代用教員として勤めていた。石川は、教師生活の日々について、「自叙伝」で次のように振り返っている¹²⁶。

この小学教員の職は私に真の生き甲斐を感じさせました。自分の心持がすぐに児童に反映する。児童は自分の鏡のようです。世に教師、殊に小学教師ほど生き甲斐のある生活が他にあるかと私は感じたのです。村童達と野に行き山に遊ぶ時などは天国を感じさせられました。蕨とりに相馬山に登って一望千里の関東平野を眺めた時の感興は今も忘れられません。はるかに霞を隔てて銀線のように見えるのは、わが幼なじみの利根川の水流ではありませんか、すべては夢の国に遊ぶごとく感じさせるのでありました。

小学校教師としての石川は、生き甲斐を感じながら生活を送っていたようである。ここで、石川は小学校教師の児童に対する影響力を察知し、その職務における重要性を感じていた。石川は小学校教師の職務について、教師の心持ち次第ですぐに児童に反映する点に言及している。さらに、石川は児童たちと野に行き山に登り景色を眺める活動に対しては

特別印象に残っているようであり、彼自身もそのような活動が小学校教師として重要な活動だと認識していたのではないかと考えられる。石川の主張は、小学校教育においては、教師の活動や教えが児童に反映されやすく、そのために、国家の人民になる教育ではなく、一人の人民になるための基礎教育であるべきと指摘していたと考える。

二点目の小学校教師の待遇について、石川は教師の職務と給料やその置かれている立場が釣り合わないとしている。たしかに、小学校教師の給料はとても低いうえに、待遇改善を訴える発言や行動に制限があり、とても劣悪な環境であった。また、石川自身も小学校教師として働いており、このことは痛切に感じたと考えられる。つまり、石川は小学校教師という仕事は責任が重く、重要な職業のため、待遇面をよくすることを望んでいた。

三点目は、小学校教育の内容として、国家道徳による愛国心を教え込むのではなく、博愛道徳による愛国心を示すことの重要性を説いている。石川が主張している博愛道徳の博愛はすべての人を平等に愛するということである。ここから石川は自国でもなく、他国でもなく、全世界平等ではなく、ただ愛するということが重要であると述べている。石川の言う愛国心は、自分の生まれた郷土を愛するなど、自国の幸福を思うが故の愛国心は肯定的で、むしろ、国家が道徳教育と称し、精神面を操作し国家組織に組み込むような挙国一致の愛国心教育を批判している。日露戦争下の挙国一致政策が行われている当時の教育は、石川が理想としている博愛道徳的な教育とは大きく異なっていたと言える。石川は挙国一致を育む道徳教育をするのではなく、平等に世界を愛せる人材の博愛道徳による教育を目指していたと考えられる。

第3節 『虚無の靈光』から見る石川三四郎の「人格の独立」

石川の『虚無の靈光』は、1908（明治41）年に製本中に新聞紙条例に問われたことにより、没収され発行禁止処分となったものである。『虚無の靈光』の製本について、石川は『自叙伝』で次のように記述している¹²⁷。

明治四十一年五月十九日、私は刑期が満ちて巢鴨監獄の鉄門を出ました。携えて出たものの中に、十五冊千五百頁のノートがありました。その大部分は後日の『西洋社会運動史』および『虚無の靈光』となったのです。そのうち『虚無の靈光』は、私の獄中の瞑想の結果を綴ったもので、幼稚ではありますが、信仰告

白ともいふべきものでもありました。こうして出獄後直ちに印刷して百頁余りの小冊子ができたのですが、「虚無」という名前が警視庁の忌憚に触れて、製本がまだ完成されないうちに全部を押収されてしまいました。これは警視庁も見当違いであったことに気がついたでありましょうが、諸新聞にも非難の文字が現れました。私は印刷所に頼んで「破れ」を集めて辛うじて三冊を製本することが出来ましたが、その後私が放浪している間に一部もなくなってしまいました。原稿のノートも散逸して跡かたもなく消失した訳です。本当の虚無になってしまったのです

以上のことから読み取れるように、石川の『虚無の靈光』は現在完全に完成した原本が存在しない。また、『石川三四郎著作集』第5巻の「解題」によれば、現在資料として残っているものは、いずれも石川が製本したものを筆写したものであることを指摘している¹²⁸。また、石川の『虚無の靈光』は全11章構成となっており、そのうちの第1章の途中から第2章末まで欠落している。このように、『虚無の靈光』は欠損部分が目立つ資料ではあるが、キリスト教社会主義とは異なる社会運動の可能性を見出し、後の「土民生活」思想の兆しとなる著作となっている。

石川は『虚無の靈光』において、第7章で「社会と個人」と題し、社会と個人の関係を論じ、その関係性から「自我」の重要性を論じている。以下の引用は、その内容である¹²⁹。

予は、社会的協同と個人的自治とは人生々活に欠くべからざる両方面であると思ふ。此両者は一つの盾を両面より見たるに過ぎぬと思ふ。(中略)即ち人生々活を客観的に観る事と主観的に観ることである。人生々活の状を客観する時は、人は決して独立のものでは無い。個人生存の条件は社会である。社会無ければ個人無く、個人は社会の一分子として一切他力の生活を為すに過ぎない。(中略)然るに一転して自己を主観するの時、吾等は外来の如何なるものにも屈せざる自我を持つて居る、自我の自発的能力を有し、自発的活動を行つて居る、約言すれば、独立の生命を持つて居る。(中略)吾等は実に此の如く一見相調和せざる如き両面を具へたる人間である。(中略)

併し、此両面の関係は決して不調和のものでは無くて寧ろ相互に欠く可らざるものである。試みに看よ、自我といふ独立の自覚ありて始めて茲に自治といふ作

用が起る、自我に自治の能力あればこそ、協同生活の実挙がるのである。協同生活の実挙がりて此に始めて社会が成立するのである

石川は、社会的協同と個人的自治があるべき社会の姿であることを示唆している。石川は、まず独立の生命を持つ個人の「自我」によって「自治」を行い、自治能力を有する「自我」は協同生活を行い、その協同生活が社会になると論じている。石川は明治末期の社会について「但し現下実際の状態として個人と社会との間に衝突があるのは、最も著しき事実であるが、是れは現代社会の制度習慣が悪いからである。而して此の如き制度、習慣の出来たのは、人民が「物慾の蔭」に蔽れたからである」¹³⁰と評している。この「物慾の蔭」について、『虚無の靈光』では、次のように記されている¹³¹。

食ふ、飲む、恋ふ、見る、聞く等の物慾は皆な是人類天真の感情である。予の仮りに名けたる虚無の靈光の発用である。されば此靈光ありて始めて物慾あり、物慾ありて始めて物慾の蔭ありと言ふべきものだ。約言すれば、靈光ありて始めて、物慾の蔭があるのだ。然るに其「蔭」は人間の本情にして心靈の翼たる——人間が之に依て生き之に依て動く処——の「物慾」の蔭なのである。従て人自ら之に囚はるゝも亦強ち無理では無い。

併し、此「蔭」ほど恐ろしいものは無い。一旦我等の心靈が物質の翼を得て動くや、同時に此「蔭」が出来る、而して物慾は天真の物慾其ものを満足するに止まらずして、我が「蔭」を追及し初めるのである。処が其「蔭」は其ものゝ蔭である。故に追へどもノ、果しが無い。(中略)世に修身、道德といふものあるも之を防止せんが為めである。人間が一身を誤るも此「蔭」である。一家を乱るも一國を危うくするも、皆唯だ此「蔭」である

石川にとって「物慾そのもの」は、人間が元来備わっている自然の感情としている一方で、真に人間を惑わすものは「物慾の蔭」であると論じている。石川は「蔭」に溺れる者は「飲み過ぎて頭脳を傷け、或は色に溺れて家財を蕩尽し、或は名に迷ふて自己の使命を忘却するといふ始末になる」¹³²と述べている。この「蔭」こそが、真に恐ろしいものとして、「物慾そのもの」と「物慾の蔭」を識別できなくなる。石川は、「蔭」の識別を認識できない者、つまり「蔭」に囚われた者として物質主義者、精神主義者を挙げている¹³³。

然るに世の物質主義者は往々其陰までを本来の物慾として之を満足することに賛同するのである。是れ彼等が物質實在の原理より其発動たる物慾を人間の本情となし、而して未だ「物慾其もの」と「物慾の蔭」との差別を知らざる為めに、総てを物慾と認むるより起る所の誤謬である。

之に反して、世の精神主義者は、往々にして人間本来の感情たる物慾其ものをも之を「罪」なりとして斥くるのである。是も亦物質主義者と同原因よりして此の如き誤謬に陥つたのである。即ち彼等は「物慾其もの」と「物慾の蔭」との区別を知らぬ為め、而して「物慾の蔭」の恐ろしき弊毒を憎むの余り、遂に本来の物慾其もの迄も罪惡なりと誤認する様になつたのである

このように、石川は物質主義者、精神主義者ともに「物慾」と「物慾の蔭」の分別ができないために、「物慾其もの」を「物慾の蔭」と認識してしまっていると指摘している。つまり、物質主義者は「物慾の蔭」を人間の本情として、精神主義者は「物慾其もの」を罪として誤謬しており、それぞれ一面的な見方に囚われている限り、自然にある内なる「自我」は目覚めないと云える。

それでは、石川はどのように「蔭」を克服しようとしたのか。それは、「内観自省、常に我虚無裡に輝く所の靈光に対面することを習ふが最も能き方便と思ふ」¹³⁴であった。つまり、石川は「内観自省」に現在で言うところの「内省」によって「蔭」を克服しようとした。石川は「光明に対する時には決して「蔭」は見えない。「蔭」の見ゆるのは必ず光明を背にした時なのである」¹³⁵として内なる自然と対面して、「内省」することの重要性を指摘している。そして、石川は「近世無政府主義の遠祖」にして、近世的に自由の原理を説明した者と評価したルソーの言葉を引用して、「人格の独立」を見ることになる。

石川は、第 10 章の「自由の原理」の冒頭にて、「吾人は我が直接の感情によりて我存在を知り、また我てふ者が自由なる思想と意志の作用とを有する者なることを知り、従つて我靈魂の物質ならざることを知る」¹³⁶とルソーの一節を引用している。この一節から石川は、「内省」をする時「自由常住の靈光」を放つとして、ここに始めて「如何なる外物も以ても犯すこと能はざる人格が確立する」¹³⁷と論じている。石川にとって、「人格の独立」が自由を、そして民主主義が成立する要件として必須であった。その内容は以下の通りである¹³⁸。

個人の努力は生命発展の上に及ぼす無窮の加勢となる。個人生存の意義が判然と分明^おか。個人は価値ある存在となる。然り此の如く人格の独立あり個人の価値明になりて茲に始めて、自由の理由が立つのである。〔中略〕吾等は既に自己独立の生命を自覚して自由の希求を為す者である。而して此自覚より起りたる「我」は既に被造物に非ずして造物者である。〔中略〕又社会組織が健全なるに従つて吾等の社会的自由は益々完全に赴くのである。「民主々義」の主張は近世理想の一大元素である。併し此主張の基礎は実に自由の原理にある。自由の原理が確立せねば、決して民主々義は成立せぬ。換言すれば独立の人格無限の心霊が吾等個人に存立せぬ限りは民主々義の主張は成立しない

石川は、自由の原理によって民主主義が成り立つとして、その自由の原理には「人格の独立」が必須であると論じている。つまり、石川にとって「民主主義」とは社会的協同と個人的自治によって成り立つ社会ともいえる。特に、この個人的自治が果たす役割は多く、自我を自覚し、「人格の独立」を為す他ならなかった。この『虚無の靈光』は、石川の民主主義の方向性を定めたものとして、評価できるだろう。

第4節 小括

本章では、キリスト教社会主義期の石川の教育思想として、道德観、「小学教師に告ぐ」、『虚無の靈光』を検討して来た。石川は、日露戦争によってナショナリズムが高揚していく社会に対し、反政治、非戦論の立場で、社会問題や社会批判に関する論考を取り上げていた。

キリスト教社会主義期の石川の道德観は、日露戦争下で主流の道德観となった「忠君愛国」を否定し、博愛道徳的な道德心の重要性を示していた。石川は、本来「忠君」や「愛国」といった道德心は、人間が自然に持っているものとして、日露戦争下における「忠君愛国」は人間の感情を束縛するものとして機能していると論じている。この権力側から施される「忠君愛国」の精神は、敵愾心に理性の中心を奪われている状況であった。このような状況は、石川の『虚無の靈光』の「蔭」に覆われた民衆にあたると言えるであろう。石

川は排外的な「忠君愛国」の精神ではなく、博愛道徳的な観点から世界的な視点から愛国することを求めていたと言える。

次に、石川の「小学教師に告ぐ」では、小学校教育における教育者の職務、教育者の待遇、小学校教育の内容が書かれている。小学校教師の職務は、小学校への就学の督励に従事して、本来行うべき次世代の子供の知識、道徳を向上させるものとは異なっていた。次に、教育者の待遇については、教育という人民の基礎たる事業に対して、給料を含めた待遇面の劣悪さを述べた。最後に、小学校教育の内容では、国家による道徳教育を批判し、それは石川の道徳観で論じた内容そのものであった。石川は教育者としての経験から、教育者の姿勢や教えはそのまま児童に反映させるものであり、その自覚と責任を持って職務を遂行すべきものと考えていた。このような教師観は、当時としては珍しいわけではないが、石川は師範学校を経ずに教師生活を送ったため、その教育観にとらわれることなく、自由党员や社会運動家たちとの交流の影響も受けながら教師観を作りあげていったと言えるだろう。

最後に、石川の『虚無の靈光』は、社会と個人の間を考察し、民主主義の社会を構築する上では、社会的協同と個人的自治の重要性を示したものであった。石川は当時の社会について、「蔭」に覆われた個人によって構築された社会となっていると考え、個人的自治が果たせていない社会となっていた。個人的自治を成立させるためには、「人格の独立」が必要であり、それは「内省」によって果たされるとした。石川自身も、自身のキリスト教社会主義運動に参加している時は、「人格の独立」が出来ておらず、堺や幸徳、木下と共に活動していた。石川が「人格の独立」を果たせたのは、獄中における読書と瞑想によって、自身の活動を「内省」した際に「虚無の中に靈光」を見て「人格の独立」を果たせた。石川は、「蔭」から脱却した個人によっておこる、社会的協同と個人的自治によってできる共同体こそが真の民主主義であるとした。

キリスト教社会主義期の石川は、教育者が国家による強制的な教育を施し「忠君愛国」の価値観を組み込む教育の片棒を担いでおり、人間の自然性を覆い隠し、個人の人格を喪失させていた点を感じとっていたと言える。「小学教師に告ぐ」を発表した頃の石川は、「人格の独立」の考えを示せてはいないが、個人に対する教育の重要性を感じ取っていた点で「人格の独立」の兆しはあったのではないかと考える。石川は「蔭」で覆っている社会の改革には、個人の改革は必須の要件とみなし、それは伝道による啓蒙的な社会活動によって行っていくものであった。

注

- ¹ 石川三四郎の『虚無の靈光』の「序（我が家、我が村）」によると、五十嵐家は「我が家は代々村の名主にして、又代々船の間屋（今の運送店）であつた。村民の殆ど全部は我家の業務に従ふ乗船（船頭）車引、馬丁であつた。嘗に村内のみならず、二三里以内の近村内にも此業を以て渡世^{よわた}せる者が尠くなかつた。家業の大部分は利根の河流に拠て江戸に往復し、種々なる貨物の運搬を為すことと、車馬に拠て上州鬼石町辺より秩父郡内各地まで貨物を運搬往復することであつた。殊に「御年貢米」を江戸に運搬するは最も責任重き、最も大なる事業であつて、従て我が家の最も名誉となせし所、又た最も威光を輝かせし所以であつた」と述べている。（引用は石川三四郎『虚無の靈光』（1908年）『石川三四郎著作集』第5巻、青土社、1978年、186頁、なお、ルビと括弧は引用元によるものである）。
- ² 本庄小学校は現在の本庄市立本庄西小学校、本庄市立本庄東小学校に分校されたと推察される。それぞれの根拠として次のサイトを参考にした。本庄市立本庄西小学校沿革史（http://edu-honjo.com/nishisyo/?page_id=35）（2022/11/26に確認）、本庄市立本庄東小学校沿革（http://edu-honjo.com/higashisyo/html/htdocs/?page_id=29）（2022/11/26に確認）。
- ³ 石川三四郎『自叙伝』（理論社、1956年）『石川三四郎著作集』第8巻、青土社、1977年、60頁。
- ⁴ 前掲書『虚無の靈光』290頁。
- ⁵ 前掲書『自叙伝』50頁。なお、引用文中の括弧内は筆者によるものである。
- ⁶ 同上書、48頁。
- ⁷ 同上書、47頁。
- ⁸ 同上書。
- ⁹ 板垣哲夫「石川三四郎（一八七六～一九五六）における思想的出発」『歴史』通号 68、1987年、95頁。
- ¹⁰ 同上。
- ¹¹ 北沢文武『学問と愛、そして反逆 石川三四郎の生涯と思想 上』鳩の森書房、1974年、13-14頁。
- ¹² 前掲「石川三四郎（一八七六～一九五六）における思想的出発」95頁。
- ¹³ 前掲書『自叙伝』52-53頁。
- ¹⁴ 石川が一度目の上京で学んだものは、彼の『自叙伝』によると国語や漢文、数学、英語

などである。ただ、これらは不規則な勉強であったため上達はしなかったとしている。ただ、根本通明の論語や詩経の講義や立花銚三郎と元良勇次郎の倫理学の講義は多く影響を受けたと石川は振り返っている。また、根本については日清戦争の見解の挿話が「自叙伝」で記されている。内容は次の通りである。「今の清国は孔子の中国ではない、これは孔子の国を滅ぼした豚尾男（当時の中国人はまだ弁髪を付けていたので、これを形容して、こう言ったのです）、即ち満州朝の支配する国である。これを討つものはむしろ孔子の精神にかなうものである」と書かれている。これに対しての石川の主張は書かれていない。引用は、同上書『自叙伝』60頁。なお、引用文中の括弧内は引用元によるものである。

¹⁵ 前掲「石川三四郎（一八七六～一九五六）における思想的出発」96頁。

¹⁶ 石川三四郎「私の精神史」（思想の科学研究会編『私の哲学』中央公論社、1950年）『石川三四郎著作集』第4巻、青土社、1978年、284-285頁。

¹⁷ 同上、285頁。なお、引用文中の中略は筆者によるものである。

¹⁸ 同上。

¹⁹ 同上。なお、引用文中の傍点は引用元によるものである。

²⁰ 前掲「石川三四郎（一八七六～一九五六）における思想的出発」97頁。

²¹ この事件の首謀者は石川の兄たちであるが、石川は硫酸の購入を指示されて事件に関わっている。ちなみに、石川は幼かったため薬屋が彼に硫酸を売ることはなく、結局長男が購入することになった。そして、この事件は兄たちの失敗に終わり、事件後の警察の家宅捜索時に、石川が硫酸を買いに行った際に持参した購入依頼書があったが、母の機転により彼は難を逃れることになった。

²² 前掲書『自叙伝』57頁。

²³ 西山拓『石川三四郎のユートピア構想—近代日本の知識人による理想社会論構築と社会改革の試み—』早稲田大学博士論文、甲第2763号、2009年、54頁。

²⁴ 石川の詳しい教育活動については、次の3点の資料からは確認できなかった。

室田町誌編集委員会編『室田町誌』室田町史編纂委員会、1966年。

榛名町誌編さん委員会編『榛名町誌 通史編 下巻 近世・近代現代』榛名町誌刊行委員会、2012年。

高崎市市史編さん委員会編『新編 高崎市史 通史編4 近代現代』高崎市、2004年。

ただし、上記の資料から、石川が働いていた室田高等小学校の規模やクラス編成については確認できた。榛名町誌編さん委員会編の『榛名町誌 資料編4 近代現代』によると、1896（明治29）年4月6日に石川三四郎は高等校委嘱を命じられており、高等校の教員は「訓導 伊藤三郎、委嘱 石川三四郎」の2人であった。高等校の児童数は、68人で男51、女17にまでは確認できる。ただ、『室田町誌』には、高等校の児童数は73人とあり、男56、女17とあるため、この二つの資料の間に齟齬が生じている。当時の石川の教育活動と正確な児童数については、今後の課題として研究を進める必要がある。

- ²⁵ 前掲書『自叙伝』64-65頁。なお、引用文中の中略は筆者によるものである。
- ²⁶ 前掲「私の精神史」286頁。
- ²⁷ 前掲書『自叙伝』65頁。
- ²⁸ 同上書、98頁。
- ²⁹ 同上書。
- ³⁰ 前掲書『自叙伝』67頁。
- ³¹ 前掲「石川三四郎（一八七六～一九五六）における思想的出発」97-98頁。
- ³² 理想団は1901（明治34）年7月2日に『萬朝報』第2791号の紙上に発表された「平和なる檄文 理想的団結を作らん」によって創立するという宣言が出されたのが誕生のきっかけである。朝報社における社会運動の活動の場であった。詳しくは、第1部第2章第2節にて扱う。
- ³³ 前掲書『石川三四郎のユートピア構想—近代日本の知識人による理想社会論構築と社会改革の試み—』55-56頁。
- ³⁴ 前掲「私の精神史」286頁。なお、引用文中にある堺枯川は堺利彦の筆名である。
- ³⁵ 石川三四郎「可愛がつて貰った黒岩さん」（涙香会編『黒岩涙香』扶桑社、1922年）『石川三四郎著作集』第6巻、青土社、1978年、121頁。
- ³⁶ 前掲書『石川三四郎のユートピア構想—近代日本の知識人による理想社会論構築と社会改革の試み—』56頁。
- ³⁷ 前掲「石川三四郎（一八七六～一九五六）における思想的出発」100-101頁。
- ³⁸ 石川三四郎「本誌発行に就ての所感」（『新紀元』第1号、1905年）前掲書『石川三四郎著作集』第1巻、382頁。
- ³⁹ 前掲「私の精神史」287頁。
- ⁴⁰ 大沢正道「田中正造と谷中村」同上書、512頁。
- ⁴¹ 石川三四郎「三度谷中村を訪ふ」（『新紀元』第8号、1906年）同上書、396頁。なお、引用文中の括弧内は引用元によるものである。
- ⁴² 石川三四郎「階級戦争論」（『新紀元』第7号、1906年）同上書、109頁。
- ⁴³ 鶴見は石川への影響として「政治を上から見なくなったということにもあらわれる。田中が、議会をとおして中央政府にはたらきかける方法に望みをたって、谷中村に入ってその生涯をおえたことを、一つの思想的発展として見る力を、石川はもった」と論じている。（引用は、鶴見俊輔「解説」鶴見俊輔編『石川三四郎集』近代日本思想体系16、筑摩書房、1976年、466頁）。
- ⁴⁴ 前掲「私の精神史」287-288頁。なお、引用文中の中略は筆者によるものである。
- ⁴⁵ 同上、288頁。なお、引用文中の中略は筆者によるものである。
- ⁴⁶ 同上、288-289頁。
- ⁴⁷ 前掲書『自叙伝』148頁。
- ⁴⁸ 石川が罪に問われていたのは、社会党第二回大会の模様を日刊『平民新聞』第28号（2

月 19 日) に発表したことによる、社会の秩序を乱すものと断定されたためである。

⁴⁹ 前掲「私の精神史」289 頁。

⁵⁰ 前掲書『自叙伝』201 頁。

⁵¹ 同上書、255 頁。

⁵² 石川三四郎「基督教界の二大人物(内村氏と海老名氏)」(週刊『平民新聞』第 8 号、1904 年) 鈴木範久編『内村鑑三選集』別巻第 1 巻、岩波書店、1990 年、41 頁。なお、引用文中の中略は筆者によるものである。

⁵³ 石川三四郎「内村さんの思い出」(鈴木俊郎編『回想の内村鑑三』岩波書店、1956 年) 『石川三四郎著作集』第 6 巻、75 頁。なお、引用文中の括弧内は筆者によるものである。

⁵⁴ 同上書、75-76 頁。

⁵⁵ 前掲書『自叙伝』92 頁。

⁵⁶ 同上書。

⁵⁷ 海老名弾正「新武士道」(『新人』第 2 巻第 10 号、1902 年、12 頁) 北村正光『新人』第 2 巻、龍溪書舎、1988 年。

⁵⁸ 石川三四郎「人道主義」(『家庭雑誌』第 8 号、1903 年) 前掲書『石川三四郎著作集』第 1 巻、20-21 頁。なお、引用文中のルビは引用元によるものである。

⁵⁹ ここで論じる恋愛観とは、夫婦関係を前提にした夫婦観の内容が主である。しかし、当時の石川は恋愛の失敗などの苦悩から書かれたものであるため、ここではその背景も含めて恋愛観と示すこととする。

⁶⁰ 前掲書『自叙伝』94-95 頁。括弧は筆者によるものである。三点リーダーは引用元によるものである。なお、石川の「自由恋愛私見」は、要約すると、夫婦生活には恋愛が至上命令であるとし、恋愛が喪失したら離別する事こそが貞操と唱えたものである。

⁶¹ 後藤彰信「石川三四郎の自由恋愛論と社会構想—本郷教会と平民社における自由恋愛論争と国家魂論争」『初期社会主義研究』第 18 号、2005 年、86 頁。

⁶² 辻野功「石川三四郎—海老名弾正との関連において—」『キリスト教社会問題研究』通号 23 号、1975 年、97 頁。なお、引用文中の中略と括弧内は筆者によるものである。

⁶³ 同上書、94 頁。

⁶⁴ 黒岩周六「平和なる檄文 理想的團結を作らん」(『萬朝報』第 2791 号、1901 年 7 月 2 日刊行、1 面、項目「(三)何故に理想團と謂ふ」) 『萬朝報』刊行会編『萬朝報』第 36 巻、日本図書センター、1985 年。

⁶⁵ 有山輝雄「理想團の研究〔I〕」『桃山学院大学社会学論集』第 13 巻 1 号、桃山学院大学総合研究所、1979 年、45 頁。

⁶⁶ 前掲「平和なる檄文 理想的團結を作らん」項目「(九)最も力を至す可す部分」。

⁶⁷ 同上、項目「(十二)公共の機關と之を率ゆる心」。

⁶⁸ 前掲「理想團の研究〔I〕」46 頁。

⁶⁹ 自由投票同志会の発起人は、花井卓蔵、黒岩周六、山縣五十雄、山縣悌三郎、斯波貞吉

の 5 人である。これは、自由投票同志會「自由投票同志會組織の主意」（『萬朝報』第 3360 号 1903 年 1 月 22 日刊行、1 面）「萬朝報」刊行会編『萬朝報』第 42 卷、日本図書センター、1985 年に記載されている。

⁷⁰ 議員予選会とは、理想団が企画したもので、本選挙で理想団員の投票を集中させるために、本選挙前に予選選挙を行い、152 名の選挙立候補者を 5 名にするものである。5 名にすることで、票の拡散を防いだ。

⁷¹ 前掲「理想団の研究〔I〕」61 頁。

⁷² 自由投票同志會「至急廣告」（『萬朝報』第 3369 号、1903 年 1 月 31 日刊行、1 面）前掲書『萬朝報』第 42 卷。

⁷³ 自由投票同志會「四谷方面演説會」（『萬朝報』第 3376 号、1903 年 2 月 7 日刊行、1 面）同上書。

⁷⁴ 前掲書『自叙伝』86 頁。

⁷⁵ 堺利彦・幸徳伝次郎「退社の辞」（『萬朝報』第 3623 号、1903 年 10 月 12 日、1 面）「萬朝報」刊行会編『萬朝報』第 45 卷、日本図書センター、1986 年。

⁷⁶ 西田長壽「解説」服部之総・小西四郎監修『平民新聞〔一〕』創元社、1953 年、3 頁。なお、引用文中の括弧内は著者によるものである。

⁷⁷ 石戸谷哲夫『日本教員史研究』講談社、1967 年、332 頁。

⁷⁸ 活動例について、石戸谷は「精力的な遊説活動のさきざきで小学校を訪れて、社会主義出版物を売ったり教員と議論したりしている。地方で開かれている社会主義演説会に小学校教員が出席傍聴していることが報告記事に出ているし、また聴衆が発している質問内容によって現職教員が聴いていることがわかる」と論じられている。引用は同上書『日本教員史研究』335 頁。

⁷⁹ 週刊『平民新聞』に掲載された石川三四郎の記事は以下の表の通りである。

論題名	号	発刊日
予平民社に入る	3	1903 年 11 月 29 日
基督教界の二大人物	8	1904 年 1 月 3 日
堺氏に面す	25	5 月 1 日
時局と消費組合	27	5 月 15 日
最末の兆	28	5 月 22 日
仁愛と国家	30	6 月 5 日
愛国心と愛他国心	31	6 月 12 日
所謂犠牲の精神	32	6 月 19 日
魚河岸の労働者	33	6 月 26 日
万国幸福の秘訣	34	7 月 3 日
農民の暴動	37	7 月 24 日

埼玉県遊説	38,39	7月31日、8月7日
東金町演説会	43	9月4日
自由恋愛私見	45	9月18日
函根大平台小集	45	9月18日
基督教徒に告ぐ	50	10月23日
小学教師に告ぐ	52	11月6日
園遊会禁止の記	54	11月20日
日本平民新聞発行届出始末	56	12月4日
大学或問を読む	60	1905年1月1日
平民社忘年会	60	1月1日
革命の斧	61	1月8日
平民社新年会	62	1月15日
平民の心情	64	1月29日

- ⁸⁰ 石川三四郎「予、平民社に入る」（週刊『平民新聞』第3号、1906年）前掲書『石川三四郎著作集』第1巻、171頁。なお、引用文中の括弧とルビは引用元によるものである。
- ⁸¹ 石川は『自叙伝』において、「何としても平民社の先輩達の人格の致すところであったと思われます。幸徳と堺とは実に好きコンビでありました。堺は強かった。幸徳は鋭かった。」と評している。（前掲書『自叙伝』101頁）。
- ⁸² 竹内則之「石川三四郎の『土民思想（デモクラシー）』思想—その生成と構造をめぐって」『武蔵大学人文学会雑誌』第12巻第1号、1980年、47頁。
- ⁸³ 石川三四郎「階級戦争論」（『新紀元』第7号、1906年）前掲書『石川三四郎著作集』第1巻、104頁。
- ⁸⁴ 同上書、105頁。
- ⁸⁵ 同上書、107頁。なお、引用文中の括弧内は筆者によるものである。
- ⁸⁶ 同上書、108-109頁。なお、引用文中のルビは引用元によるものである。
- ⁸⁷ 同上書、110頁。
- ⁸⁸ 堺利彦「階級戦争論について」（『光』第14号、1906年）林茂、西田長寿編『平民新聞論説集』岩波書店、1997年、118頁。なお、引用文中の傍点は引用元によるものである。
- ⁸⁹ 同上。
- ⁹⁰ 石川三四郎「堺兄に答ふ—『光』十四号『階級戦争論に就て』に答ふ」（『新紀元』第9号、1906年）前掲書『石川三四郎著作集』第1巻、123頁。なお、引用文中の括弧内は引用元によるものである。
- ⁹¹ 同上書、124頁。
- ⁹² 同上書。なお、引用文中の傍点は引用元によるものである。
- ⁹³ 前掲書『自叙伝』142頁。

- ⁹⁴ 石川三四郎「堺兄に与へて政党を論ず」（『新紀元』第 10 号、1906 年）前掲書『石川三四郎著作集』第 1 巻、126 頁。
- ⁹⁵ 同上書、127 頁。
- ⁹⁶ 同上書、128-129 頁。
- ⁹⁷ 同上書、133-134 頁。
- ⁹⁸ 幸徳秋水「政黨に就て」（『新紀元』11 号、1906 年 9 月 10 日）幸徳秋水全集編集委員会編『幸徳秋水全集』第 6 巻、1968 年、107 頁。
- ⁹⁹ 同上、108 頁。
- ¹⁰⁰ 幸徳秋水「余が思想の變化（普通選挙に就て）」（日刊『平民新聞』16 号、1907 年 2 月 5 日）前掲書『幸徳秋水全集』第 6 巻、134 頁。括弧は筆者によるものである。なお、引用文中の傍点は引用元によるものである。
- ¹⁰¹ 同上、142-143 頁。
- ¹⁰² 米田俊彦編『近代日本教育関係法令体系』港の人、2009 年、48 頁。
- ¹⁰³ 「文相の戦時教育談」（『教育時論』第 699 号、1904 年 9 月 15 日、37 頁）前掲書『教育時論』91。
- ¹⁰⁴ 「勅語を拜誦して」（『教育時論』第 703 号、1904 年 10 月 25 日、1 頁）同上書。なお、引用文中の括弧内は筆者によるものである。
- ¹⁰⁵ 「小学校生徒の音楽隊」（『読売新聞』第 9731 号、1904 年 7 月 13 日朝刊、3 面）ヨミダス歴史館。「小学校生徒の音楽隊」の記事では、9 名の小学生徒に 150 円分の楽器と軍服を新調し楽隊行列の稽古をさせていると報じられている。
- ¹⁰⁶ 石川三四郎「新紀元講演」（『新紀元』第 4 号、1906 年）前掲書『石川三四郎著作集』第 1 巻、388 頁。この報告した小学校教員については「小学教師某君」と表記されている。なお、引用文中の傍点は引用元によるものである。
- ¹⁰⁷ 石川三四郎「人情の独立」（『直言』第 2 巻第 21 号、1905 年）前掲書『石川三四郎著作集』第 1 巻、48 頁。
- ¹⁰⁸ 石川三四郎「愛国心と他愛国心」（週刊『平民新聞』第 31 号、1904 年 6 月 12 日、5 面）近代史研究所編『週刊平民新聞』近代史研究所、1982 年。
- ¹⁰⁹ 「仁愛と国家」（週刊『平民新聞』第 30 号、1904 年）前掲書『石川三四郎著作集』第 1 巻、175 頁。
- ¹¹⁰ 前掲「愛国心と他愛国心」5 面。
- ¹¹¹ 週刊『平民新聞』第 52 号の教育に関する論考は以下の 4 つである。

執筆者	論題	掲載面	補足
石川三四郎	小学教師に告ぐ	1	新聞紙条例により摘発
西川光次郎	社会主義者の教育観	4	同上
枯川（堺利彦）	小学修身書論評	5	
小学教師の一人	戦争に対する教育者の態度	6	新聞紙条例により摘発

(筆名、無価珍子)			
-----------	--	--	--

- 112 「社会主義を教育界に入れよ」(週刊『平民新聞』第52号、1904年11月6日、6面)前掲書『週刊平民新聞』。
- 113 石川三四郎「小学教師に告ぐ」(週刊『平民新聞』第52号、1904年11月6日、1面)同上書。
- 114 同上。
- 115 多賀秋五郎『学校の歴史』中央大学生生活協同組合出版局、1974年、208頁。
- 116 文部科学省『学制百年史』(2022年11月26日参照)。
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318016.htm
- 117 「学校授業料」(『教育時論』第700号、1904年9月25日、27頁)『教育時論』91、雄松堂書店、1982年。
- 118 岡崎春洋「小学児童に対し献金奨励の法果して誤なきか」(『教育時論』第703号、1904年10月25日、33頁)同上書。
- 119 前掲「小学教師に告ぐ」1面。
- 120 「時局と小学校教育費」(『教育時論』第701号、1904年10月5日、34頁)前掲書『教育時論』91。
- 121 「学制研究会の檄文」(『読売新聞』第9660号、1904年5月3日朝刊、2面)ヨミダス歴史館。
- 122 前掲書『日本教員史研究』236頁。
- 123 同上書、245頁。
- 124 同上書、244頁。石戸谷は「公立小学校教員平均月俸額の変遷」と「物価および平均月俸実質の変遷」とのグラフを280、281頁に載せている。なお、引用文中の中略は筆者によるものである。
- 125 前掲「小学教師に告ぐ」1面。なお、引用文中の括弧内は筆者によるものである。
- 126 前掲書『自叙伝』63頁。
- 127 同上書、206頁。
- 128 詳しくは、大沢正道「解題」前掲書『石川三四郎著作集』第5巻を参照のこと。なお、石川の『虚無の靈光』を掲載している資料はいくつか存在するが、本研究においては、大沢の「解題」の内容を検討した結果、『石川三四郎著作集』第5巻を引用していくこととする。
- 129 前掲書『虚無の靈光』212-213頁。なお、引用文中の中略は筆者によるものである。
- 130 同上書、213頁。
- 131 同上書、199頁。なお、引用文中の中略は筆者によるものである。
- 132 同上書、198頁。
- 133 同上書。

¹³⁴ 同上書、200 頁。

¹³⁵ 同上書。

¹³⁶ 同上書、221 頁。この引用がどのルソー著作によるものかは特定できていない。石川がルソーの著作について言及が確認できるものは、「木下尚江往復書簡」(1935 年)にて『懺悔録 (いわゆる告白)』(Les Confessions)、『近世土民哲学』(1933 年)にて「不平等の起源と基礎とについての論述 (いわゆる人間不平等論)」(Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité)、「民主主義の極致」(1946 年)にて『エミール』(Émile)への言及は確認ができる。いずれかの著作によるものの可能性があるかと推察される。

¹³⁷ 同上書。

¹³⁸ 同上書、221-223 頁。

第2部 「土民生活」思想期における石川三四郎の教育思想

第1章 「土民生活」思想期の石川三四郎の生涯と思想形成

本章では、石川三四郎がヨーロッパとアフリカに亡命した1913（大正2）年から満州事変が勃発する1931（昭和6）年頃までの期間を「土民生活」思想期として扱っていく。石川の東洋史研究は、中国への問題関心が一つの要因となり、さらに、その問題関心は満州事変によっても引きあがった。また、1931（昭和6）年以降の日本社会は大正デモクラシーが凋落し、軍部が台頭してくる時代でもあったため、この時期を「土民生活」思想期と東洋史研究・戦後社会運動期との区切りとした。

この時期の石川は、大逆事件の影響によって社会主義への弾圧から逃れるため及びカーペンターとの交流を目的に、ヨーロッパ・アフリカ亡命を果たすことになる。エドワード・カーペンターとの交流については、本部第2章で扱っていく。ヨーロッパ・アフリカ亡命中に第一次世界大戦が勃発したため、戦地で過ごすことになり、物質文明の醜悪さとその弊害を目の当たりにしていた。この経験もあり、石川は反文明論的な立場に立った道徳観が見られるようになり、その内容は本部第3章で論じる。

帰国した石川は、「土民生活」思想に基づいた講演や論考を世に示すようになった。講演は日本にとどまらず、中国でも行う機会もあった。1927（昭和2）年、石川は東京都の千歳村に転居し、「土民生活」の実践として「晴耕雨読」の生活を営むことになった。石川の「土民生活」の実践も本部第2章で扱っていく。

第1節 ヨーロッパ・アフリカ亡命中の石川三四郎の生涯と思想形成

本節では、ヨーロッパ・アフリカ亡命中にあたる1913（大正2）年から1920（大正9）年の石川の生涯と思想形成を扱っていく。石川のヨーロッパ・アフリカ亡命は、当局による社会主義者の弾圧から逃れるため、及びカーペンターとの交流を目的にしていた。

石川は横浜港に寄港していたフランス船ポール・ルカ号に乗ってブリュッセルに亡命した。目的地であるマルセイユ港までに通った港先には上海や香港、仏領サイゴン（現在のホーチミン）、シンガポール、スエズなどがあった。上海について石川は、自動車や馬車、人力車が幾重にも並んで疾駆し、建造物は雄大にそびえ立っていると記しており、それらは日本では見られない光景と振り返っている一方で、自然が見られないことに不愉快極ま

りないとも記している。また、石川はシンガポールから乗船したアメリカ人と会話するなど、英語での会話には困っていなかった。ただし、石川はフランス語については未習熟であったため、マルセイユ港からブリュッセルに行くまでは困惑していた。

ブリュッセルに着いた石川は、万国社会党本部のある「平民館」の事業と、学問の自由を守る目的で創設せられた「新大学」の運動に関心を向けた。その内容を石川は、大隈重信が主宰した『新日本』や以前石川が勤めていた朝報社の機関紙『萬朝報』に寄稿している。その際、石川の名前は表に出せなかったため、「不尽想望」というペンネームで発表することとなった。「平民館」は1884年に万国社会党本部が設置された場所であり、世界の労働団体の模範となることを目指したベルギーの労働者協同会社であった。石川はこの「平民館」に対して好印象を抱いており、『自叙伝』では次のように振り返っている¹。

ここに来るお客様は大抵社会主義者、労働者で、またその供給品の価格も、一般商人のそれよりも廉価である。且つこのホールに入って人と接合せをしたり、事務を執ったり、新聞を読んだりすることは、殆ど来館者の自由に委してある。その代わりここに働いている給仕でも誰でも、みな平等の同志である。普通のカフェーに行つたつもりで、ボーイとか、ガルソンなど声をかけたり、またはテーブルを叩いたりすると怒り飛ばされる。ここに入つては男女老幼貧富主客の区別がなく、みな悉く「同志」と呼び交す。僕のような黄色人種でここへ出入りする者は、今では僕一人であるが、誰でも彼でもみな親切に交わる。一般に貴族的の気風に富んでいて、われわれを見ると中国人と呼んで軽蔑するところのこの国、この都会において、独りこの平民館ばかりは真に唯一の慰藉所である。

このように、石川にとってこの「平民館」は区別や差別されない環境であったとして、労働者階級や平民階級にとっての「唯一無二のオアシス」と称するほどであった。石川は、「平民館」で過ごしている間は、自由を感じていた。石川は、この「平民館」の事業を日本に電信していたが、それは次のような意図をもっていた²。

パンを製造し、ビールを醸造するにはその原料たる麦がなければならぬ。ここにおいて麦の耕作をも、共同組合員によって実行することとなった。〔中略〕

砂漠の中の緑地はこのようにして年々発達し、拡張されて行く。三十年の昔時と今日とを比較すると、実に無より有を生じたのである。一大世界、歓楽世界を生じたのである。人間が被造物に非ずして造物主であるとは近代学者の多くの唱導する所であるが、かのイギリスのロッチデール組合の創立者や、この平民館の創立者の如きは、その最も光栄ある造物者であると言わねばならぬ。僕は日本の労働界にも、またこのように創造者の現われて来ることを確く信じている。そして切に熱望している

石川は「平民館」での共同組合的な事業が、日本社会でも流行することを願っていた。この「平民館」の事業の中に、石川は個人的な自治と共同的な社会を見たのであろう。

つづいて、「新大学」の事業についてみていきたい。「新大学」は、1894年にエリゼ・ルクリュラを講師として招いて創設したものであった。「新大学」という名称は、もともと「自由大学」という公立の大学が存立しており、それに対立する形で新設された大学から「新大学」と呼ばれている。石川によれば、「自由大学はもともと自由主義にもとづいて、宗教学校に対して建設されたものであろうが、漸く発達して基礎強固となり、現代に迎合して勢力を占めるようになってきた。そして漸く保守的となって、狭隘な教義に支配されるようになってきた」³と述べられている。「自由大学」が自由主義的な思想を失ったため、また新たに自由主義的な大学として「新大学」が設立された。この「新大学」の理念は「一切のドグマと旧習慣とを排して、各自の誠意をもって一切の事物を判定するにある」⁴として、「行為によりて明示せられたる解決であるを要する。理性によって是認せられたる学理であるを要する。確固たる証拠によって認証せられたる事実であるを要する」⁵ことであった。石川はこの事業に対して「生命あり精神ある真事業」であったと評価している。

次に、「新大学」の教育活動の様子を見ていきたい。石川は、「新大学」の教師と生徒の関係について、講義の様子から次のように論じている⁶。

講堂における彼等の講義は大いなる戦争である。彼等は政府や保守党の非難攻撃と戦わねばならぬ。近代人の最大苦痛たる貧困と戦わねばならぬ。しかもこのような内外の戦闘の中であって、常に孜々として自己の新研究をつづけて行く彼等の態度は、実に羨ましい程イキイキしている。そして学生と講師との間柄は普通の友人間と同様である。むしろこれを同志間の交友と称する方が適当であろう。

勿論多くの女学生が男学生と席と混合して講義を聴いている。講義を了えると兄弟分のような態度で質問が放たれる。――勿論講師に対する尊敬の態度は表わされるが、如何にも親密なる様子が見える

石川は、教師と生徒との関係が良好な様子を見て、議論や質問を交わす態度に学校教育のあり方を見たのではないだろうか。学校教育における授業のあり方として、学生と講師の関係、性別による差別なき親密な関係は石川によれば「新大学」の教育について、次のように記述している⁷。

新大学の教育は社会のためにする教育でもなければ家庭のためにするものでもなく、まして国家のためにする教育でないことは勿論である。彼等の教育はただ「人」のための教育である。「人」を開発するための教育である。教師の態度から見れば、彼等の人生観を実現する一手段としての教育である。また彼等の人生観の実現はただその学校における講義のみで完うせらるるものではなくて、彼等自身の生活全体において完成せらるべきである。従って彼等の教育ということも、また、ただ講堂における講義のみを完成せられるとは決して言えぬ。彼等自身の生活がまた実に偉大なる教育を施しているのである

上記のように、石川は「新大学」の教育に関して肯定的であった。石川は、教育が社会や家庭、国家ではなく個人のための教育を施している点、講義のみではなく生活全体によって教育を施している点を評価していた。石川は、ブリュッセルでこれら二つの施設の存在を確認し、自治活動の重要性を再認識したといえるだろう。

ブリュッセルで過ごしていた石川は、カーペンターに会うこととなりイギリスに渡航することになった。イギリスに渡った石川はロンドンについて、「地下鉄道を吹く風がまた異様に臭い。死人の様な臭気がする」⁸として嫌悪感を示している。石川はカーペンターとロンドン市街で会っているが、2日後にミルソープで再会している。カーペンターが住んでいたミルソープは、駅から10kmほど離れた田舎であった。カーペンターの家は「野中の一軒家」で、近くに山もありそこで石川とカーペンターは2時間ほど会話をしている。石川は、カーペンターに対して「人間の深さ広さに改めて圧倒」⁹される思いを抱いたと振

り返っている。また、この時に石川はカーペンターからデモクラシーという語の語源を聞き、それを「土民生活」という言葉に訳した。

石川はカーペンターと別れた後、ブリュッセルに帰ったが資金が底を付き、カーペンターの援助で再びロンドンの郊外に戻った。そこで半年間生活した後の1914年に石川はブリュッセルに戻り、ポール・ルクリュ夫妻の援助によりペンキ職人として職を得ることができた。ポールはエリゼ・ルクリュ（1830-1905）の甥に当たる人であり、「新大学」の理事を務め地理研究科の講師として活躍した。1914年といえば第一次世界大戦が起こった年でもあり、その頃のヨーロッパの政治、社会情勢は極めて険悪であり戦争の噂が広がるほどだった。それに対抗するが如く、西洋の社会主義者達は非戦運動を繰り広げ、労働者の力によって防ごうとする努力が続けられた。そして、同年の7月30日にブリュッセルで万国社会党本部の主催による非戦大会が開かれた。しかしこの2日前には既に、サラエボ事件によりオーストリアがセルビアに宣戦布告を行っていた。

この非戦大会に石川はポール夫妻と共に、フランス社会党の代表ジャン・ジョレスなどの演説を聴取していた。石川はジョレスの演説に感激し、「この（愛国という）感動を捨てんがためではなく、ただ理性と感動との力を平均ならしめ、而して戦争を排斥せんがためである」¹⁰として、愛国心と理性によって戦争を排斥する考えを示した。しかし、そのジョレスは非戦大会後のデモ活動中に射殺されてしまった。また、ドイツ軍のベルギー進軍もあって、ルクリュ夫妻はフランスへと落ち延びていたが、石川は7ヶ月ほどドイツ軍占領下のブリュッセルで籠城することになった。

1915年1月に、石川はロンドンに逃げこむことができ、そこでカーペンターと再会した。その2ヶ月後にはパリへと渡り、マダム・ルクリュと再会を果たすことができた。その後、石川はリアンクールというパリの北方にある町で農作業に従事することになった。ここで初めて石川は農作業をして、「土民」の修学を積む機会を得たことになった。さらに、このリアンクールで石川は島崎藤村（1872-1943）とたびたび会っており、彼の苦悩を身近に感じることもあったと振り返っている。

リアンクールの町にも戦争の波が押し寄せてきて、フランス軍の兵隊が滞在するようになってきた。石川の借りていた家にも兵隊が詰め込まれることもあった。石川は詰め込まれた兵隊とも会話する機会があり、フランス軍と日本軍やドイツ軍を比較して次のように述べている。石川は、フランスの「軍人が自治的な習わされ、一般の兵士が自発的意志によって生活することだ。勿論軍隊的活動に於いては粛清に号令に服従するのであるが、平

生は如何にも平等、自由の習慣が出来ている」¹¹と評価している。一方で、ドイツ軍は士官が戦争するので機械に過ぎぬと評価している。石川は、両者を比較してフランス軍の自由のために戦っている点を称賛している。

1916年に即時停戦、講話締結を要求する運動が社会主義者のなかで盛り上がっていたことに対し、石川は、それに賛同せず講話尚早の宣言を16人の社会主義者とともに表明している。この宣言を出した後、石川はリアンクールで異端者扱いを受け、その場を追われてしまい、ポール夫妻と共にドナムで生活することになった。ここで、石川は「晴耕雨読」の生活を営むことになった。ドナムでの生活は3年近く行われ、石川の「土民生活」思想はここで徐々に形成されていった。

1917年にはロシア革命が起こり、石川はより一層反政治主義を強めていった。その理由として、亡命していたロシアの社会主義者たちが国に戻っていても、反革命分子や裏切り者として扱われ、再び西洋に逃れてくるが多かったことを挙げることができる。石川は強権主義が維持されている以上は、議会の存在の有無に関わらず、特定の者が他人を支配し、統治するので、意味を成さないことを感じ取った。また、石川が互いに干渉されず、自主、独立、対等の人間として協力していく生活を理想に置きはじめたのもこの頃だといえる。

1919年には、石川はポール夫妻と共にモロッコへと半年間の旅行に行き、1920年に帰仏し日本へ帰る仕度に取りかかった。

第2節 ヨーロッパ・アフリカ帰国後の石川三四郎の生涯と思想形成

本節では、ヨーロッパ・アフリカからの帰国した1920（大正9）年から1931（昭和6）年頃までを扱う。石川の東洋史研究は、中国への問題関心が一つの要因となり、さらに、その問題関心は満州事変によっても引きあがった。また、1931（昭和6）年以降の日本社会は大正デモクラシーが凋落し、軍部が台頭してくる時代でもあったため、この時期を「土民生活」思想期と東洋史研究・戦後社会運動期との区切りとした。

石川の帰国船は小汽船因幡丸という日本船であった。石川はここで日本の著しい海外発展に驚きを隠せなくなった。石川が、西洋に亡命した頃は日本船を見ることはほとんど無かったが、1920（大正9）年では数多くの日本船を見て日本の海外発展を身近に感じるようになった。その一方で、石川は日本の犠牲にしている部分をも見るようになった。それ

は、機関部で働く青年の姿であった。その青年との会話で、彼に休息がないことを石川は知り、こういった犠牲の上で日本の発展があることを再認識したのである。

1920（大正 9）年 11 月に石川は日本に帰国した。その頃の日本の社会運動は、「アナ・ボル」論争の対立が表面化してきた時期であった。この論争は関東大震災が起こるまで続いていたが、特に部落解放運動や学生運動と結びつき、社会運動は新たな発展も見せることとなった。

その学生運動の一つであった「新人会」は、1920（大正 9）年 11 月 14 日に石川との懇談の機会を持った。懇談の様子は酒井正文によると「住谷悦治、松沢兼人、風早八十二ら四、五名」参加し、「石川と餐をともにしたが、石川の話は新人会員を魅了した」¹²と記されている。その 3 日後の 11 月 14 日に「新人会」は本部のある東京帝大法科三十二番教室に石川を招いて座談会を開いた。そこでの石川の公演題目は「土民生活」であり、主に西洋での体験が話題の中心であった。酒井の研究によると、その講演には 300 人集まったらしく、その第一声が「土民生活」であった¹³。酒井によると「石川との接触と、その感化、影響は、『同胞』（新人会の機関誌）に表出した新人会の理想の社会観と無縁ではない」¹⁴と論じている。石川の「新人会」での公演は成功し、「新人会」の理想と掲げていた社会観に一定の影響があったといえる。

その後も石川は、同年に神田青年会館で開かれた「社会問題講演会」や翌年の 1921（大正 10）年にもオーロラ協会が主催した「思想問題講演会」の弁士として参加している。さらに、講演活動以外にも石川は文筆活動も展開し、「土民生活」を雑誌『社会主義』に寄稿している。

石川は帰国直後に望月百合子からインタビューを受けている。望月は読売新聞社に勤めていて、石川に会ったのはこの時が初めてだが、彼の日本の男性とはあまりにかけ離れた倫理観に惹かれていくことになった。その後も望月は石川と度々合うことになり、最終的に読売新聞記者の職を離れ石川の養女となり助手を務めた。

石川は西洋から帰国して、ちょうど 1 年経った頃にもう一度渡欧している。今回の渡欧の目的は、友人の学者に頼まれたルクリュ地理学研究所の図書運搬である。そこで、石川は新鋭船「箱根丸」に乗って望月と共に神戸港を出発し、二度目の渡欧に出た。箱根丸には皇族の北白川宮と、そのお供として同行していた徳川義親が乗船しており、石川はその 2 人と会話することもあった。石川は「特別三等客であったが、徳川侯などは、私の三等部落にまで迎えにきて私を歓迎してくれた」¹⁵として、「香港では宮さんを中心に徳川侯や

その他の華族方を初め諸名士の大宴会が市内の料亭で開かれたり、またある時は宮さんや船長を中心に、名士達十数名揃って記念写真を甲板上で撮ったりした」¹⁶と振り返っている。この振り返りを見る限り、北白川宮を宮さんと呼んでいるあたり、比較的良好な関係であったことがうかがえる。特に、徳川は石川のことを高く評価しており、後に家庭教師として雇うほどであった。

1922（大正11）年に、石川はもう一度パリの土地に帰ってきた。そこで、ポールと共にブリュッセルの「新大学」にある、エリゼの著書を運ぶ手続きをとった。予想以上に費用が高かったものの、現地の同志の助けもあり無事にエリゼの図書を日本へ輸送することができた。

1923（大正12）年、望月をフランスに残し、石川は日本へ帰国した。帰国した石川の主な収入源は徳川家の家庭教師であった。徳川は、石川の研究を援助するために、彼をフランス語の勉強をしていた子ども達の家庭教師として雇った。石川は徳川家の家庭教師を引き受けている一方で、農民文学者らと共に自由講座を始めて、主にフランス語の講義や研究をしていた。そこには、東京大学や早稲田大学の学生も参加しており、多い時は20人を超えたようである。

さて、1923（大正12）年といえば関東大震災が起きた年である。この時、大杉栄をはじめとして、多くの社会主義者が当局の弾圧にあった。石川もこの弾圧の標的となり拘束されていたが、徳川の救出により、石川はこの難を凌ぐことが出来た。このように、社会主義運動はこの事件を契機に勢いを失い、石川は新たな運動を起こすことを考えた。そこで、石川は社会主義の連合を計る組織として、日本フェビアン協会を結成した。

この時期の石川が最も共鳴した社会運動は、農民自治会であった。石川は日本の農民の間に自主的の連合運動がないことを不思議に思い、この運動に積極的に参加していった。そこでの最初の石川の活動は、「土の権威」と題する公演であった。この公演は評判が良く、共学社から出版することになった。また、彼は農民自治会の機関誌『自治農民』への寄稿も精力的に行っていた。こうして、石川は「土民生活」思想の理論活動を行う地盤を得ることができた。

石川は、1927（昭和2）年に中国の無政府主義者から招かれて、江湾の労働大学で講義を行っていた。石川の講義は「ヨーロッパにおける社会運動史」と題して、1日6～8時間程度1ヶ月近く行っていた。石川は「講義を進めている間に聴講者の数がだんだん増えてきてどの教場も超満員で、皆緊張して聞いてくれたので私は甚だ愉快であった。この江湾

における私の講座は一カ月余で終わったが、生徒達に与えた印象はかなり深かったように思う」¹⁷と振り返っている。石川の講演の特徴として『自叙伝』では、「上海だの江湾だのという名前そのものが既にその土地の歴史を、或いは地理学的の意味を物語るという説明は実物教育として若い人々の興味を引く事が多大であったように思われた」¹⁸と記述されている。労働大学での石川の講演は評判がよく、立達大学での講演も依頼され、1、2回講演を行った。日本に帰った後、労働大学に教授になったフランスのジャック・ルクリュから「江湾の大学は君のために出来たと思うくらいに評判されてあった」¹⁹と知らされた。

石川は、1927（昭和2）年に東京都の千歳村に転居し、「土民生活」の実践として協同的で「晴耕雨読」の生活を営むことになった。それは、フランスでの農業生活の経験を応用して新しい生活方式をたてることを目的とした。石川の農業生活について『自叙伝』では以下のように振り返っている²⁰。

一旦始めた百姓生活だけは維持したいと考えて、先ず覚えてきたフランス流の耕作を始めた。ところが何事を試しても、すべてうまく行かなかった。ところ変われば品変わる、気候風土がフランスと全然異なっている日本に来てフランス流の耕作を試みても、それがうまく行かないのは当然のことであった。こういう事業を起すには第一番に気候風土の研究から始めなくては駄目だということに気がつかなかったのである。それに気付いたのは失敗した後だった

石川のフランス流の農作業は失敗に終わった。石川は、フランスと日本では気候や風土が異なることを実感し、模倣では成功しないを感じ取った。また、石川の協同生活も「同友の研究会を開いた時は、かなり嬉しかった。だがその祝いの日から共働者の一人が癩癩を起し大波乱を演じ、祝も何も滅茶苦茶」²¹になり、協同生活も失敗に終わった。

その2年後の1929（昭和4）年に共学社を興し、雑誌『ダイナミック』を出版した。1931（昭和6）年に、満州事変が勃発すると同時に、石川の『ダイナミック』は幾度か販売禁止処分にあい、行動も徐々に制限されていくことになった。

第3節 小括

本章では、「土民生活」期の石川の生涯と思想形成として、1913（大正2）年のヨーロッパ

パ・アフリカ亡命から、「土民生活」論を中心に展開していた 1930（昭和 5）年頃まで論じてきた。大逆事件以降日本の社会主義者にとって「冬の時代」となり、石川は日本から離れざるを得なくなった。

「土民生活」思想期の石川の生涯と思想形成は、ヨーロッパ・アフリカ亡命中の「土民生活」思想の受容と、帰国後の「土民生活」思想の伝導と実践活動が主であった。亡命中の石川は、「平民館」「新大学」の視察から始まり、カーペンターやルクリュー族との交流、第一次世界大戦の経験に特徴が見られる。

「平民館」は、自由な雰囲気の中で年齢や人種の差別も区別もない、協同的な社会施設であった。石川は、日本でもこのような社会施設の存在の必要性を感じていた。「新大学」では、社会や国家のためではなく、ただ「人」のために教育することを実感した。そのためには、講堂での座学のみで教育するのではなく、生活に根差した教育でなければならない。石川は、この二つの施設の存在を確認し、その重要性を実感した。

次に、カーペンターとルクリュー族との交流である。石川は、亡命前に獄中でカーペンターの著作に共感し、その後手紙を出すまでに至っている。石川は亡命を果たし、カーペンターの家を訪れ、そこでの会話でデモクラシーを「土民生活」と訳すことにした。ここに石川の「土民生活」思想の構築が始まった。つづいて、ポールとの関係についてである。ポールは、エリゼの甥に当たる人物であり、石川の亡命生活を援助し、ともに行動する機会も多かった。石川は、「新大学」でのエリゼの無政府主義的な活躍とその行動に感銘を受け、地理学や歴史学への関心が高まった。石川は、エリゼの“*L'Homme et la terre*”を『地上論』と翻訳し出版するに至り、後には伝記を出すまでに至っている。エリゼの「新大学」の事業と地理学に基づいた無政府主義運動は、石川の「土民生活」思想にも影響を与えている。カーペンターとルクリュー族の思想的影響は次章以降でも扱う内容である。

つづいて、石川と第一次世界大戦との関連である。石川は、第一次世界大戦の最初の冬をブリュセル市でドイツ兵に囲まれて過ごし、2年目の冬をリアンクールの町でフランス兵とともに過ごした。石川は、戦争中のフランス兵士の振る舞いや戦いの姿を見て、ドイツ兵士や日本兵士にないものを持っていることに気づくことになった。石川は、フランス兵には「自由」の精神をもって戦っており、ドイツ兵や日本兵とは異なっているとしている。また、石川はドイツに対する講話尚早の宣言を 16 人の社会主義者と共に署名し、自由と平和を守るための戦争には行う必要があることも示した。さらに、石川は、第一次世界

大戦時で過ごしたりアンクルの町やドムムの町での農耕作業で、農作業の重要性を実感するに至った。この経験も「土民生活」思想に活かされている。

帰国後の石川は、主に「土民生活」思想の啓発活動とその実践を中心に行っていた。石川の「土民生活」思想の啓発活動は、東大の学生運動の「新人会」から始まる数多くの講演と、雑誌への寄稿が中心となった。その中でも、石川が一番共鳴した活動が農民自治会であったが、この活動も軍国主義の波にのまれて影を潜めていった。一方生活面では、二度目のパリ訪問の際に皇族や徳川家との交流も経て、その徳川家のフランス語の家庭教師を務めたりしていた。

石川は、1927（昭和2）年に東京都の千歳村に転居し、「土民生活」の実践として「晴耕雨読」の生活を営むことになった。その2年後の1929（昭和4）年に共学社を立て、民衆の精神の変革を訴える論考を目的として、雑誌『ディナミック』を出版した。そこで石川は、農業をする一方で自己研鑽として読書や研究発表をする半農生活を送っていた。石川の「土民生活」に基づく実践は失敗に終わったが、その後の生涯に渡り、半農生活を実践し、社会運動家としての言動だけではなく態度で示していた点は、カーペンターや田中正造に倣っていたといえるだろう。

第2章 石川三四郎の「土民生活」論

本章では、石川のデモクラシー論である「土民生活」論を扱う。石川の「土民生活」思想の形成には、主にカーペンターとの交流が挙げられる。そこで、石川とカーペンターとの交流に焦点を当てて、「土民生活」思想の形成を追っていく。石川とカーペンターの交流は、1907（明治40）年の獄中生活での文通であった。石川の「土民生活」思想の形成として、この獄中生活からカーペンターとの談義までを扱っていく。

次に、「土民生活」思想の理論や実践について1933（昭和8）年に共学社から出版された『近世土民哲学』を扱っていく。石川の『近世土民哲学』は、「土民生活」思想を体系的にまとめたものであり、その特徴として、1921（大正10）年から1933（昭和8）年までに発表された数多くの論考をまとめた集大成であった。石川の「土民生活」思想と同時期に農本主義が台頭していた。農本主義は農村恐慌以後、超国家主義との結びつきが見られていくことになった。石川はその農本主義との相違点として「農本主義と土民思想」を発

表した。そこで、石川の「土民生活」思想と農本主義の相違点については「農本主義と土民思想」を扱い、「土民生活」思想の特徴を示すこととする。

第1節 「土民生活」思想の形成

本節では、「土民生活」思想の形成にとって重要な石川とカーペンターとの交流を中心に論じていく。石川とカーペンター²²の交流を論じる前に、まず、カーペンターの略歴について記しておきたい²³。

1844年カーペンターはイギリス南部のブライトンの裕福な家庭に生まれた。ケンブリッジ大学で学位を習得した。1868年大学で聖職の特別研究員 Fellow として学問の道を志した。しかし、産業革命などで社会の頹廃や大学の形骸化に悩み、1873年ケンブリッジの成人教育運動の一員に加わった。主に天文学や音楽史などを教えていたが、受講者の雑多な人間性に惹かれ、1877年イングランド中部の工業地帯の都市シェフィールドへ移った。そこで、クロフトキン流のアナーキズムを混えた社会主義思想を懐き、シェフィールド社会主義協会創立の精神指導者として活躍した。しかしまもなく体調を崩し、郊外のミルソープへ移住し、その地で果樹園と菜園で労働者とともに働き、同時に自らの研鑽を積むという「晴耕雨読」の生活を開始した

カーペンターの思想の転機は、産業革命による文明の進歩による社会の頹廃などによるものだった。カーペンターは成人教育運動に加わり、その活動から人間性に目をつけ社会主義運動に加わるようになった。カーペンターも石川と同様に人間の内面に着目しその指導者として活躍していった。そこから、カーペンターは体調を崩して郊外のミルソープに移住し、労働者と働き、そしてともに研鑽を積む「晴耕雨読」の生活を開始した。これが、カーペンターの略歴である。後に論じていくが、石川はこのカーペンターの生活に惹かれていった。つづいて、カーペンターと石川との交流について論じていきたい。

石川がカーペンターの著作に出会ったのは入獄時の時である。石川はカーペンターの著書を読むことによって、その思想に共鳴していくことになった。その当時の様子を石川の『自叙伝』から引用してみていきたい²⁴。

その時私が出会った思想家エドワード・カーペンターは、不思議にも、私の従来の一切の疑問に全的解決を与えてくれました。カーペンターの『文明、その原因と救済』及び『英国の理想』は、私の数年来の煩悶懊悩を一刀の下に切開してくれました。

勿論カ翁の書が解決を与えてくれたのは、私の勉強の進んだ一ポイントに丁度的中した一刀が、カ翁によって与えられたことを意味するのです。マルクスの歴史主義、歴史必然論が、人類解放の観点から全くナンセンスであることに気付いた私はカーペンターの特殊な人生史観によって救われたように感じました。人類の社会生活の変遷とその種々相を、自我分裂の事実によって説明し、内なる統一と外なる統一とを全く不可分のものとし、遂に宇宙的意識に復帰することに於いて、無政府にして共同的にして同時に貴族的なる真の民主生活が実現せらるるものとするカ翁の説は、従来の宗教思想も社会思想も芸術も農工業も、すべてを一つの溶炉に入れて新しい、自由の全一の世界を創造する捷徑を明示するものでありました

石川はカーペンターの著書を読み、彼自身が抱えていた疑問を解決するに至ったと振り返っている。カーペンターの著書を読んで、マルクスの歴史主義や歴史必然論が人類解放の観点からはナンセンスであると気づかされ、石川はカーペンターの特殊な人生史観に救われたと述べている。石川はカーペンターの魅力をその人生史観であるとし、亡命中にカーペンターとの接触をすることになった。カーペンターの説は、人類の社会生活から自我が分裂をしている事実から論じ、内なる統一と外なる統一は不可分のものとし、遂に宇宙的意識に復帰することにおいて、無政府にして共同的にして同時に貴族的なる真の民主生活が可能であるとしている。カーペンターは人類の社会生活が自我から分裂しているのは、文明の発展や政治の発展にあると論じている。そして、自我の分裂状態では真の民主主義は成立しないとしている。このカーペンターの論を読んだ石川は真の民主主義というものを探し始め、そして本部のテーマである「土民生活」思想にたどり着いた。それは、石川の『虚無の靈光』でも論じられているように、文明の発展に伴う自我の分裂がすべての害悪の根源であった。

しかし、出獄後の石川は一つの問題を抱えていた。それは、石川自身の生活態度の問題である。その当時の様子を石川は『自叙伝』で次のように振り返っている²⁵。

私は当時自分の生活態度に随分深刻な悩みを持っていました。今日の資本主義的
社会組織の不合理を唱え、それを改革せねばならぬと主張する者が、自らその
制度の余沢によって些かでも搾取的生活をしたのでは、主張も唱道も意義をなさ
ない、こうした不合理な生活から些かでも自分の身を軽くする方法は、今の社会
におこなわれる最下級の労働を出来るだけで分担した上、自分の生活を最小限度
に縮めることだと私は考えました。

当時私は深くエドワード・カーペンターの思想と生活態度とに心酔していまし
た。そして『哲人カーペンター』という小著までも公にしました。カーペンター
が英国シェフィールドの片田舎に百姓生活をしていると聞いて、それこそ真実の
生活態度であり、それこそ社会改造の第一歩でなくてはならない、と思い込みまし
た。

石川は資本主義的社会組織の不合理を唱え改革を主張する者が、自らその制度の余沢
によって、搾取的生活をしていたのでは主張も唱道も意義をなさないとしている。それに対
し、不合理な生活を改革する方法として、社会の最下級の労働をできるだけ分担し、自ら
の生活を最小限度に縮めるということだと、石川は考えた。そのような思想を示し、生活
態度を実現していたカーペンターに石川は心酔した。石川は、カーペンターがイギリスの
田舎で百姓生活をしていると聞き、その生活態度が社会改造の第一歩ではなくてはなら
ないと考えたのである。米原は「石川が『カーペンターの品性と其の実生活』と表現したの
はこのようにことだった」²⁶と論じており、石川が「カーペンターの品性と其の生活実態」
を魅力と述べたのは、このカーペンターの百姓生活の営みの生活態度であり、改革を主張
する者が実際にその生活を送っている品性を指している。

ただ石川は、カーペンターの思想や生活態度に心酔はしていたが、それを実践する環境
が無かったことを主張している。その当時の様子を石川は『自叙伝』で以下のように振
り返っている²⁷。

こうした思想に段々深入りして来た私は、直ちに自分の生活をその方針に従っ
て立てねばならなかったのです。しかし私はカ翁のように耕すべき土地を持ちま

せん。何か他の仕事を求めなくてはならない。私の最も親しい友人であり、同志であった渡辺政太郎君は館屋をしながら社会主義の宣伝をしていました。も一人の同志は八百屋を始めました。私はピイピイと汽笛を鳴らして歩く「羅宇屋」を始めようか、それともパンパン鼓をたたいて歩く「下駄の齒入屋」になろうかと、下谷万年町(当時有名な貧民窟)に通って研究したことを覚えています。けれど何れも私には出来そうに思われませんでした

石川はカーペンターのように百姓の生活を行おうと思っていたが、耕す土地を持っていなかった。また、同志たちは社会主義の宣伝をしながら仕事を始めていたので、石川自身も仕事を求めるようになった。しかし、石川は他の仕事を求め、いろいろな仕事の候補をあげ、時には通い研究したが、どの仕事もできなかつたと振り返っている。これは、当時の石川が「獄中で呼吸器病を極度にこじらした私は海岸を去るのも危険だ、というジレンマにかかって躊躇していました。そのみではない、当時私は福田姉の一族と一緒にあって、わがままなことはできなかつた」²⁸として、療養生活と福田家との交流によって自由にできない環境に対し嘆いている。この状況下にあった石川に大きな転機が訪れたのである。それは亡命である。大沢正道は「石川の亡命の動機の一つに福田との関係の清算がある」²⁹として、「かれを亡命へ駆りたてる有力因子に数えても大きな誤りではない」³⁰と論じている。このように、石川の亡命には、過去の清算の意味合いも含んでいるものであった。

石川とカーペンターとの初めての出会いはロンドン市街であるが、カーペンターが「晴耕雨読」の生活を営んでいたミルソープでも会っている。石川はカーペンターと連絡を取り合い、何度も面会している。石川はカーペンターとの面会をくり返すことにより、自給自足の「晴耕雨読」の生活に憧れを抱き、実生活と自己研鑽を積む一体化した生活を志すようになった。また、このカーペンターとの会話の最中に石川は「デモクラシー」という言葉に出会い、その語源から「土民生活」という言葉を当て、原理とその思想、そしてその実践を構築していった。

石川はカーペンターとの交流から「土民生活」思想を構築し、主張していくことになった。その背景には、田中との交流において民衆のなかに入り、そのなかで生活を送り、民衆とともに修行していく社会運動の姿勢を養っていたこともあった。そして、カーペンターとの出会いによって、自給自足の生活を送りつつ、自らを研鑽する「晴耕雨読」の生活

態度を構築していった。この生活態度が、石川の「土民生活」思想の根本原理であり、石川はこの両者との交流によってその思想を体現していった。

石川の「土民生活」思想は、『土民生活に就て』や『近世土民哲学』に見られる。石川は「土民生活」のことを「デモクラシイ」と訳し、吉野作造（1878-1933）³¹が訳した「デモクラシイ」とは異なると石川自身が論じている。その内容は『近世土民哲学』の第1章である「土民生活」の冒頭で論じている。その内容は以下の通りである³²。

一九一三年、私が初めて舊友エドワード・カーペンター翁を英国シェフィールド市の片田舎、ミルソープの山家に訪ふた時、私は翁の詩集「トワアド・デモクラシイ」に就いて翁と語った事がある。そして、其書名「デモクラシイ」の語が、あまりに俗悪にして本書の内容と些しも共鳴せぬのみならず、吾等の詩情にショックを與へること甚だしきを訴へた。すると其時、カ翁は「多くの友人から其批評を聞きます」と言ひながら、書架より希臘語辭典を引き出して辭其「デモス」の語を説明して呉れた。其説明に依ると、デモスとは土地につける民衆ということで、決して今日普通に用ゐられる様な意味は無かつた。今日の所謂「デモクラシイ」は亜米利加人によりて悪用された用語で、本来の意味は喪はれて居る。ソコデ私は今、此「デモス」の語の「土民」と譯し、「クラシイ」の語を「生活」と譯して、此論文の標題とした。即ち土民生活とは眞の意味のデモクラシイといふことである

石川の「土民生活」は、カーペンターとの談義の最中に「デモクラシイ」という用語の原義が話題となり、ギリシア語の「デモス」は「土地につける民衆」という意味から由来している。そのことを知った石川は、「デモス」の語を「土民」と訳し、「クラシイ」の語を「生活」と訳して、「土民生活」という言葉を論考の表題とした。そして、石川は「土民生活」こそが、眞の「デモクラシイ」として、用語の普及に力を注ぐようになった。

第2節 「土民生活」思想の理論と実践

本節では、石川の「土民生活」思想の理論と実践を論じていく。石川三四郎の「土民生活」思想は、1920(大正9)年より本格的に展開しはじめ、当時の彼の論考の主題となって

いく。最初に石川が「土民生活」を世に発表したのは、東京大学新人会の座談会である。また、「土民生活」思想を体系的にまとめた著作として、1933（昭和8）年に共学社から出版された『近世土民哲学』が挙げられる。この書籍は、1921（大正10）年から発表された論考が収録されている点が特徴である。また、1925（大正14）年に出版された『非進化論と人生』の内容も修正して加えられている。つまり、『近世土民哲学』は、1921（大正10）年から1933（昭和8）年までに発表された数多くの論考をまとめた集大成のようなものである。従って本節では『近世土民哲学』を中心に用いて石川の「土民生活」思想の理論とその実践を論じていく。

石川の「土民生活」思想は、前節で論じたようにカーペンターの理論を中心に、石川思想形成は、田中やエリゼの社会運動等の影響を受けたものであった。まず、石川の「土民生活」思想の主役である「土民」とは何を指すのか。石川の『近世土民哲学』によれば次のように定義されている³³。

土民とは土着自立の社会生活者である。他人に屈せず、他人を搾取せず、自ら大地に立って自由共同の生活を経営する、それが土民の本領である。（中略）

土民は土の子だ。併しそれは必ずしも農民ではない。鍛冶屋も土民なら大工も左官も土民だ。地球を耕し一単に農に非ず一天地の大芸術に参加する労働者はみな土民だ。土民とは土着の民衆といふことだ。鋤を持つ農民でも、政治的野心を持つたり、他人を利用して自己の利慾や虚栄心を満足するものは土民ではない。土民の最大の理想は所謂立身出世的成功ではなくて、自己と同胞との自由である。平等の自由である

石川が指す「土民」とは、土に働きかける人々のことを指し、これは農民に限った話ではない。つづけて、石川は製造業やサービス業でも土地に根ざしている業種であれば、土着の民衆であるとして、自治的な生活を送る人々は土民であるとした。しかし、自己の利慾や虚栄心を満たすように働きかけるものは、たとえ農民でも土民ではないとした。つまり、石川の指す土民とは、大地に根ざし自己と同胞の自由を重んじる人々のことを指している。次に、「土民生活」思想の理想の社会像について「土民生活」の一部を引用して考察していく³⁴。

吾等が土に着き、地を耕すのは、是れ天地の輪廻に即する所以である。工業も、貿易も、政治も、教育も、地を耕す為に、地を耕す者の為に行はるべき筈のものである。吾等の理想の社会は、耕地事業を中心として、一切の産業、一切の政治、教育が施され、組織せられねばならぬ。換言すれば、土民生活を樹つるにある。若し土民生活の眼を以て今日の社会を見んか、如何に多くの無益有害なる設備と組織とが大偉観を呈して存在するかが、分るであろう。そして其為に如何に多くの人間が無益有害なる生活を営むかゞ分かるであろう

石川の「土民生活」思想における理想の社会像とは、工業をはじめ、貿易や政治、教育など土民のために行われるべき社会である。つまり、土民生活を樹立するために、産業や政治、教育は働きかけなければならないとした。そして、石川は当時の社会に無益有害な設備や組織が存在し、そこに多くの人間が有害な生活を営むことになっていることを指摘している。石川の「土民生活」思想は、各人の自発的な意思に基づいて自治的な生活が営まれるとした。耕作事業者は、自給自足の生活を行い、それ以外の事業者も、自らの事業を自治するよう組織して、協同的な社会を構築していくこととした。「土民生活」論の基礎形態はこのように想定されていた。

つづけて、石川は実践方法にも言及している。石川は、各々が土着への意思を持つために啓発が必要であると指摘した。その役割を担うのが伝道者である。伝道者は「土民生活」思想を教えこむのではなく、自ら「土民生活」思想を実践することであった。このように、石川の「土民生活」思想は「デモクラシイ」という、土民が一切の自治を行い、各産業を営む社会思想であった。つまり、土民の自治に即した産業、教育を自ら行い、自由と平等を重んじた理想社会であった。

では、石川の「土民生活」の実践はどのようなものであったか。石川の「土民生活」の実践は東京都の千歳村であった。石川は『自叙伝』において次のように振り返っている³⁵。

最初はここに小さいながらも農園を作って同志と協力生活を試みようとしたのだが、それはすでに私自身の足元から破綻を生じてしまったのである。私の希望では、この近所に音楽家も来、画家も来、諸種の語学者も来て、いずれも独立自治して、半農的生活を営み、そして時々一所に会して各自の才能を発揮し、共学、共楽、協力、協進するようにしたかったのだ。それから、こうした生活をする全

国の同志が互いに連絡をとることをも予想した。しかるにその期待は見事に裏切られて、ここに多くの人の共同生活を始めるということは絶望に帰してしまった。それからせめて学問だけでも同志相集まって進めて行こうという考えに変ってきて、ここに共学社という看板をかかげるようになったのである

このように、石川は半農的な「土民生活」の実践を試みたが、その試みは失敗に終わった。そこで石川は、学問だけでも同志で集まって研究する場を作る目的で共学社を立ち上げた。ここで、石川は半農的生活を営みながら共学社の活動を通して農作業と勉強会を両立していくことになった。共学社では出版活動として「共学パンフレット」と称する社会的啓蒙を目的とした一連の出版物と、石川主宰の雑誌『ダイナミック』を定期的に発行していた。つまり、石川は半農生活を通して自給自足の生活を目指し、自然と共生する節度の保たれた農業活動を行いながら、民衆の啓蒙活動を併せて行うことで「土民生活」思想の実践を行っていたためである。

最後に、明治末期から昭和にかけて農業に焦点を当てて、田園回帰をする知識人の中から、石川の半農生活がどのように評価できるのか論じていく。岩崎正弥は、この知識人たちが半農生活を営むような現象に対し、帰農思想の実現形態とその持続度からある程度把握できるとしている。岩崎は帰農思想の実現形態を四形態に分類し、それは「(1)たんに田舎に居住、あるいは庵をもつだけのいわば帰村生活、(2)趣味的ないわゆる「美的百姓」(徳富藍花)生活、(3)基本的に食糧は自給しようとした半農生活、(4)完全なる百姓生活」³⁶と示している。基本的には(1)から(4)に向かうにつれて、農業活動の比率が重くなっている。つづけて、持続度については「どれだけの期間帰農を実践していたかを指標にとればよい」³⁷としている。岩崎の分類によれば、石川の活動は(3)の半農生活に位置付けられている。

石川の「土民生活」の実践は、1927(昭和 2)年 3 月に北多摩郡千歳村八幡山に宅地 137 坪、畑地 1 段 8 畝 26 坪を借り受け、近くの仮住居に移り住んだことから始まっている。そこから、石川は生涯を通してその実践を行っていたため、岩崎の持続度で言えば 1927 (昭和 2) 年から 1956(昭和 31)年の 29 年間に及んだ。つまり、「土民生活」思想に基づく「晴耕雨読」の半農生活は、片手間での農業活動ではなく、自給自足の農業活動を行い、利潤の追求ではなく自らの生活の確立を目的とし、生涯にわたって継続したという点で評価できる。それは、単に「土民生活」思想の実践に留まらず、「晴耕雨読」の生活による農作

業で自然との共存を図り、その傍らで読書生活と瞑想による「内省」をし続け、生活と社会運動を一体化させていた。

第3節 「土民生活」思想と農本主義との差

本節では、石川の「農本主義と土民思想」を中心に扱い「土民生活」思想と農本主義の相違点を論じていく。まず、農本主義が勃興する背景を押さえていく。1929（昭和4）年に始まる世界恐慌により農村社会に打撃を与え、農村恐慌を引き起こすことになった。こうした状況に、政府は農村恐慌対策を打ち出すも、大した効力を挙げることはなかった。そこで、農本主義は橘孝三郎に代表されるように反近代的、体制批判的な立場に立ち、その立場が超国家主義と結びつき五・一五事件を引き起こすまでに至った。このように農本主義は、当局との結びつきが徐々に見られていくようになり、社会教育の政策として体制側に利用されていくことになった。

このように、当局と農本主義の結びつきが見られる中、石川は1932（昭和7）年に『ダイナミック』第4巻第35号で「農本主義と土民思想」を発表するにいたった。石川は「土民生活」思想と農本主義の相違点として、言語問題、自治の形態、闘争性の三点であった。本節では、石川が示したこの三点を中心に以下に論じていくこととする。

一点目は、言語表記の問題である。まず、石川の指摘は、「農本思想は治者、搾取者の側から愛撫的に見た『農は天下の大本なり』という原則から出た」³⁸ものとしている。それに対し、石川の土民思想は、「歴史上に現れた『土民起る』という憎悪侮辱的の言語から採った」³⁹として、その違いを指摘している。言語の問題は原理を表現するものとして、石川は詳細にその違いを論じている。次に示すのは、石川の農本主義の言語表記について論じた内容である⁴⁰。

原理と言つても、形而上的原理とちがつて、規範的實踐的原理には知的要素とともに情的要素が同時に包含される。従て、その原理を表現する名称には単に理論ばかりでなく気分が現はれてゐるものだ。権藤成卿氏の『自治民範』によると崇神天皇は誓話を発せられ「民を導くの本は教化にあり、農は天下の大本なり、民の以て生を恃む所なり。多く池溝を開き民業を寛ふせよ。」と勅語せられたといふことだ。農本主義者が現存の階級的闘争を否定し、寧ろ民族的統制のもとに農

民の自治的生活を助長しようとするのは、極めて自然のことと言ふべきだ。それは簡単に言へば、農民愛撫主義である。近頃の言葉でいへば温情主義である。農本思想には治者が大御寶を、または民草を大切に皇化に浴せしめる、といふ気分が自づからにじみ出ている。それが武力的革命にまで発展すると否とに係はらず、かうした気分は顕著である

まず、石川が指摘した原理とは、規範的実践的には知的要素と情的要素が同時に包含されているとして、形而上的原理とは異なるとしている。石川によれば、原理の表現ではなく気分が現れているとして、情的要素に重きを置いているようにも読み取れる。石川は崇神天皇の勅語を引用してそして、農本主義は階級闘争を否定し、民族的統制の下で温情的に農民の自治を助長しているに過ぎないと論じている。そして、農本思想は治者が農民を大切に皇化している気分が出ているとして批判している。それに対して「土民生活」思想の気分について次のように石川は述べている⁴¹。

然るに「土民」思想には些かもそうした気分が現はれてゐない。歴史上に於ける「土民」の名称は叛逆者に与えられたものだ。殊にそれは外来権力者、または不在支配者に対する土着の被治被搾取民衆を指示する名称だ。「土民」とは野蛮、蒙昧、不従順な賤民をさへ意味する。温情主義によって愛撫されない民衆だ。その上、土着の人間、土の主人公たる民衆だ。懐柔的教化に服さず、征服者に最後迄で反抗する民だ。日本の歴史に「土民起る」といふ文句が屢々見出されるが、その「土民」こそ土民思想の最も重要な気分を言ひ現してゐる

石川の「土民生活」思想においては、農本主義にあった愛撫的で温情的な側面がないことを前面に打ち出している。石川によれば、土民とは叛逆者に与えられたものであり、統治者不在での被治で被搾取の民衆に与えられるものであると述べている。土民は、農本主義であった懐柔的教化に服さず、征服者に最後まで抵抗する民として、日本の中世の歴史にあった「土民起る」という気分を表すものとしていて、最も重要なものとしている。石川にとって、農本主義は上からの民族的統制を助長している点と、征服者に最後まで反抗する「土民」という点で差異があると論じている。

二点目は、自治の主体や形態についての問題を指摘している。石川によれば、「農本思想は農民を主とするが故に他の民衆を考慮に入れる余地がない」⁴²点が、「土民生活」思想と異なるとしている。まず、石川は農本思想の言葉に着目し、問題点を指摘している。その内容は次の通りである⁴³。

「農本」といふ言葉其ものが、既に他の職業人を第二位に置くことを予想させる。そこで農本主義者は農民の如何なる社会組織を予想するか問題になる。農本主義とは他の職業よりも農を重しとするものであらうが、それが果して可能であるか。崇神帝の「農は天下の大本なり」といふ勅は決して他の職業を蔑視したものではありません。なぜなら直ぐ次に「船は天下の利用なり」とあり、交通機関として船の重大性を同様に認めてあるからである。然るに今日の農本主義者はたゞ農民のみを重んじ、農民のみによつて社会改造を成就しようとする。それは農民の機械的の組織を予想させるものではないか

石川は「農本」という言葉の性質から、他の職業を第二位に置くものとして、どのような農民の社会組織になるのか予想し批判している。石川は、他の職業よりも農を重視する社会が果たして可能なのか苦言を呈している。崇神天皇は「農は天下の大本なり」と言う勅令を発したが、他の職業を蔑視したものではないとし、すぐ次に「船は天下の利用なり」とあり、交通機関も重要視している点から農本主義とは異なるとしている。このため、農本主義では他産業との有機的自治組織を考慮に入れていない点を非難している。農業を第一とする自治形態の農本思想に対して、石川は「土民生活」思想の自治形態は以下の通りである⁴⁴。

土民思想に於ては、職業によつて軽重を樹てない。たゞ総ての職業が土着することを理想とする。自治は土着によつてのみ行はれる。然るに他の諸々の職業人と有機的に連帯しない農民のみの土着は不可能だ。その土着生活は必ず他の職業に依頼せねばならないので、再び動揺を起さねばなるまい。総ての職業が土着するには、金融相場師がなくなるを要する。総ての職業が土着すれば、そこに信用が確立し、投機が行はれなくなる。そして其職業が職業別に全国的、全世界的連帯

を樹立すると同時に、地方的に他の全職業と連帯する。そこに有機的な地方土着生活と有機的な世界生活とが相関聯して複式網状態を完成する

石川によれば、「土民生活」思想は職業によって軽んじないとしている。「土民生活」思想の理想は、ただ全ての職業が土着することである。そして、自治は土着することによって行われる。その自治を行うにあたり、石川はあらゆる職業が有機的に連帯することが必要であるとして、農業のみでは不可能であると述べている。なぜなら、土着生活を行うには農業のみでは社会は成立せず、他の職業と協同的な自治によって成立するからである。また、石川はすべての職業が土着すれば投機は行われなくなり、金融市場師が必要なくなるとしている。金融市場師が必要である環境は互いに信用が確立しないからであり、すべての職業が土着すれば、そこには信用が確立し、投機は行われなくなるとしている。そして、石川の「土民生活」思想では、職業間が信用で確立し全世界が連帯していき、有機的な生活世界を構築するとしている。

これまで論点をまとめると、農本思想と「土民生活」思想では自治の形態や主体が大きく異なる。農本思想では農業を主として社会を形成するに対して、「土民生活」思想は職業によって差別されず、すべての職業が土着することで自治組織を形成する。「土民生活」思想は農業を重んじる農本思想では確立しないとして、職業人同士の連帯が必要不可欠としている。このように、農本思想と「土民生活」思想はその自治形態の点でも大きく異なる。

最後の三点目は、闘争性についてである。農本主義では「農本思想は階級制度下に無闘争の発展を遂げようとする百年前のユトピア社会主義者と同一系統に属するものである」⁴⁵として、無闘争の発展に対して百年前の社会主義と同様なものであると論じている。それに対し石川が唱える「土民生活」思想は、『土民』思想は其名それ自身が示す如く階級打破の闘争無しには進展し得ない性質を持つてゐる」⁴⁶として、階級打破のために闘争性無しでは進展しないと論じている。この三点目についても石川の詳しい議論を見ていきたい。まず、石川は農本主義の闘争性やその統治形態がもたらす意味について次のように論じている⁴⁷。

農本主義は現在の強権的統制をそつとしておいて農本的自治を行ふことに依て社会改造の目的に達しようとする。それは百年前にユトピア社会主義者が考へたと

同じ考へ方だ。意識的に或は無意識的に治者、搾取者の地位から農民を教化し向上せしめようとする考へから出発したこの思想には、無産農民自身の身になった感情が動いてみない。どつちへ向いても手足を延ばす余地を持たず、資本と強権との鉄条網をめぐらされて、機関銃と爆撃飛行機とに威迫されて、最後の生命線まで逐ひつめられてゐる無産窮民——即ち土民の心情とは縁遠いものだ

この引用部分において、石川は農本主義の自治形態が土民の心情とは縁遠いものと指摘している。その要因として、農本主義は強権的統制をそっとしておいて、農本的自治によって社会改造の目的となっているとして、無闘争の発展に対して批判している。農本主義は意識的あるいは無意識的に治者、搾取者の地位から農民を教化しているのであって、農民の視点からの教化になっていない点があると、石川は指摘している。そして、石川はそのような教化されている農民には、自由が無く困窮しているとして、土民の心情とは程遠いものと論じている。石川は土民の心情の点から次のことが必要だと述べている⁴⁸。

現制度の下で何か現実的にまとまった仕事を達成しようとするには農本主義もよろしからう。けれども、それは解放の事業ではない。「土民」は先づ鉄条網を断ち切らなければ団結も共同も自由にはできないのだ。先づ鉄条網を寸断することだ。如何にして周囲の鉄条網を切断するか、それが解放の最初の問題だ。最大緊急な問題だ

石川は現制度の下では農本主義に賛同しつつも、土民の心情において最も重要な「解放の事業」ではないという、最大緊急な問題に踏み込めない点においても批判している。石川は「土民生活」思想において、解放の事業を重視しており、その解放の事業とは「人格の独立」である。石川の「土民生活」思想は、「人格の独立」を果たし、自由で協同的な自治を成すものであった。

以上の三点を見てきたように、石川の「土民生活」思想と農本主義は大きく異なっている。農本主義と「土民生活」思想は、大本の主体において農業という共通点はあるものの、農本主義は上からの統治に立脚しているのに対し、「土民生活」思想は土民による平等な自治という点が大きく異なっている。

第4節 小括

本章では、石川の「土民生活」思想の形成からその理論と実践、農本主義との差異について論じてきた。石川の「土民生活」思想の形成において、特に影響が大きかったのはカーペンターとの交流であった。キリスト教社会主義期の石川は、自身の生活と社会運動が一致していない問題を克服できなかつたが、田中やカーペンター、エリゼの生活と社会運動の一致を見て克服していった。さらに、石川はカーペンターとの交流でデモクラシーの語源や理念を談義して「土民生活」思想を構想していった。

石川の「土民生活」思想は、真のデモクラシーとして土着した民衆による政治であった。石川の指す「土民」とは、農民以外の土着した民衆であるとし、大地に根差した民衆は同胞とし、その中では区別も差別もない社会を理想とした。石川の理想とする「土民」は、経済的に自立し精神的に自律した民衆であった。その理想社会での産業や教育は、「土民」のために行われるものとした。これは『虚無の靈光』で論じていた、個人的自治と共同的社会の一致した自由と平等を重んじた社会であったといえる。つまり、石川の「土民生活」思想は、『虚無の靈光』で具体的な社会運動の方策を示すことが出来なかつた点を克服しようとしたものであったといえよう。

石川の「土民生活」の実践は、1927（昭和2）年の東京都千歳村で行われた。この実践は、「土民生活」思想の賛同者や同志たちの仲たがいでによって失敗に終わった。ただ、石川は千歳村で半農生活による自給自足の生活を実践し、また共学社発行の「共学パンフレット」や『ディナミック』の出版事業を通して、伝道を意図した啓蒙的な社会活動を行った。石川は「土民生活」思想の実践を通して、伝道者や教育者に求められる生活と社会運動を一致させていた。

最後に、石川の「土民生活」思想と農本主義の違いについてまとめる。石川は「土民生活」思想と農本主義の違いは主に、言語表記の問題、自治の主体と形態、闘争性が異なると論じている。言語の表記については、石川の考える「土民」とは「土民起る」の「土民」の意味を包含し、征服者や権力者に対して抵抗する民衆であるとした。それに対し、農本主義の民衆は征服者や権力者に民族的統制において温情的に扱われているとした。次に、自治の主体と形態について、「土民生活」思想は、土着した民衆である「土民」による社会であり、その社会は有機的な連帯する社会であった。一方の農本主義は農民だけを重んじ、農民を機械的な組織に組み込んでいた。最後に、闘争性について、農本主義では征服

者、権力者による農民の教化であり、「解放の事業」を含んでいないとした。この「解放の事業」とは、土民の心情を養うことであり、それは「人格の独立」にあたる事業である。石川の「土民生活」思想と農本主義の違いは、個人的自治と協同的社会が達成されているか否かの差にあったともいえる。

第3章 「土民生活」思想期における石川三四郎の教育思想

本章では、「土民生活」思想期の石川の教育思想として、ルソーに見られる自然による教育を中心に扱う。石川は、当時の日本社会が物質文明に陥っている点を嘆き、それに伴う道徳、教育の弊害を指摘している。当時の日本は大正デモクラシーや共産主義思想など多様な思想が見られ、それに対し当局による精神作興策である「國民精神作興ニ關スル詔書」が示された。石川はその精神作興に対し「養芽論」を発表し、物質文明観に囚われた精神作興の問題点を指摘している。石川は反物質文明の立場から、「人格の独立」と自由から生じる責任に真の精神作興が生じることを示した。

石川の自然による教育は、ルソーの「自然に還れ」⁴⁹から自然に基づく生活と精神の涵養の重要性を論じていた。それは、当時の教育が政府による生活と精神に対する干渉によって生じる問題に対し、石川はアンチテーゼとして示した。

第1節 「土民生活」思想期における石川三四郎の道徳観

本節では、石川の「土民生活」思想期における道徳観として、1924（大正13）年に『万朝報』で掲載された「養芽論」を取り上げる。当時の日本は、1923（大正12）年の関東大震災により、「関東大震災朝鮮人虐殺事件」や当局による大杉らが犠牲となった社会主義、無政府主義の弾圧等による人心の乱れによる事件⁵⁰が起こった。石川も第2部第1章第2節で論じたように、当局による弾圧の被害にあっていた。一方で、1920年代の日本は、大正デモクラシーによる個人主義的、自由主義的な思想や、ソ連の共産主義国家の樹立に伴う共産主義思想等、多様な思想の広がりを見せる時代であった。

このように、社会体制の揺らぎと国民精神の不安定さに対し、日本政府は国体を補強する政策の一つとして1923（大正12）年に「國民精神作興ニ關スル詔書」（以後、「国民精

神作興詔書」とする)を提示した。この「国民精神作興詔書」は、「浮華放縦」や「軽佻詭激」を戒め、「質實剛健」の精神を涵養することを示唆した。石川は、「国民精神作興詔書」成立について、次のように論じている⁵¹。

日本人は西洋の物質文明を罵り、自ら精神文明の君子国を以て誇つて居た、然るに今日の日本は世界無比なる物質主義国家となつた。学校さへ建てれば教育が出来るものと心得た。そして到る処に醜態を暴露した。その上物質主義の権化たる墮落坊主を集めて精神作興を相談する。かうしてドコまでも世の中は逆転する

当時の日本社会について石川は、世界に類を見ない物質文明主義となっていたと指摘している。その物質文明による精神は、学校を建てれば教育が出来るとしている点からも見られる。「養芽論」によれば、当時の教育は物質文明主義に基づいていると暗示している。石川は、物質主義に執着した政治家や宗教家による精神作興では、より物質主義に偏っていくと指摘している。石川にとって物質文明とは、「此自然征服の愚想が、又一種の近代文明病から流出したものである」⁵²として、「自然と人間を隔離させた。人間自身が自然の子であることを忘れさせた」⁵³であると論じている。石川は物質文明による「生活を続ける人間が遂に柔弱となり多病となりて、頽廢民族となる」⁵⁴と論じている。石川はこの物質文明主義に陥った代表例として、ドイツや日本を挙げている。

日本とヨーロッパで生活した石川は、「十年前に初めてヨーロッパを見て、所謂文明といふものゝ浅ましい有様に驚いた私は、日本に帰つて再びその所謂進歩の醜さを嘆せざるを得なかつた」⁵⁵と振り返っている。石川はロンドンを訪れた際にも、文明の醜悪さを実感し、同様な経験を日本へ帰国した際にも感じ取っていた。加えて石川は、第一次世界大戦中にドイツ兵と接して機械的な兵士と述べていた。このように、石川は第一次世界大戦を戦地で過ごし、ヨーロッパと日本の生活を体験したことにより、機械文明の進歩の醜悪さを肌で感じ、日本人が機械的な精神に、日本国が機械的な社会に陥っている姿を見た。人間の機械化は、「機械は、人間が自然に克ち人間の領域を拡張する為に発明されたものである。尚ほ簡単に言へば自然を人間化する為に造られた」⁵⁶ものとし、「然るに人間は機械に迷つて、自然を人間化する前に、自分が機械化し」⁵⁷たとなった。つまり、人間が文明進歩のそして機械の「蔭」に囚われている状態である。

それでは、人間が機械化した際どのような問題を生むのか。石川は「機械的物質観の社会は、個人の自由を認めない。自由の認められない個人は奴隷である。奴隷に責任観念はあり得ない。必然律を以て運転する機械には責任なぞあり得ない」⁵⁸と論じている。その極地が、弁証法的唯物史観に基づくロシアのボルシェビキ革命であり「マルクシズムは人類を機械そのものと化して奴隷たる価値さへも認めない」⁵⁹のものであった。

それでは、どのようにして責任を持たせるのか。石川は「自由の意思が必然律を意識して発動した場合に、初めて責任感が出て来る」⁶⁰と論じている。石川の考える自由意志とは、以下の通りである⁶¹。

吾々の意思作用も之を一種の自然力として客観する時は、必然律に依つて動くものと言ひ得るかも知れない。けれども、その意志として発動する自然力は、その意志の発動者の人格に従つて独特の色調と形態とを帯びるものである。之れを意志の自発性といふものである。これが自由意志の本拠であり、意志の選択作用に特殊の価値と責任を伴ふ所以である

石川の考える自由意志とは、人格によって意志作用が異なり、意志の選択作用に価値観と責任感が伴うものである。そのためにも、「人格の独立」が求められる。石川は、「独立の人格であつて、初めて自由観が生れ、個人の自由が認められて、初めて個人に責任格が付せられ、個人に責任格が付せられて、初めて社会に自由の協同が成立する」⁶²と論じている。

「国民精神作興詔書」では、「公德ヲ守リテ秩序ヲ保チ責任ヲ重シ節制ヲ尚ヒ」とある。「国民精神作興詔書」を解説した『聖詔謹解』では、責任を「己の引き受けた任務、自分の責めある仕事」⁶³として、「いやな事でも責任の在るところ、これを完全に果たす」⁶⁴と説明している。「国民精神作興詔書」の責任は、自由意思による作用のものとは異なっており、自由がなくとも果たせる責任を負わせるものであったと言える。それに対し、石川の論によれば、責任とは「人格の独立」によって自由を享受し、自由によって個人の選択によって責任感を負うものである。石川の論ずる責任は、個人の自由意思による作用による責任であり、物質文明的な社会や個人では養われないものであった。この点から、石川の精神作興は、「土民生活」を提唱し、自らの生活を深く見直すことで果たされるものであった。

第2節 「土民生活」思想期における石川三四郎の自然による教育

本節では、石川の「土民生活」思想期における自然による教育を論じていく。前節で論じたように当時の石川は、日本社会が物質文明に溺れ、機械化が進み、民衆も自然と切り離され、自我を失っていると感じていた。特に、石川は「文部省も行政府であり国家の小使室たるに於て、警察と変りはないが、併し何と言つても国民精神生活と直接の交渉を持つた小使室だ」⁶⁵と論じている。石川は、文部省による精神と生活に対する直接交渉によって、日本社会の阻害の一因となっていることを指摘している。その一例として、石川は「カトリック教が仏国の国教であつた時代、其カトリックの学校と非宗教小学校との間に如何に醜い争闘があつたか。そして其争闘が如何に仏国教育の発達を阻害したか」⁶⁶と述べている。石川は、当時の文部省を仏国のカトリック教会のように例え、民衆の精神と生活に干渉し、発達を阻害していると指摘している。

それでは、仏国はどのようにしてカトリックの学校の支配を乗り越えたのか。石川は「文明の牢獄を脱却しやうとして起つた人物」⁶⁷として、ルソーに着目した。石川は「土の教育」において、「土は太陽の協力によつて一切の物を復活させる。土は腐敗物、汚穢物を吸収して総てを浄化する。『エミール』の著書たるルソオが「自然に還れ」と言つたことを深く味はつて見よ」⁶⁸と指摘している。石川は、文部省による精神と生活の干渉によって失つたものを、太陽の協力によって土を復活させることを求めた。それは、石川の「虚無の靈光」で、靈光によって生活を省みて「陰」を取り払うと同様の指摘がなされている。石川は、ルソーの「自然に還れ」が当時の日本において欠けていると指摘している。石川は、当時の日本の民衆が自然を喪失していることを『近世土民哲学』では、次のように論じている⁶⁹。

今日の農村問題は、土地国有によつても、自作農設定によつても、所謂思想善導によつても解決されない最大の社会問題である。内相は町村長や、小学教員や、巡査や、を頼みにしている様であるが、今日の町村長や、小学教員や、巡査やは抑も如何なる思想により、如何なる目的を以て、其職に携わつているか。彼等の多くは農業よりも教員、巡査、町村長たることを選んで、自ら田園を棄て去つた

人々ではないか。彼等の生活意識は唯だ社会の上部構造の上級に向つて自己を進めるにある。彼等の眼中には農村も無く、農業も無く、人道も無い

石川は当時の学校教育を含む社会の風潮が、社会の上部構造が定めた生活意識に向かつており、多くの民衆は田園を捨て去っている点を指摘した。それは、自然を喪失した生活意識であった。自然を喪失したのは教育者も例外ではなかった。石川は「小学校と小学教師とが、其教育術に於ても、民心教化にも、何の力も才能も持つて居ない」⁷⁰と、学校や教師にも批判の眼を向けている。この石川の指摘には大正自由主義教育⁷¹も含まれていた。

石川は、「最近日本にも「自由教育」の声が高くなつて、到處に有力な私立小学校が設立されて来た。けれども是等の諸事業は単に教育術上の試験所に過ぎない」⁷²として、大正自由教育は物質主義的な教育を克服するものではなかったと述べている。その要因として、石川は、「今日は従来の如き単なる洋風模はうの時代では無い」⁷³と論じ、西洋風の教授法を単なる「模倣」をしているにすぎないと指摘していた。石川は「野蛮人と同様に附和盲従するのみで、自主の批判を欠く」⁷⁴のであるとして、「人格の独立」の精神によって受容すべきと指摘している。「人格の独立」の精神無き模倣は「蔭」を受容すると同義になる。石川は、単なる「模倣」を乗り越えるには、「模倣」するものを耕し、自身の生活を耕した果てに「模倣」ではなく「摂取」となると論じている。石川は、単なる「模倣」の教授法以上に必要な教育について、次のように論じている⁷⁵。

自然の中に、井を掘りて飲み、地を耕して食ふ。人間の生活は其れにて充分である。それが人生の総てである。人間は地と共に生きるの外に、何事をも為し得ぬものである。地の与へる美の外に、人間は些かの創作をも為し得ぬものである。吾等は地に依りてのみ天を知り、地によりてのみ智慧を得る。地独り吾等の教育者である。地独り真の藝術家である。地を耕すは、即ち地の教育を受けるに外ならぬ。地の養育を受けるに外ならぬ。そして地を耕すは、又、地の芸術に参与することである。然り地を耕すは、即ち吾等自身を耕す所以である

石川は、地に基づいた教育によって自分自身を改革することにつながると論じている。石川は地によって、生活を送る者すべてはその地から教育を受ける必要があるとしている。つまり、地に生きる人間は、その生活に基づいた教育を施すことにより、「内省」すると

している。石川の社会運動は、自分たちの生活を見つめなおし、地に根差した生活を送るために自分自身の生活を省みる教育を目指していた。それでは、石川にとってはどのような人物を育成し、そのためにはどのような教育をするのが望ましかったのか、以下はその内容を示している一節である⁷⁶。

自然ほど良い教育者はない。ルソオが自然に帰れと言ふた語の中には限り無く深い意味が味はれる。自然は良い教育者であると同時に、又無尽蔵の図書館である。自然の中に書かれた事実ほど多種多様にして、而も明瞭精確な記録はあるまい。音楽が人間の美魂の直射的表現である点に於て、諸他の芸術に勝る如く、自然の芸術ほど原始的にして直射的な美神の表現は他に存在しない。自然は良教育者にして、大芸術家にして、又、智識の包蔵者である

この一節では石川の自然の教育の良さを説いている。石川によると、自然は教育者であるとともに無尽蔵の図書館と例えて、自然の持つ芸術的な側面を重要視している。石川にとって自然とは、教育者にして、芸術家にして智識の包蔵者であった。ここに、石川はルソーの「自然に還れ」の本質があると考えていた。石川は自然の中での生活体験について次のように振り返っている⁷⁷。

優しい環境の中に生活して、私は従来経験したことの無い長閑さと幸福とを享受することが出来た。そして其間にも毎日必ず何か新しい事実を学んで、身体と感情とを鍛へるばかりか、殊に此の五年間の百姓生活ほど、私の智識を向上させてくれたことは、私の生涯中に曾て無いことであつた

石川は、農業を営んだ生活においては知識を向上させただけでなく、身体と感情をも鍛えることができたと振り返っている。石川は農業を中心とした地に根差した生活を送った日々での知識の向上については、生活に直結するものとして次のように論じている⁷⁸。

実際、百姓をし始めて、自分の無智に驚いた時ほど、私は自分の学問の無価値を痛感したことは無い。学校の先生の口を通じて聞いた智識、書齋の学者のペンを通じて読んだ理論、其れが絶対に無価値だとは勿論言へないが、併し私達の生

活には余り効能の多くないものである。特に平生室内にばかり引込み勝ちであつた私は、自然に対して無智、無感興であつたことに驚かされたのである

石川は学校の先生を通じた知識や、学者の理論だけでは自身の生活に有効なものは多くないと指摘している。石川にとって自然に根差した知識や、民衆の求めている教育を施すには、民衆の自治によって教育が施されるべきだと論じている。これは、幼少期の自然に対して無知を実感した経験やドムで「晴耕雨読」の生活体験で得た知見である。石川にとって教育は、「生活即教育の真生活、真教育」⁷⁹を実現することであった。

石川は、日本を支配している物質文明を批判し、自然生活に即した教育を施すことの重要性を論じてきた。それは、自然で生活することによる身体と精神を強くし、生活を省みることによって内なる自我を目覚めさせる。ここに、「人格の独立」が目覚め、協同的な社会を構築できるとした。最後に、石川は「一切の近代思想が Jean-Jacques Rousseau 等から出発する如く、土民思想も亦、彼等から起る。ルソオの「自然に還れ」の思想は、言葉を換へて言へば「土民生活に還れ」といふことである」⁸⁰と主張した。つまり、石川の「土民生活」思想そのものに「自然教育」的、「自己教育」的な教育思想があったと言える。

第3節 小括

本章では、「土民生活」思想期の石川の教育思想として、道德観と自然による教育を論じてきた。「土民生活」思想期の石川は、日本社会が自然を喪失し、世界に類を見ない物質文明主義となっていた点を問題視していた。石川は第一次世界大戦のドイツのように、物質文明の「蔭」に囚われ、機械化する社会や民衆に対して講演や論考、「共学社」での「晴耕雨読」の社会運動で警鐘を鳴らし続けた。

石川の道德観では、大正デモクラシーや共産主義思想など多様な思想が見られる中、当局による精神作興が一つに議題として取り上げられた。当局の精神作興策である「国民精神作興詔書」は、「浮華放縦」や「軽佻詭激」を戒め、「質實剛健」の精神を涵養するものであった。石川は、物質文明に侵された当局の精神作興に対し、精神は作興されることなく、より物質文明に陥るものと指摘している。物質文明の極致は、民衆が奴隷となり、責任を喪失する。それに対して、石川が示した精神作興は、「人格の独立」によっておこる、

意志の選択作用に価値観と責任感を伴わせるものであった。そのためにも、自らの生活を深く見直すことで果たされる「人格の独立」をもって、自由を享受しそこに生じる自由意志に責任感を持たせるものであった。石川の論ずる責任は、個人の自由意思による作用による責任であり、物質文明的な社会や個人では養われないものであった。

つづいて、石川の自然による教育は、政府による生活と精神による干渉に対抗し、ルソーの「自然に還れ」から自然に基づく生活と精神の涵養を示した。石川は、当時の教育運動であった大正自由教育では物質文明的な教育を克服できないとした。その要因として、石川は「自由教育」は西洋風の教授法を単なる「模倣」をしているためと指摘した。「自由教育」を称する学校の教授法では、日本の生活に根差したものにできていないと、石川は認識していた。

石川は、自然の生活に即した教育を施すことの重要性を論じてきた。石川は、自然に根差した知識や、民衆の求めている教育を施すには、民衆の自治によって教育が施されるべきだと論じていた。自然で生活をするることによる身体と精神を鍛え、生活を省みることによって内なる自我を目覚めさせる。ここに、「人格の独立」が目覚め、協同的な社会を構築できるとした。石川の「土民生活」思想は、「晴耕雨読」に基づき、「晴耕」による自然によって身体と精神を鍛える「自然教育」的な、「雨読」による読書と「内省」による「自己教育」的な教育思想であったと言える。

注

¹ 石川三四郎『自叙伝』（理論社、1956年）『石川三四郎著作集』第8巻、青土社、1977年、314頁。なお、引用文中のママは筆者によるものである。

² 同上書、318頁。なお、引用文中の中略は筆者によるものである。

³ 同上書、319頁。

⁴ 同上書。

⁵ 同上書。

⁶ 同上書、326頁。

⁷ 同上書、327頁。

⁸ 同上書、329頁。

⁹ 北沢文武『帝力、我に何かあらんや 石川三四郎の生涯と思想』完結編、鳩の森書房、1974年、27頁。

- ¹⁰ 前掲書『自叙伝』339頁。なお、引用文中の括弧内は筆者によるものである。
- ¹¹ 同上書、367頁。
- ¹² 酒井正文「『同胞』時代の活動」中村勝範編『帝大新人会研究』慶應義塾大学法学研究会、1997年、158頁。
- ¹³ 同上。
- ¹⁴ 同上、159頁。なお、引用文中の括弧内は筆者によるものである。
- ¹⁵ 前掲書『自叙伝』422頁。
- ¹⁶ 同上書。
- ¹⁷ 同上書、448頁。
- ¹⁸ 同上書、449頁。
- ¹⁹ 同上書。
- ²⁰ 同上書、453頁。
- ²¹ 同上書、452頁。
- ²² カーペンターの評価は西山によると次のとおりである。「カーペンターの思想は、オーウェン、モリス、ラスキンらイギリスの協同組合社会主義、ギルド社会主義、そして、アメリカのエマソン、ホーソン、ソローに代表される超絶主義といった流れの中にある。オーウェン、モリスの系譜はユートピア思想の発祥の地イギリスにおいて開花した、ユートピアの実現化を推進する運動であり、一方、超絶主義の作家らの活動は美しいユートピア空間をアメリカの大自然と共生を基調としながら描き、生活の哲学を体現するユートピア運動である」。(引用文献、西山拓『石川三四郎のユートピア構想—近代日本の知識人による理想社会論構築と社会改革の試み—』早稲田大学博士論文、甲第 2763 号、2009 年、94 頁)。
- ²³ 米原謙の「第一次世界大戦と石川三四郎—亡命アナキストの思想的軌跡」『阪大法学』通号 182 号、1996 年と、石川三四郎の「カーペンター及び其哲学」鶴見俊輔編『石川三四郎集』近代日本思想体系 16、筑摩書房、1976 年を参考に作成した。
- ²⁴ 前掲書『自叙伝』196-197 頁。
- ²⁵ 同上書、255 頁。
- ²⁶ 前掲「第一次世界大戦と石川三四郎—亡命アナキストの思想的軌跡」220 頁。
- ²⁷ 前掲書『自叙伝』255-256 頁。
- ²⁸ 同上書、256 頁。
- ²⁹ 大沢正道「石川三四郎論」前掲書『石川三四郎集』427 頁。
- ³⁰ 同上。
- ³¹ 石川と吉野作造は面識があることは、後藤彰信の研究で明らかになっている。後藤の研究によると、石川と吉野は 2 回ほど面識がある。一度目は、両者が所属していた本郷教会においてである。二度目は石川が亡命から帰国した後のことである。
- ³² 石川三四郎『近世土民哲学』共学社、1933 年、1 頁。
- ³³ 同上書、1 頁、4 頁。なお、引用部分の中略は筆者によるものである。

- ³⁴ 石川三四郎「土民生活」(『社会主義』4月号、1921年)『石川三四郎著作集』第2巻、青土社、1978年、316-317頁。
- ³⁵ 前掲書『自叙伝』452頁。
- ³⁶ 岩崎正弥『大正・昭和前期農本思想の社会史的研究』京都大学博士論文、甲第5864号、1995年、27頁。なお、引用文中の括弧内は引用元によるものである。
- ³⁷ 同上書。
- ³⁸ 石川三四郎「農本主義と土民思想」(『ダイナミック』第4巻第35号、1932年)石川三四郎『石川三四郎著作集』第3巻、青土社、1978年、96頁。
- ³⁹ 同上。
- ⁴⁰ 同上書、97頁。なお、引用文中の傍点は引用元によるものである。
- ⁴¹ 同上書、97-98頁。
- ⁴² 同上書、98頁。
- ⁴³ 同上。
- ⁴⁴ 同上書、98-99頁。
- ⁴⁵ 同上書、96頁。
- ⁴⁶ 同上書、96-97頁。
- ⁴⁷ 同上書、99頁。
- ⁴⁸ 同上。
- ⁴⁹ ルソーは「自然に還れ」という用語を使用してはいないということはルソー研究によって明らかにされている。ただ、本研究においては石川の引用として「自然に還れ」という用語を用いることにする。
- ⁵⁰ 石川は「養芽論」で秩序が乱れている事件について、「福知山女学校の教師による紊乱」を例に出している。石川は、福知山女学校の男性教師が女学生と恋に落ちた事件と報告している。
- ⁵¹ 石川三四郎「養芽論」(『万朝報』1924年3月23日-26日の連載)前掲書『石川三四郎著作集』第2巻、286頁。
- ⁵² 石川三四郎「文明進歩とは何ぞ」(『社会主義論集』、ブルドック社、1919年)同上書、219頁。
- ⁵³ 同上。
- ⁵⁴ 同上、218頁。
- ⁵⁵ 前掲「養芽論」286頁。
- ⁵⁶ 石川三四郎「機械」(『ダイナミック』第1巻第2号、1929年)前掲書『石川三四郎著作集』第3巻、120-121頁。
- ⁵⁷ 同上、121頁。
- ⁵⁸ 石川三四郎「吾等の自由と連帯責任」(『労働運動』第4巻第13号、第14号の連載、1925年)前掲書『石川三四郎著作集』第2巻、401頁。
- ⁵⁹ 前掲「機械」119頁。

- ⁶⁰ 前掲「吾等の自由と連帯責任」402頁。
- ⁶¹ 同上。
- ⁶² 同上、403頁。
- ⁶³ 七理重恵『聖詔謹解』積文館、1926年、37頁。
- ⁶⁴ 同上書、38頁。
- ⁶⁵ 石川三四郎「無産農民学校」（『萬朝報』1926年8月17日）前掲書『石川三四郎著作集』第2巻、476-477頁。
- ⁶⁶ 同上、479頁。
- ⁶⁷ 石川三四郎「野蛮人の文明観」（『新日本』第3巻第7号、1913年）同上書、187頁。
- ⁶⁸ 石川三四郎「土の教育」（『萬朝報』1926年8月20日）、同上書、481頁。
- ⁶⁹ 前掲書『近世土民哲学』102-103頁。
- ⁷⁰ 前掲「土の教育」479頁。
- ⁷¹ 石川がどの大正自由主義教育の実践に対して批判していたのかは明らかになっていない。この点については、石川が投稿していた教育雑誌である『教育時論』の論調を探る必要がある。ただ、大正自由主義教育の実践例の一つとして挙げられる成城小学校の設立者で文部官僚の沢柳政太郎は田園を捨て去っている人であり、「自由教育」の有名な私立小学校に該当するのではないかと推察される。
- ⁷² 前掲「無産農民学校」477頁。
- ⁷³ 石川三四郎「魂の復興」（『萬朝報』1923年10月19日-23日の連載）前掲書『石川三四郎著作集』第2巻、275頁。
- ⁷⁴ 石川三四郎「紛失された個人主義」（『政界往来』第7巻第9号、1936年）前掲書『石川三四郎著作集』第3巻、417頁。
- ⁷⁵ 前掲書『近世土民哲学』45頁。
- ⁷⁶ 石川三四郎「馬鈴薯からトマト迄」（『我等』第5巻第5号、1923年）前掲書『石川三四郎著作集』第2巻、326頁。ママは筆者によるもの。石川は「自然にかえれ」を記述する際は「還れ」を用いる事が多いため、ママを付しておいた。
- ⁷⁷ 同上、334頁。
- ⁷⁸ 同上。
- ⁷⁹ 前掲書『近世土民哲学』104頁。
- ⁸⁰ 同上書、12頁。

第3部 東洋史研究・戦後社会運動期における石川三四郎の教育思想

第1章 東洋史研究・戦後社会運動期における石川三四郎の生涯と東洋史観

本章では、石川三四郎の1931（昭和6）年から1956（昭和31）年に没するまでの生涯と、活動の中心であった東洋史研究の東洋観について論じていく。東洋史研究・戦後社会運動期の石川は、社会運動家として成熟し、『自叙伝』における心情の記述が少なくなってきた。石川は、中国旅行によって中国の文化に関心を持ち、共学社の活動の一つであった『ダイナミック』を廃刊して東洋史研究に専念することになった。また、太平洋戦争が勃発して以後は、石川の活動も制限され、より一層東洋史研究に専念することになった。本章で扱う石川の東洋史研究では、『ダイナミック』での秦の始皇帝を中心とした論考と、反アジア主義と自身の東洋史研究の特徴を出した「東洋文化の歴史的存在」を扱う。

第二次世界大戦後の石川は、無政府主義活動を積極的に展開していくことになる。また、石川は、晩年に共同研究会や近代学校を開き、学問を用いた啓蒙活動も展開していった。石川の無政府主義活動については、本部第2章第2節で扱っていく。

第1節 東洋史研究・戦後社会運動期の石川三四郎の生涯と思想形成

本節では、1931（昭和6）年の満州事変頃から1956（昭和31）年に石川が没するまで期間を扱っていく。石川は、1933（昭和8）年10月から渡欧を目指して中国に渡ったが、わずか3ヶ月で帰国した理由について、「私は、一時ヨーロッパ行を断念して支那研究に没頭する考へになり、その為に先づ日本に帰って来た」¹と述べている。この3ヶ月の中国旅行がきっかけで、石川は中国研究に没頭したいという意思表示をした。以下からはその中国旅行の内容である。

石川は渤海湾塘沽の港に下船したのち、北京に汽車で移動していった。北京に着いた石川は、5年前に江湾の労働大学で演説を行った友人らと出会い、そこで中国の社会問題と中国興廢の根本問題を知ったと『自叙伝』で記している²。その石川が知った根本問題とは、中国の家族制度の欠陥であり、特に古い家族道徳においては家督相続人の権能が大きいと同時に、義務も大きい点に着目していた。詳しくは以下のように石川は述べている³。

学生時代に素晴らしい才能と意気とを持って社会改造の待望に向かって猪の如く進んで来た青年も、一度び実社会の泥海に入ると全然変わってしまう。それは、この家制度が二重にも三重にも動いて青年の意気をすっかり殺してしまうのだ。すべての社会機構が家族制度によって占領せられている上に一度び権力的機構の端くれに入るとその人を中心として一 가족が群がり縋ってくる。どんな意気を持った有為の人間も一旦その羈絆に纏われると身動きも出来なくなる。こうして青年時の思想は忽ち棄てられて、昨日の改革者は今日の搾取者、寄生者となる。軍閥の存在も、彼らの中の権力争奪も、奇斂誅求も、みなこうした自然の必然の過程として行われる。そして閥族に無縁の一般民衆は骨の髄まで搾取された上に棄てられる。中国國家そのものも実はこうして見捨てられているのだ

石川は、中国の家族制度によって社会機構が占領されることにより、社会を改革しようとする青年たちもこの構造に囚われていくことを再認識した。石川は、日本でも佐藤虎次郎が社会運動家から政治家となったことにより、改革者から搾取者になった例を実際に目にして⁴。このような社会機構に支えられた北京を見た石川は、「莊嚴を極めた清朝の大宮殿も、中国政府の無資力なるため哀れにも、荒廢に委ねられている惨状を見て悲しい⁵という印象を抱いたようである。中国は民衆のみならず建造物まで荒廢の一途を辿っている状況にあった。また、石川は芝居を見て中国の文化や民族について考察を巡らせている。例えば服装について石川は、次のように言及している⁶。

混血の漢民族は、時には蒙古の支配を受け或いは蒙古系の満州族に統御せられてその影響を受けている。服装の如きはその一つであろう。現代の服装が漢民族固有の風俗から発達したものでないことは、クラシックものの芝居を見ればすぐ分かる。また古い絵画を見れば一層明らかになる。それは単に服装ばかりではなく髪飾りの仕方から冠りもの、はきものまで型を異にする

石川は、服装について支配者層が異なるごとにその影響を受けている点が芝居や古代の絵画から見られるとしている。つづいて、石川はその芝居の中で服装に続いて音律学について「北京の芝居を見て私はその様式の、またその音楽の幼稚なのに驚かされた。上海でも二、三度芝居を見たがやはり同形態のものである。これほど古い文化の国であるから、

も少し発達してもよかろうと思われるが、極めて貧弱である」⁷と言及している。このように、服装や音律学が発達しなかった要因について石川は、以下のように論じている⁸。

中国には従来民族の文化というものがなかった。そもそも中国の知識、支那の学問、芸術はみな代々の支配階級のものであって人民には与えられなかった。そればかりでなく、支配者は外来者が多く、その代るごとに人民は不安と誅求とに苦しめられて、学問や芸術に心を注ぐ余地がなかった。それから又、学者や芸術家も権力者への奉仕機関に過ぎない。このような所に学問や芸術の進歩のあろう筈がない。彼等には自然探求の情熱や、美的欲求の興奮やを生起せしめる自由精神も生活余地もなかったからである。かくて中国の歴史には革命はあっても進化がないと言われるような結果になったのである。武断官僚政治ほど世に哀れむべき結果を与えるものはない

石川は民族文化が発達しなかった要因として、学問や芸術は支配階級のものであって、人民へ与えられなかった点と、外来の支配者に対する不安によって学問や芸術に心を注ぐ余地がなかった点を挙げている。つまり、支配者層の学問や芸術が民衆に浸透することなく、そして、その支配者層が亡ぼされ、同時にその学問や芸術も亡ぼされてきた。その点から、石川は中国の歴史を革命であって進化ではないという結論をだした。

1933（昭和 8）年 11 月に石川は泰山に登ることになった。その時に関心を引いたのが「山頂に到って一つの異彩を放っている碑石に遭遇する。それは秦の始皇が建立したといわれている無地の碑である」⁹と『自叙伝』で振り返っている。特に石川が感激したのは「丞相李斯の言を入れて医薬・卜筮・種樹以外の一切の書を焼き、儒を坑にしたという始皇の本精神が忽然として解得されたから」¹⁰という点であった。石川は泰山にある始皇帝のものといわれている石碑の意義について、次のような考えを抱いている¹¹。

泰山は今でも老子の思想を継承した道教の教徒が司宰している。大道廃れて仁義あり、知恵出でて大偽あり、という思想から見れば俗物の孔子から出た儒者だの仁義礼智の戒律などは人間を委縮させる偽善である。わからずやの学者だの、人を迷わす愚劣な書籍は、人類解放のために焚き棄てたほうがよいと思ったのである。宇宙と人生との真相を悟得し、自由解脱の道を体得するには文学や書物は

却って妨げになる。学者なぞという理窟の下水道にしか生きられないもぐらのよ
うな代物は幾人坑に投じて、民衆のために思えば惜しくはない

石川は、儒者の偽善の戒律や人を惑わすような書籍を焚き棄てた始皇帝を評価している。石川は、民衆を惑わす儒者の偽善者や戒律は「蔭」そのものと捉え、民衆の為であれば致し方ないとしている。この経験をきっかけに、石川は始皇帝を中心とした東洋史研究を進めていくことになっていく。この後、石川が支那研究に中国に訪れた時の思いを『ディナミック』で以下のように述べている¹²。

この黄土の国に来て、この后土礼拝の民衆を統治すべく、西方夷人たる禹の苦心したことはどんなであつたか。同じく西来の秦の始皇の地位がどんなに困難であつたか。周の文、武、周公等よつて樹てられた王道思想は、実にこの土民社会を統治するための便法に過ぎなかつた。孔子の儒教はその便法に宇宙的原理を基礎づけたものである

石川は中国という広大な土地を見て、始皇帝の后土礼拝の民衆の統治の困難さを感じた。一方で、周の文や武による王道思想の統治は土民社会を支配する便法に過ぎず、加えて儒教はその便法に則る形態をとることを考察した石川は、「私は盲目の目が開いたほどの喜びを感じ」¹³たと振り返っている。この考えに至ったことにより、石川は支那研究への関心が高まっていき、「中国旅行によって今までにかつて見なかつた大きな文化の存在を知り、ここに渡欧の初志を翻して、東洋史の研究に没頭しよう」と決心した。従って私は、『ディナミック』の続刊を断念せざるを得なかつた」¹⁴と振り返っており、以後は東洋文化史の研究に専念することになった。

帰国した石川は 1935（昭和 10）年に斎藤昌三の書物展望社から随想集である『不盡相望』を出版しさらに 1937（昭和 12）年には三浦精一、原田理一、原田道治等の共同研究の一部を『東洋古代文化史談』として同社から出版することになった。石川はこれらの東洋史研究に関する書物を発行したことにより、逸見斧吉に頼まれ青年達に東洋文化史の講演を行うことになった。このように、石川は講演や出版作業をしながら東洋文化史の研究を進め、1939（昭和 14）年に育成社から『東洋文化史百講』第 1 巻が発行された。その 3

年後の 1942（昭和 17）年に『東洋文化史百講』第 2 巻が発行された。他にも 1941（昭和 16）年には『時の自画像』という随想集を出版したが、この書籍については当局から発禁処分を命じられた。1944（昭和 19）年には『東洋文化史百講』第 3 巻を発行するなど戦時中も東洋文化史に関する研究は続けていった。

1945（昭和 20）年の 8 月 15 日、石川は疎開先であった山梨県で終戦の詔勅を聞いた。石川はその詔勅を聞き「長い民族的悪夢のうちに眠っていた真の日本精神が輝いたように感じた」¹⁵と振り返っている。石川は「無政府主義宣言」を起草し、1946（昭和 21）年に日本アナキスト連盟が発足した。この連盟の機関誌として『平民新聞』が発行された。この頃の石川の主な活動は講演が中心となった。

1949（昭和 24）年、石川は自宅で共同研究会を始めた。この研究会は月 1 回行われ、2 年後の 1951（昭和 26）年には大沢正道等の援助により自由の教育の実現を目指す近代学校に発展した。近代学校の命名の由来は「スペインのフランシスコ・フェレルの近代学校にちなん」¹⁶だものであった。その講師は、鶴見俊輔（1922-2015）やソオル社を興した唐沢隆三（1918-2011）らが務めることになった。石川の近代学校は、新しい自由な学問の研究と自由な考え方や学び方を追求することを目的としていた。ただし、この活動も 2 回の実施で終えることとなった。

その後、石川は『幻影の美学』、エリゼ・ルクリュの大著『地上論』の翻訳などの出版をするなど執筆活動が主なものとなった。しかし、急な容体の悪化などにより石川は 1956（昭和 31）年に没することとなった。

第 2 節 石川三四郎の東洋史研究への着目

本節では、石川が「土民生活」思想に基づいた無政府主義的な論考から、東洋史研究に関する論考へと移り変わっていった経緯を扱う。1934（昭和 9）年から、東洋史に関する論題が顕著にみられる。そのため、本節では 1930 年代に石川が個人紙として出版していた『ダイナミック』を用いて、1934（昭和 9）年を境に論題や論調にどのような変化があったか論じていきたい。

まず、『石川三四郎個人紙 ダイナミック』の復刻版を用いて、『ダイナミック』における石川著述記事を分類・整理していく¹⁷。対象となる記事の総数は、おおよそ 190 篇を超え、論考のみに絞っても 110 篇近くに達する。なお、『ダイナミック』には無署名の記事が

いくつか見られる。無署名の記事については、『石川三四郎著作集』第7巻掲載の「石川三四郎著作目録」を利用して、石川が執筆したものと確認している。

石川が『ディナミック』に寄稿した論考については、大沢正道と『石川三四郎著作集』第3巻がそれぞれ分類を示している。まず、大沢は社会哲学、歴史哲学、社会思想史、時事評論の四分類に大別している¹⁸。それぞれの特徴について、大沢は「社会哲学に関する諸論文は、その後、『無政府主義研究』『社会美学としての無政府主義』『近世土民哲学』の三つのパンフレットにまとめられ共学社から刊行された」¹⁹として、「歴史哲学に関するものは、『歴史哲学序論』にまとめられ、暁書院から刊行されている」²⁰と論じている。つづいて、社会思想史については、石川が好感を持っている人物を取り上げる傾向にあり、大沢は「エリゼ・ルクリュ、アン・リネルをまともに紹介したのはおそらく『ディナミック』が最初であろう」²¹と評価している。最後に時事評論について大沢は、「反戦、反軍国主義、反ボルシェヴィキ、反ファッショ、反日本主義が主要なテーマとして取り上げられている」²²とまとめている。

一方、『石川三四郎著作集』第3巻では、「アナキズム運動の前進に向けて書かれた論策」、「新しいアナキズム理論の構築を目指して執筆された諸篇」、「同じ時期の著作の政治、社会状況に対する持論」、「東洋史研究の成果の一端」の四つに分類されている²³。『石川三四郎著作集』第3巻においては、「アナキズム運動の前進に向けて書かれた論策」では石川の「土民生活」思想を中心に据えながら「不本意ながらその渦中に巻き込まれたいわゆるアナルコ・サンジカリズムと純正アナキズムとの対立抗争が背景にあるもの」²⁴としている。次の「新しいアナキズム理論の構築を目指して執筆された諸篇」は、大沢が示した分類の「社会哲学」と東洋史研究を除いた「歴史哲学」のそれぞれを足したものとほぼ同様な内容となっている。「同じ時期の著作の政治、社会状況に対する持論」では、大沢が示した分類の「時事評論」とほぼ同義である。最後の「東洋史研究の成果の一端」として、「その全容は『東洋古代文化史談』（昭和12年11月、書物展望社）、『東洋文化史百講』第1、2、3巻（昭和14年10月、17年7月、19年5月、育成社弘道閣）及び『近世東洋文化史』（昭和23年11月、大雅堂）に窺われる」²⁵としている。

大沢の研究ならびに『石川三四郎著作集』第3巻は、『ディナミック』の記事全体を分類していないため、未分類・未検討の記事も多い。以上の内容を踏まえて、二著の分類を参考に、筆者の観点を加味して再度分類の枠組みを検討すると、『ディナミック』誌上における石川の論考を、次の六つの項目とその他²⁶とすることができる。

- ①アナルコ・サンジカリズムと純正アナキズムとの対立抗争を背景にした「アナキズム運動」
- ②新しいアナキズム理論の構築を目指して執筆された「社会哲学」
- ③石川が好感を持ってその思想を紹介する「社会思想史」
- ④社会状況に対する持論を展開する「時事評論」
- ⑤古代東洋史研究を除いた「歴史哲学」
- ⑥東洋史研究の一端としての「東洋史研究」
- ⑦編集雑記や図書紹介など論考に類しない「その他」

本節では六分類のうち、「東洋史研究」を中心に扱ってまとめていく。『ダイナミック』における石川の「東洋史研究」に類する論考については、表を用いて整理すると、以下の表1の通りである。

表1. 『ダイナミック』における石川三四郎の「東洋史研究」に類する論考

記事名	巻	号	面	出版年	出版月	署名	補足
秦始皇論	6	52	1～2	1934	2		
始皇帝の事業	6	53	1～3	1934	3		
支那民族「后土」の礼拝	6	55	3	1934	5	無	著作集未収録
東洋豪傑気質	6	56	1～3	1934	6		著作集未収録

「東洋史研究」に類する論考は『ダイナミック』の晩年、特に中国から帰国してきた1934（昭和9）年1月以後から誌上に登場する。本稿では、上記の文献から石川の「古代東洋史研究」の特徴を論じていきたい。

石川の「東洋史研究」は、『史記』から秦の始皇帝を再評価するところに主眼を置いている。石川の『史記』についての評価は、「始皇のことを書いた歴史は、蓋し『史記』が最初のものであつたろう。そしてそれが本源をなして、後の様々な歴史が出来ているのであろう。かう考へると、始皇といふ人物は、今日まで遂に眞實を伝へられずに来たことが分る」²⁷と論じている。そして、石川は始皇帝を再評価することによって、「春秋時代から秦の統一までの歴史観も覆さなければならない。そうすると今度は、漢の統業に対する見

方も変はつてくる」²⁸として、当時の作られた歴史観ではなく、『史記』からみた歴史観で古代東洋史研究を進めていくとした。「秦始皇論」における石川の始皇帝の評価は、「堯舜以来の伝統的道德観念に染まない純粹無垢の自然人」²⁹と論じている。石川は始皇帝に着目して、「古代東洋史研究」に関する論考を発表するようになっていく。

次に石川は、「始皇帝の事業」で始皇帝の業績を論じている。石川は始皇帝の業績として、「政治的統一」、「社会的並びに経済的の革命」、「思想上の革命」と大きく分けて三点を紹介している。

まず、始皇帝の統治制度について、石川は「周の時代に発達した封建的地方分立制に変わるに中央集権的統一性に以てしたことである」³⁰と周の時代と統治方法が異なると紹介した。この始皇帝の統治について石川は「世界文化の中心を以て誇つてみた中国民族の中に政治的社会的経済的な革命を一気に投げ込んだのだから一般人に反感を買つたのは当然である」³¹とした。その一方で、石川は「当時の支那各国は政治も道徳も非常に乱れ、権力階級は互に権勢争奪に腐心し、国際間には盛んに強食弱肉が行はれ、各国の民衆は困憊の極みにありどうしても大英断が必要であった」³²と論じている。そして石川は、「漢は秦を倒して政権を握つたが、政治組織は殆んど全く秦のそれを踏襲したに過ぎない。単に漢のみならず爾後歴代の支那王朝は何れも大体それを模倣したのである」³³とし、始皇帝が近代的な組織的國家を形成したことを評価している。このように、石川は、始皇帝が中国史上において最大の規範を示したことを見直し、ただ暴君と評価されていることに対して異議を唱える論考となっている。

つづいて、「支那民族「后土」の礼拜」では、「后土」の思想についてワシントンのスミソニアン博物館の研究結果を紹介する形式で論じている。この論考で石川は、「然るに第六世の武帝になると頻りに地方を巡狩し、天災ある毎に詔を発して餓民の振救に努め、また同時に后土を祀つて豊作を祈つた」³⁴と武帝が「后土」を祀つたことを紹介している。つづけて、石川は「漢歴代中で最も治績を挙げ、領土をも最も拡大したる武帝が如何に民心の収攬に専心したかを察することが出来る。そして、これは又、支那の民衆が如何に強烈に后土の信仰を懐抱してゐたかといふことを証明するもの」³⁵であるとまとめている。石川は「漢の皇帝達は平民から起つたものである。彼らの人民の信仰に同情を持つた。というよりは寧ろ古い貴族的な形式的宗教に同情を持たなかつた」³⁶として、貴族的な形式的な宗教ではなく、民衆の中に本来あつた「后土」の信仰そのものを重要視している。

最後に、石川は「東洋豪傑気質」³⁷から当時の日本の問題を言及している。「東洋豪傑気質」において、石川は日本の社会がファシズムを歓迎する要因の一つとして日本社会に浸透している東洋豪傑気質を挙げている。この東洋豪傑気質とは、「自己の実現のために突進しないで、自己の適応のために苦心する。社会一般の動きにもろく屈従する。自分の身に合はなくも社会的に流行する勢力に適付する。自我を率直に一貫しようとはしないで、環境の勢力に応じて曲折鍛錬することを尊とする。自分が基準ではなくて社会の市価を標準とする」³⁸と説明している。

そもそも、この東洋豪傑気質の由来として石川は、漢の高祖劉邦は典型的な東洋豪傑と表現して「劉邦はたゞ民衆の心を取攬することだけをイデオロギイにした。それ故に劉邦の成功は自分を民衆の奴隷にしてから得たもの」³⁹であると論じている。そして、石川は「劉邦は英雄の典型とされるが始皇は暴君の標本とせられる。「東洋精神」の粗大さといふものが此時から決定されてゐる」⁴⁰として、「今日尚ほ奴隷的生活から脱却し得ない憐むべき東邦人類の状態を見ると、「東洋豪傑」は民衆自由の敵であるとしか思へない」⁴¹と日本社会も憐れむべき状態として捉えている。つまり、石川は「真の意味の東洋の自由、東洋の創造のために、吾等は先づ東洋豪傑気質を克服しなければならない」⁴²と論じているように、この東洋豪傑気質を克服しなければ、如何に社会運動を起こそうとも、真の意味での民衆運動にはなり得ないと結論付けている。石川の「東洋豪傑気質」を総括すると、第二次世界大戦以前の日本社会でファシストが歓迎され、民衆もそれに追従する要因について示した点に意義があろう。

『ダイナミック』における「アナキズム運動」、「東洋史研究」はどちらも時事的な問題であったファシストを取り上げていた。「アナキズム運動」で統治体制や当時の社会運動の問題点を指摘し、「時事評論」で当時の問題点を挙げ、これらをより深化発展したものが石川の「東洋史研究」となっていると言える。

また、石川は自身の「土民生活」思想を「東洋史研究」に投影して、高祖劉邦ではなく始皇帝を再評価するという作業を通して、この時期に浸透しつつあったファシズムへの危機感を示し、それに対抗しうる民衆の土着の精神の重要性を示そうとしていた。石川は「土民生活」思想において土着の精神を重要視していた故に、中国古来の「后土」という民間信仰に着目し、その内容を反映させた石川の『ダイナミック』における「東洋史研究」はその独自性があったのではないだろうか。

石川は『ディナミック』の誌上で、主題とする内容が「アナキズム運動」から「東洋史研究」へと移り変わろうとも、満州事変から台頭してきたファシズムを批判していた。それは、当時の日本社会がファシズムに傾倒していく要因を考察していったことによるものであった。石川の関心は東洋史に向けられたが、社会運動そのものは「土民生活」思想によるものであった。

第3節 石川三四郎の東洋史研究における東洋観

本節では、石川が執筆した「東洋文化の歴史的存在」を検討し、彼の東洋観を論じていく。石川の「東洋文化の歴史的存在」が発表された1938（昭和13）年は、「東亜新秩序」が掲げられ、ここで一つの争点となったのが東洋の存在である。石川の「東洋文化の歴史的存在」は、津田左右吉の『支那思想と日本』（1938年）を読んで執筆された書評のような性格を帯びたものである。津田の著作は石川と同様に反アジア主義を意図して執筆されている点に特徴がある。そこで、反アジア主義の立場である石川と津田の東洋史研究の論争点から、両者の東洋観を論じる。

石川は津田の『支那思想と日本』について、津田の意図には「全然賛成だ」⁴³として、「今日の所謂「東洋精神主義者」の議論の愚劣さはお話にならないこと、また同感だ」⁴⁴と共感の立場を示している。ここで石川が論じている「東洋精神主義者」とは何を指すのか。津田著作では「東洋文化とか東洋精神とかいふ語がいろいろの意味での宣伝によつて世間にひろめられたのは、かなり前からのことであり、近ごろは特にそれが甚しいやうである」⁴⁵と書かれており、東洋精神という言葉が広まっていることを示唆している。ここで石川や津田の言う「東洋精神主義」は、現在で言ういわゆる大アジア主義で「東亜新秩序」と結びついて拡大していったものと概ね重なっている。

アジア主義は「近代日本に現れた、アジアは文化的、政治的に一つであるとする心情、理念」⁴⁶であって「日本の存続強化のためという名目のもとに、他のアジアを侵略、圧迫する対外硬の思想へと機能転化した」⁴⁷ものである。津田が『支那思想と日本』を執筆した1938（昭和13）年は、日中戦争の最中であり、近衛文麿による第二次近衛声明いわゆる「東亜新秩序」が出されるなど、アジア主義が台頭してきた時代であった。石川は、1939（昭和14）年に「颯風」で「東亜新秩序」を次のように評した⁴⁸。

松井（石根）大将、大将の理想に於いては「飛躍日本」「国威宣揚」を喜ぶ前に、日本は先づ日本自らを支那に与へなければならぬ、それは日本建国の精神たる「八紘一宇」に日本自らを捧げることである。若しこれを為し得ぬならば、今度の事変は自然の颱風と些かも異らずして遂にゼロに帰すであらう。そして、やがて日本そのものも遂にゼロに帰するであらう

石川は、松井石根（1878-1948）の理想を颱風になぞらえ一種の災害とみなしている。石川は、松井の理想である「支那的支那、アジア的アジアの建設こそ今次事変の意義であり理想である」⁴⁹を「颱風そのものと見られる日本人自らが建設せねばならない」⁵⁰と指摘した。石川は、アジア主義者が引き起こす颱風災害から東洋の民衆を救うよう尽力する人物がいなければ、日本はすべて無に帰すことを示唆した。

以上のことから、石川と津田は反アジア主義的な立場を示していた。特に、石川が津田著作の共感した部分は以下の通りである⁵¹。

日本が世界性を有つてゐる現代の日本文化をますます高めていつて、ヨオロッパやアメリカのそれよりも優れたものにし・・・、さうして支那人が日本の文化よりもヨオロッパやアメリカの方が優れてゐると考へなくなつてこそ、支那に対して日本の文化の力を十分にはたらかせ、支那人をしてほんとうに日本を理解させ日本を尊敬させることができるのである

石川は、津田著作で論じられるように、日本の文化をより魅力的なものにし、その上で中国から尊敬されるべきであることに賛同した。「しかし津田氏の歴史的研究と、西洋・東洋対比の態度とには些か議論して見たい」⁵²として、石川は津田に対していくつかの議論点があった。石川は津田著作の概括として、「東洋の主要文化国である中国とインドと日本との間には文化的の共通点も緊紐も存在せず、各自が別々に独自の文化を育み持つてゐる、中国にもインド人にも「東洋」といふ文字は一文体化を意味するものではない」⁵³と記している。これに対し石川は、第一に「「東洋」という文字の意義」、第二に「「文化」の意義を定め」、第三に「歴史の時代を限定」させることが必要であると論じている⁵⁴。

第一の「東洋」という文字の意義については、概ね津田著作に異論はないとしている。津田著作において「東洋」とは、「日本で用ゐはじめられた稱呼であり、日本人にとつて

意味があると思われたものである」⁵⁵としている。そのため、津田によると「日本では今日一般に行はれてゐるが、實をいふとそのさすところの地域は極めて曖昧であり、人により場合によつて一様でないやうにさへ見える」⁵⁶として、歴史や地理的範囲において東洋の存在の曖昧性を指摘している。それに対し石川は、非学問的ではあるが自身の経験から次のように論じている⁵⁷。

吾々——インド人と支那人と日本人と——は西洋文物に対する共通の感覚を同じに感じないであらうか。また我々の持つ音楽や美術や思想に於て我々に共通の感覚があり、西洋人にその感覚が欠けてあると言ふことはできないか。私自身の経験から言へば、吾々——インド人・支那人・日本人——が西洋人とともに会して音楽なり、絵画なり、旧い小説なりを批評して見ると、吾々の間に明白に共感があつて、西洋人にそれが理解されない。これは極めて非学問的な説明であるが、この感情の基調の相違と共感こそ、西洋に対する東洋の存在を物語るものではあるまいか。

地理的にどこまでが東洋でどこからが西洋だといふ様なせんさくは此点からみては意味をなさない。

石川にとって「東洋」とは、津田と同じく地理的な点においては、意味をなさないと同様な論述をしている。一方で、石川は日本、中国、インドのいわゆる東洋と西洋の間には感情の基調の相違と共感という点で異なることを指摘している。この指摘は、石川が実際にヨーロッパへの亡命と中国の旅を通じた経験から来ている。石川は「私は西洋に生活して深く「東洋」を感じた一人である」⁵⁸と述べる通り、ヨーロッパへの亡命と中国旅行の、西洋と東洋の感覚の差を感じ、そこに東洋の存在を認識したと考えられる。つまり、石川は、津田と同じく反アジア主義的な立場であったが、津田とは異なり東洋の存在を認めている。

次に、石川が論点として挙げていた第二の文化の意義について論じていく。湯原は津田の文化観について「民族が辿った個別的な歴史展開を重視し、こうした個別的な文化的営為を超えた、普遍的文化といった着想には否定的」⁵⁹であったと論じている。この個別的な文化について湯原は、「東洋に存在している文化は、あくまでインド文化、中国文化、日本文化といった個別的な民族文化に過ぎず、これを超えた「東洋の文化」なるものは存在

し」⁶⁰ないものとして、津田著作が書かれていることを指摘した。その点については、石川も津田著作の個別的な文化観を抜粋している。以下は、石川が抜粋した津田の東洋文化否定論についての内容である⁶¹。

インドの仏教及び之に随伴するインド思想その他の文化要素が伝はり、日本に伝はり、日本はそれと同時に中国の諸思想及び諸文化を輸入して、中国時代さへ現出した。然るに支那は日本文化を学ばず、学ぼうとせず、インドは支那文化に影響さるゝことなく、インドと支那と日本との間には何等の共同生活も無く、各自の文化には共通性が無い、従て東洋文化は成立しない

以上のように、先行研究と同様に、石川も津田の文化観が個別的なものであったことは読み取っている。この津田の個別的な文化観の問題点について、石川は次のように論じている⁶²。

日本と支那との差異位のことは西洋諸国間にもあり、中国諸国内の南北・東西両地間にもあり、印度自国内にもあり、さうなると中国文化、インド文化、西洋文化というふような言葉も事実も成立しないことになりはしないか。

インドの如きは殊に北方と南方とが、人種も生活も国語も異なつてゐるし、北方にしてもインダス地方とガンヂス下流域とは大変な相違がある。

石川は津田の国の歴史を重視する個別的な文化では、文化そのものが存在しえない点を指摘している。それでは石川の考える文化とはどのようなものなのか。石川は文化について次のように示している⁶³。

文化とは人間が人類社会の幸福の為にこの自然界及び人類界に施すところの工作である。甚だ広漠たる定義であるが、かうした人間の工作は自然的、地理的環境の影響と交錯しつゝ周囲地方に伝播するものである。

それは水の又熱の低きに就くが如きもので、障礙物のない限り、決して一所に止まることなく周囲に伝播するものである。それは歴史の意識内に現はれないでも、何時の間にか流動して来ることが多いのである。日本の人力車が中国にもイ

ンドにも伝播し、日本の室内装飾法や絵画法やが何時の間にか西洋に伝はつて現に行はれてゐる様を見ても分かるやうに、文化の交流は歴史文献に現はれず、また社会的意識内に確認せられずに、以外に深く他に影響するものである

以上が石川の東洋史研究における文化観である。石川は津田の国家が辿った個別的な歴史展開によって成り立つ文化観とは異なり、文化とは国家の中でとどまるのではなく伝播していく点に着目している。ここに、二人の東洋文化史観の違いが見てとれるだろう。津田は歴史文献に忠実に、石川は歴史文献に囚われず、自身の経験も踏まえて考察している。家永三郎は、津田について「津田が結局書齋の人、「研究室」の人であったということも、また否定できない事実」⁶⁴であるとし、「津田の社会的関心は終始新聞・雑誌等の活字から得られる知識を素材としての関心にとどまり、研究室外の社会の現実の動きを肌で感じ取るに足りる体験は、終始皆無にちかかったと云つてよい」⁶⁵と論じている。家永が指摘しているように、津田は活字から読み取れる歴史文献を重視するあまり、石川の社会の動きを肌で感じ取って書かれた視点が欠けていたとも考えられる。

また、石川は津田の文化観の問題点も指摘している。津田の文化観では、文化そのものが成立し得ない点、日本とインドと中国の間にも人力車の例にあるように、文化の交流は行われていたことを指摘している。以下は、石川の論説による津田の文化観の問題点と歴史的に見た文化観の内容である⁶⁶。

併し中国が日本を受容れず、インドが中国を受入れなくとも、日本が中国もインドも受容れたならば、それらを総合した東洋文化といふものを日本人が主張することは余りに自然ではないか。

日本が中国文化を熱心に或は心酔的に——それは明治時代の欧化主義運動よりも幾倍かの熱心さを以て行はれた——輸入したことは言ふまでもない事実であるが、インド文化にしても、支那を経て、又南方の印度支那を経て同じやうに日本に入つて来た。従てまたインドや支那を経てバビロン・アツシリヤの文化も少しは受容られてゐる。

併し、かうした日本が中国やインドの文化を最も心酔的に輸入したのは主として中国の唐時代である。宋の時代にも中国文化の輸入は引続いて行はれたし、唐以前に於ても既に久しく中国との交通が行はれ、従て文化の移入も行はれたであ

ろうことは想像し得るが、日本人が中国模倣に最も心酔したのは唐時代だと言ひ得る

石川は津田と同じく反アジア主義的な立場をとっていたが、東洋文化においても見解が異なっている。特に、石川は日本人が東洋文化を主張する点には異論を示していない。石川は、歴史的に中国やインドの文化を輸入していた事実を認め、その点で東洋文化を主張するのは自然的と論じている。それに対し、津田も同じく日本が中国やインドの文化を輸入していたことは認めているが見解が異なっている。これは第二の論点だけではなく、第三の論点である「歴史の時代を限定」が関わってくる。石川は歴史の時代を限定して見ることに東洋文化の存在が見られるとして、以下の通りに論じている⁶⁷。

私は拙著『東洋文化史百講』中に言つてある。「東洋文化史といふ一系統の研究は厳密な意味に於ては、唐朝の文化を頂点として成立すべく、その以前は一種の準備工作であり、……今日以後に於ては『東洋』は文化的に『世界』の中に没入するのである。『西洋』が矢張りその一隅を占領すべきは勿論である。

かくして蒙古朝以後の東洋文化史は『東洋』と『世界』との中間過渡的現象に外ならないのである。」

かくの如く、歴史の時代を唐代に限定して見ると、中国を中心とせる東洋文化がたしかに渾然一体を成して存在したと言へる。それを継承した日本は、それに日本的特質を加味しつゝ矢張り東洋文化国として立派に認められはしないか。中国が日本を受入れず、インドが中国に負ふところなしと言ふ如きは問題にはならない。ギリシャもエジプトも西洋文化の基礎の大部分を作りつゝ自らは滅びたが、それを継承したフランスも英国も矢張り西洋文化国と言へるのである

以上のように、石川は歴史の時代を限定して見ると、唐の時代は東洋文化が実際に存在していたと論じている。石川の歴史観は、日本は唐朝の文化を継承して、その上で日本的特質を加えて発展してきた東洋文化国として見られる。それに対し、津田の歴史観は、確かに唐朝の皮相の文化の輸入を認め、「シナ文物の日本化は単にそれだけのことではなくして、それによつて日本の文化の新しく創造せられてることを意味する。さうしてそこに全体としての日本の民族生活の歴史的発展がある」⁶⁸として、唐朝の文化を日本化して受

容したとしている。石川は、「中国は唐代の文化の殆ど全部を喪失して、今日は全然別の世界に生活し、却て日本の方がそれを保持し発展してきたのである。そして中国が元・明・清の三時代を経て唐の文化を忘れてきた間に、日本はまた自らの独自の発展をなし」⁶⁹てきたと論じている。

石川と津田の東洋史研究の差は、石川は日本こそが唐の継承国であり、中国は唐とはまた異なる文化で発展をしてきたのに対し、津田は日本と中国は別々の国であり、民族であるからその文化の中で歴史的発展をしてきたとした点である。石川は国や民族に囚われない、大観的な視野で歴史や文化を捉えていたことが特徴といえるだろう。

石川の東洋文化史研究の特徴は、アジア主義が台頭している時局の中で彼独自の視点で東洋の発見をした点にある。石川は、西洋で生活して東洋を見つけ、中国旅行で東洋の文化を発見した経験に独自性が見られる。石川の東洋の存在の根拠として、第一に東洋と呼ばれる諸国との共感性を指摘し、第二に日本は中国やインドから伝播してきた文化を受容し、第三に日本が唐代の文化を継承し、そこに日本的特質を加味して来た点が挙げられる。同じ反アジア主義的な立場であった石川と津田との差は、東洋の存否で差が認められる。津田は東洋概念の脆弱性を指摘し東洋の存在を否定したのに対し、石川は東洋そのものの存在を認めている。ただし、石川の考える東洋は地理的、民族的なものではなく、あくまで共感性と文化の流動性という点で認めている。

第4節 小括

本章では、石川の東洋史研究・戦後社会運動期の生涯と東洋史研究に着目して論じてきた。この時期の石川の生涯は、1933（昭和 8）年に渡欧を目指した中継地点の中国旅行によって、『ディナミック』の廃刊を決め東洋史研究に専念することになった。東洋史研究に専念するようになった要因は、石川が泰山に登り、そこでの景色や碑石を見て、中国という広大な土地や始皇帝の后土礼拝の民衆の統治の困難さを感じとったためである。

その後、石川は渡欧を取りやめ、東洋史研究に専念するため、『ディナミック』の廃刊を決めた。『ディナミック』を廃刊した後は、逸見斧吉に頼まれ青年達に東洋文化史の公演を行うなど、東洋史研究に関する講演や論考が見られるようになった。

石川の東洋史研究についてまとめていく。雑誌『ディナミック』では秦の始皇帝の政策を再評価する東洋史観であった。石川は、秦の始皇帝の評価として、伝統的道德観念に染

まない純粹無垢の自然人としている。それに対し、高祖劉邦は典型的な東洋豪傑を兼ねた人物とした。石川にとって東洋豪傑気質とは、自我を持たず社会に適合する奴隷の精神であった。日本は、石川の「東洋文化の歴史的存在」で指摘されているように、中国の文化的影響を受けた国であり、東洋豪傑気質も継承した国であった。そのため、石川は、日本がファシズムを歓迎する要因の一つとして東洋豪傑気質を挙げ、その克服のためには、土に根差した精神を育む必要性を示した。

石川の東洋史研究は、同時期の東洋史研究家の津田と異なる手法、異なる見解を示していた。両者は、反アジア主義的な立場は共通していたが、東洋の存在については異なっていた。石川は、地理的、民族的なものではなく、文化の流動性や共感性という点で東洋の存在を認めている。石川の東洋観は文献研究にとどまらず、自身の経験である西洋や東洋での生活体験も踏まえて行われている。

第二次世界大戦終結後の石川は、「無政府主義宣言」を起草し、無政府主義活動を重点的に行うようになった。また、石川は 1951（昭和 26）年に近代学校を開校し、新しい自由な学問の研究と自由な考え方や学び方を追求すると示すように、学習者が研究し続ける姿勢を養うことを目的としていた。この目的は、石川の生涯を追って見えてくる、内省と研究を絶えず続けた、彼の思想が反映されたものとなっている。

第 2 章 東洋史研究・戦後社会運動期における石川三四郎の教育思想

本章では、東洋史研究・戦後社会運動期における石川三四郎の教育思想として、当時の石川の道徳観と無政府主義運動と教育観を論じる。第二次世界大戦前の国家政策として「滅私奉公」を掲げ、個人の尊厳を喪失させ、軍隊や戦争を掻き立てる愛国心が高揚していた。それに加えて、国家教育や新聞記者らによる扇動も見られていた。それに対し、石川の道徳観は、個人主義に重きを置き、道徳は個人の問題であると指摘していた。石川の教育観では「教育家の進むべき道」を中心に扱う。石川は、「教育は生活の一部」として、教育者の生活改革の重要性を指摘した。これは、戦後の無政府主義運動でも同様な指摘が見られる。戦後の無政府主義運動では「無政府主義宣言」における天皇の自然の人格による日本精神の復興と、生活を樹てる精神革命の意義を扱う。

第1節 東洋史研究・戦後社会運動期における石川三四郎の道德観

本節では、東洋史研究・戦後社会運動期として石川の道德観として、ファシズムが台頭し個人が失われていった時代を扱う。坂口は、「忠君愛国」の理論が一体化した後、「親への孝は、国父たる天皇への忠へと連動してゆき、国の為、陛下のため⁷⁰に身を鴻毛の軽ろしとする精神、行動は最大の孝行、家の名誉、郷土の名誉と称賛され、さらに、昭和期に入ると、従来の忠君愛国とならんで、「滅私奉公」と言う思想が国民全体に強制されてくる」⁷⁰と、「忠君愛国」の理論が統一化されたことにより個人の尊厳は徐々に認められなくなり、その上で「滅私奉公」の理論が国民全体を覆うようになってきて公に尽くす愛国心となった。この「滅私奉公」の精神を国家の政策として坂口は「戦争目的完遂という名の下で法文化され制度化され実施されたのが、昭和期の「国民精神総動員」「軍需工業動員法」「国家総動員法」等の一連の動き」⁷¹と論じている。このように昭和期に入り、「忠君愛国」の理論から個人の尊厳を喪失する「滅私奉公」の理論が国家の政策となっていった。

「滅私奉公」の理論では、昭和期の「国民精神総動員」を代表とする国家政策により個人の尊厳は失われ、公に尽くすような時期である。このように、国家は国民に対し公に尽くす政策を徐々に拡大していった点が見られる。

石川が愛国心を中心的に扱った論考としては「如何に祖国を愛すべきか」が挙げられる。この論考は、『ディナミック』第4巻第27号、1932（昭和7）年1月1日に発表されたものである。石川は当時の民衆の愛国心に基づく行動を次のように記している⁷²。

闘争に携はる人々は国家百年の長計といふやうな責任感よりは、寧ろ功名手柄の野心のために動かされる。今日の国家組織に於ては、個人の行動と国家の利害と直接明白に關聯しないからである。従てこれを声援する後分の国民も、それを自己の野心に利用しようとする。新聞記者は脳漿を搾つて扇動的文字を連ねて誇張の報道を掲げる。学校営業者はわれ先きにと男女青年を街頭におびき出して所謂愛国心のデモンストレーションを行ふ。小学校の東西わきまへない児童にまで指を切つて血判させて国軍の勝利を誓願させる。それが愛国心の発露として喜ばれる

石川は、闘争に携わる人々は野心のために動かされており、国民もその野心を利用しようとして行動するようになると分析している。石川はその例として、新聞記者は扇動的な誇張の報道をして、学校営業者は児童生徒を街頭にだし愛国心のデモンストレーションを行ったり、血判して国軍の勝利を誓願させ、愛国心の発露として喜ばせたりしていると記している。石川は、国民の野心を駆り立て、愛国心に結び付けられ利用されていることを指摘した。その野心によって成り立つ愛国心について、石川は「戦争と軍隊以外のことに愛国心を放散することは愛国心の経済にならない。けちな、みすぼらしい農民の問題などは、ほつといて、景気のよい方へ向かつて万歳！ 万歳！ と叫ぶのが「やまと魂の愛国心」であり、武士道の神髄である。愛国心は安売りするが、同情や同胞愛には至つて吝んぼなのがやまと民族の特徴だ」⁷³と論じている。石川は、当時の国民の愛国心を戦争や軍隊といったものに向け、同情や同胞愛などといった人間の感情といったものに目が向けられなくなり、愛国心が戦争を抑止するものではなくなっている点を指摘している。

また、愛国心の系譜にて「滅私奉公」の理論では個人の尊厳は失われている点が指摘されていたが、その点について石川は「紛失した個人主義」にて「今日の日本には忘れられてゐる。それは実に個人主義、自主精神の問題」⁷⁴と問題視して、その問題点を次のように論じている⁷⁵。

個人主義の完成せられない国には健全なる国家主義も、愛国心も、忠誠、友愛の精神も発達しやうがない。道徳は個人の問題である。道徳の責任は個人の自由があつて初めて起る問題である。奴隷は肉体的に服従はするが、精神的に責任を持たない

石川は、個人主義のない国では愛国心や友愛の精神が発達しないと論じている。つまり、石川は、新聞記者の報道や教育者によって行われるデモンストレーションの、軍隊や戦争を誓願させることは愛国心でないと指摘している。また、道徳の責任は個人の自由があつて初めて起きる問題として、精神的に責任を持たないのは奴隷であると石川は論じている。それは、石川の論ずるところの東洋豪傑気質的な精神が見られた。つまり、石川は個人主義がない国家では道徳は芽生えず、道徳の無い人間は、肉体的に服従し、精神的に責任がない奴隷であると指摘している。

このように、「滅私奉公」の理論における個人の尊厳を認めない時代の愛国心は、野心的で道徳の責任を持たない奴隷であると石川は論じている。一方で、石川は個人の自由を認め、健全なる愛国心を発達させるには個人の責任を持たせる道徳が必要であると論じている点に当時の特徴がみられる。石川の愛国心観は、友愛や同胞愛といったキリスト教的な博愛による反戦を貫いていた。

第2節 東洋史研究・戦後社会運動期における石川三四郎の教育観

本節では、石川の教育観を「教育家の進むべき道」を中心にして論じていく。この石川の論考は、満州事変が起きた1931（昭和6）年に『教育時論』で発表されたものである。石川は、「教育は生活の一部である。生活に感激を持たない人、そして機械として奴隷として生活する人の教育に力に生命もない」として、当時の教育を批判している。石川は、教育とは生活の一部として、生活が教育を形作るものであるとしている。しかし、当時の無機的で機械的な生活には問題があった。石川は「教育と社会との有機的な結合は全然無くなつてゐる。その教育の精神も、その教育の組織も現在の一般民衆の実生活と離れ離れになつてゐる」⁷⁶と論じている。そのため、石川は、「社会全体が真の更生作用を成就しない限り、教育のみが救はれるといふことは出来ない」⁷⁷として、教育を立て直すには社会の更生が必要不可欠だと示した。石川は、当時の教育の問題点として、次のように論じている⁷⁸。

官許或は官設の教育が教へるところと全然反対である、所謂「思想善導」や「危険思想の予防」が効果を齎らさない所以がこゝにある。民衆の社会生活と有機的に結合してゐない学校教育、機械的教育が、殆ど無力無価値だといふ惨憺たる事実を暴露するのは之がためである

石川は、当時の官許が教える道徳教育は、「議会の乱闘事件とか大臣や議員の収賄裁判事件とか、いふ様な現象も深甚な強力な実物教育を行ふ」⁷⁹として、効果がないと指摘している。石川は、民衆と社会生活が結合していない学校教育は、「機械化された教育」となると述べている。石川はこの傾向は明治末期から見られるとして、次のように論じている⁸⁰。

明治末期から今日に至る日本の社会精神界に生起した最大最重の病床は、個人主義若くは人格主義の喪失、これであつた。そしてこうした風潮をつくつたのは虚栄的国家主義に依存した官学の結果なのである。(敢えて官立学校のみではなく、それに倣う私学もまた同断である) 官学の教えるものは階級思想であり、昇給主義であり、そして、それは人格の抹殺となり、個人責任の忘却となり、この社会には、一個の病菌を投じたゞけでも之に抵抗する力がなくなつたのである。勿論今日の日本社会の腐敗、墮落には多くの原因があるにしても、人格の抹殺と個人の忘却とが、その主要な原因であつたのだ

石川は日露戦争前の「忠君愛国」を掲げた教育によって、個人や人格は喪失していった。個人と人格を喪失する学校教育は、権力社会に追随する虚栄的国家主義に依存し、階級思想や昇給思想が教えられていった。石川は、明治末期からの「忠君愛国」の道德観が、個人や人格を喪失する教育となつたと論じている。

そこで、石川は教育者に対して重要な二つの仕事を挙げている。その二つの仕事とは、一つ目は自分たちの生活を改革すること、二つ目は現代社会の生活様式と新しい道德を確立することの二つを挙げた。石川は、一つ目の自分たちの生活を改革することとは、次のように説明している⁸¹。

第一に教育者が自分達の生活を改革する。併し、今日の多くの教育者は国家の雇人であつて、自分達の生活といふものを持たない。彼等の生活は全然小さな機械に過ぎない。その機械が機械的に施す教育に生命の無いことは勿論だ。これは国家の雇人でない私設の教育者として同じである。官公立学校の教育者ほど機械にはならないまでも、その代わり資本主義、商業主義の奴隷にならなければ自分の生活とを維持することは出来ない。その上に文部省の無意味な監督に服従せなければならぬ。今日の社会に力づよく萌え起ちつゝある新しい生命に対して、殆ど何の助けにもならないのは当然だ。

されば今日の総ての教育者は、先づ第一に自分達の生活から改革すべきだ。併しながら教育も社会生活の一要素に過ぎない。教育者が自身の生活を改めるには矢張り社会そのものゝ改革に沿はなければならない

石川は、教育者が抱える問題として、自分たちの生活を持っていない点を挙げている。そのため、石川は機械的な社会生活を改革し、それに沿って教育者自身の生活、も改革する必要があると指摘している。石川は、社会改革に尽力した人として「ペスタロッチでも、フレーベルでも、その力を注いだ直接の仕事は児童教育にあつたが、併し其根本理想は人類の解放にあつた」⁸²と説明している。石川は、「真教育は、時代を意識し、生活に感激を有する、覚醒者に依つて行はれなければならない」⁸³と述べた。その理由を、石川は以下のように論じている⁸⁴。

私が生活改造を以て教育者の先づなすべき第一必用事だといふ理由は、今の世に於ては教育は——真の教育は——一種の戦ひでなければならない。機械の様な生活の中から脱けだして自分自身の生活を建てようとすれば勢ひ酷烈な戦ひが醸されやう。その戦ひこそ、教場に於ける授業そのものよりも、どれほど多大な効果を被教育者に齎らすか知れない。ペスタロッチでも、フレーベルでも、その後世に与へた感化力の偉大な所以の大半は、これを彼等の熾烈なる理想とその為の闘争とに帰せねばなるまい

石川にとって真の教育とは、自分自身との闘いであり、「内省」である。それは、教壇での学び以上のものを、被教育者にもたすかもしれない。機械のような生活を捨て、自分自身の生活を自治するには、喪失した個人と人格を取り戻すに他ならない。この生活改革を果たすことが教育者にまず求められることであつた。

次に、二つ目の現代社会の生活様式と新しい道徳を確立することである。その原則は「生命ある教育は自由の精神によつて勃興するが、強権的統一精神に支配されると没落する」⁸⁵である。石川は「如何なる高尚な理想を以て行はれる教育でも、それが強権によつて行はれる時は、教育者も被教育者も遂に一種の機械となつて、教育そのものを行詰まらすからである。今日の日本の教育が没落に瀕してゐるのはそのためである」⁸⁶と論じて、日本は没落の原則に則っていると示唆している。石川は、教育のあり方として、次のように論じている⁸⁷。

教育といふことは、生命の自発力に援助を与へ、それを培かひ肥料を供給する

事である筈だ。吾々の思想、吾々の経験、吾々の知識は被教育者の自己想像の補助資糧又は肥料として供へらるべきである。吾々の理想又は教義は、教育の直接目的とならずして、其手段又は材料となるべきである。被教育者を理想又は主義のための材料、手段にしてはならない

石川にとって教育とは、教義や理想をそのまま教授するものではなく、教育者の思想や経験、知識を教材として被教育者の本性を発揮させることである。そのため、当時の国家教育による国体維持のために、「忠君愛国」や「質実剛健」「滅私奉公」の教義を教え込むあり方は、教育ではない。石川は、「教育は、全社会と有機的に結合し、社会一般の生活意識にぴたりと一致する。教育者は自分のために生活し、自分の全人格を以て被教育者に対し、そして、その生活とその教授と社会一般の感化とは有機的に美しいシンフォニイを構成して被教育者の知情意を啓発養育することが出来る」⁸⁸と論じている。石川は、教育者の全人格をもって教育するために、人格と社会の有機的関係を体験する必要がある。

石川の論によれば、有機的関係の社会を構築するには、個人的自治と社会的協同を成さねばならない。石川は、社会的協同を成すために、まず自我の分裂を解消し「人格の独立」を求めた。石川は、自我の分裂の解消について、次のように論じている⁸⁹。

先づ第一に、自我の分裂を無くすることが必要である。人類の精神史上に於ける自我の分裂は、同時に社会と個人との分裂を意味し、また人類と自然との背離を意味するが故に、われわれの自我の統一は、また同時に社会と個人、自然と人間の合一と同にまで到らねば、達成されないものである。ところが、本来、自然の子であるわれわれは、一たび自分の向きを変へれば、忽ちにして自然と一味になり、社会と血の連帯を感ずるに至る。そして自我の真の姿を見ることができる。その自我の必然を回復すると同時に、われわれは自我の自由を味得する。

石川は、自我の分裂を解消するためには、社会と個人、自然と人間の合一することが重要であると指摘した。それは、自然と社会と個人が一体化した生活に他ならない。その生活こそ石川が提唱した「土民生活」思想であった。その自治生活は、「自然に還れ」を実践した個人が、徹底的な「内省」によって「人格の独立」を果たし、その「人格の独立」をもって社会的協同となる。この生活を自治することこそが教育者に求められるものであ

った。

最後に、石川は「汝自身を知れ」といふソクラテスの言は、われわれを欺かないのである⁹⁰と論じている。石川は、「汝自身を知れ」を「われわれの具体的な自性もしくは本能的な性質を正視せよと教えたのであろう⁹¹と解釈している。石川の「汝自身を知れ」とは、深く「内省」し「蔭」と欲望を見極め、その先にある本能的な性質である「人格の独立」を正視することであった。この「人格の独立」によって形成される、自由で協同的な自治生活にこそ「真の生活」が宿り、「真の教育」が施せるのである。

第3節 石川三四郎の無政府主義運動

本節では、石川の戦後無政府主義運動を扱っていく。石川は戦後の無政府主義運動の初志として「無政府主義宣言」を執筆している。この資料は未発表のままであったが、執筆年は1946（昭和21）年と推測されている。石川は、終戦後の日本を見て「この信念は終戦後半歳の間、指導階級と称する徒輩の言動を観察すると共に強くなった。彼等はこの未曾有の国難に際して、ただ自分達の利福、党派欲、閥欲を満足せしめんがために、喧号叫喚して国民をますます混乱の深淵に追い込もう⁹²とする活動者を目の当たりにした。そこで石川は、「この有様を見過し得なくなった私は全国に散在している同志諸君を初め、全日本の国民、特に青年に訴えようと考え「無政府主義宣言」を起草した⁹³と記述している。この『自叙伝』の記述からも執筆年は1946（昭和21）年であると推測できる。また、石川は戦後社会になっても民衆を惑わす政治家や官僚らの姿に嘆いていた。石川は、日本国民に対して政治家や官僚らの惑わす言葉に耳を傾けず、まず和合が必要であると述べた。以下はその内容である⁹⁴。

我等は先づ日本全民衆の和合を求め。故に戦争犯罪者の糾弾は之を強力なるマッカーサー司令部に全任して、我等は全日本民族が冷静に帰り、正直にして且つ心からの和合を取り戻さんことを要求する。我等は他人を責める以前に先づ自ら省みる。我等は自ら故国の熱血身に溢れるを感じながら省みて甚だ力の足らざるを歎くものである

石川は、戦争が起きた原因を他人に責めを負わせるのではなく、自らにも原因があったと省みることを求めた。しかし、石川は 1952（昭和 27）年にサンフランシスコ講和条約が締結される際に、「わたしは屢々聞く、われわれは軍閥にあざむかれたのだ、と。或はその様な点もあつたであろう。しかし民族こぞつて、或は反省の力なく、それに引ずられた罪は、万人ともに免れ得ないところである。今度の事件は、日本民族そのものゝ罪悪である。民族共同の犯罪である」⁹⁵と述べている。石川は、日本人の自己を省みる力、「内省」をする精神が欠けていると感じていた。石川は、大正時代以降の歴史において日本精神を発揮したことはない指摘している。以下は、その内容である⁹⁶。

今日に至るまで、日本人は遂に自ら日本そのものを忘却したる如くであつた。曾て第一次欧州大戦直後にデモクラシーの運動があり、ボルシェヴィキの運動が起り、次でファツシヨの流行となり、ナチの模倣となり、全体主義と称し、統制経済と称し、唱ふところ、行ふところ、一として外来借用物でないものは無かつた。甚だしきは民族主義、国粹主義と称するものまでが、その精神に於て西欧の借用物に過ぎなかつた。我等は曰ふ、満州事変以来、日本軍閥の採り来りたる行動は本来の日本精神に基くものでなく、また真の西洋精神に則るものでも無くて、実に西洋かぶれの帝国主義に外ならぬと。然り今回の敗北の如きも実にその西洋かぶれの敗北なのである

石川は、第一次世界大戦以降の日本において西洋の思想を受容するだけであり、それは西洋精神に則るものでもなく、西洋を「模倣」したただの西洋かぶれだったと論じている。しかし、石川は「僅かに一閃、真の日本精神が輝いたのは、彼の大詔渙発を中心とする終戦の一齣における日本そのものの姿に於いて」⁹⁷と述べている。石川は「私のやうな無政府主義者が天皇を擁護するということは随分おかしい」⁹⁸と思われるが、「天皇制とか憲法とかというものは別の問題」⁹⁹と述べている。石川は、天皇を擁護する考えに至った理由として以下のように示している¹⁰⁰。

我等の憲法は自然の人情美を発揚し拡充するを以て最高の原則とする。我等の天則は人心の奥秘より自ら湧出する人道の大義を實踐躬行するを以て第一義とす

る。我が清純高雅なる今生天皇を我等無政府主義者が敢て擁護せんとするは、実にこの天則、自然の憲法に基くものである。「我が身は如何に成り行くとも、此の上多くの人民を犠牲にするに忍びず」とて、自ら屈辱を忍んで無条件降伏を断行せられたる、愛と和とに勇敢なりし天皇を擁護するは、是れ日本民族の責務にして又名誉ではないか。満州事変以来、軍閥の跋扈は実に横暴を極むるに至つた。併し乍らその禍害の根ざすところは遠く明治時代にあり、今生天皇は実に四十年来わが日本の政治機構中に培養せられ累積せられし悪弊凶禍を一身に負担せられたのである。我等この天皇を擁護するは人道の大義に基く当然の責務である

天皇を擁護する理由として石川は、昭和天皇が明治時代から累積していた悪弊をその一身に背負う人格に、「自然の人格」を見たためと述べている。石川は、天皇の人格に日本の精神、「土民」の精神を感じ、同胞を擁護するために動いたとも読み取れる。石川はこの天皇の人格を以って和合し、自治していくことが日本精神の復興であると考えた。しかし、この石川の考えは「数十名の同志が相会したが、私の意見はついに同志達の反対に遭ひました。殊に若い人達の非常な反対に遭つて」¹⁰¹受け入れられることはなかった。この後の石川は講演などを通じて無政府主義の伝道と啓蒙に努めることになった。特に、精神の変革を重んじた運動を展開していく。1948（昭和23）年、石川は姫路での座談会にて、高等学生から日本で無政府主義者が育たない理由を問われ、次のように返答している¹⁰²。

今日の日本の国家組織も教育制度も、いずれもピラミッド型を以て成立し出世主義を精神とする。それが共産主義のソビエト国家組織と一致しているので、高等学校に進学するという精神と、共産主義になるという意向とはぴったり一致するのです。然るにこのピラミッド型の組織を根底から覆えして、平等の網状組織を樹てようとするアナキズムに来るには、先ず精神的革命が必要です。ここに、アナキズムの伝播に困難があるのです。平民はそのままにしてアナキストになれるが、高等インテリは、先ず自分の生活精神から革命してかからねばアナキズムに進入し得ないという難関があるのです。従ってアナキズム革新運動の最大障害となるものは、この高等知識階層に多いのです

石川は、国家組織の形態がピラミッド型の出世精神が問題であると回答している。石川

は、高等学校に進学する形態とソ連の国家形態が類似しているために、高学歴知識層に共産主義者が多いとしている。石川の理想社会はピラミッド型の社会ではなく、平等の網状組織による協同自治社会であった。石川は、協同自治社会の構築には、何よりも精神革命が必要で、特に高学歴知識層にこそ必要であると論じている。石川の考える無政府主義の精神革命とは次の通りである¹⁰³。

その時代と、その環境と、その為人とに従つて、その生活態度は自ら異なるであらう。けれども、各人の自由意思を自由発意を基本とするアナーキズムとその革新には、第一歩から各自の解放が必要条件となる。(中略) アナーキストの解放の力学は簡単である。自分のユトピアに生きることである。もっと具体的に言えば、自分の憧れを育て、自分の独力を見きわめて、それを実現すべく、生活を樹てればよろしいのである。そのために同行の友が欲しくなる。そのために社会生活上の闘いも起る。時代と環境とに従つて、その活動部面も自ら定まつて来る。その上、社会は常に流動する。アナーキストの解放の力学も、それに従つて変わつて来る

石川は、個人が自分の憧れを育て、自力を育て、生活を樹てることが無政府主義の精神革命であると論じている。無政府主義の精神革命は生活に基づくため、時代や環境、各々の活動によって異なるものである。そのため、個人が自分の足で踏み出すことが重要になると論じている。石川は、無政府主義の精神革命において人格が重要であるとしている。その内容は、以下の通りである¹⁰⁴。

人間は誰でも、生れながらにして各自に授かつた性格を持っている。それを人格という。その人格を通して、外界を感覚し、外界に表現する。この人格こそ実に個人の独立と価値とを確立するもので、これが無ければアナーキズムは成立しない。(この点がマルクスの社会主義と全然対蹠的なものである) 従つて、アナーキズムの革命は、各自をして各自の人格を解放し、育成し、実現せしめようとするものであるべきだ。この人格の前には、法律も強権も政府もない筈だ

石川は、生まれながらにして人格を持ち、この人格を通して外界とのやり取りをする。人格は個人の独立と価値を確立するため、個人の人格の解放と育成、そして憧れを実現しようとする能動的な力が必要になる。「人格の独立」を果たした人格は、法律や強権や政府から離れても、その力を表現できるとした。石川の無政府主義運動は、「人格の独立」を目指した、伝道と啓蒙を重んじた教育的な社会運動であると評価できる。

第4節 小括

本章では、東洋史研究期・戦後社会運動期の石川の教育思想として、戦中の道徳観教育観、その、戦後の無政府主義運動を扱ってきた。東洋史研究期・戦後社会運動期の石川は、個人の尊厳を徐々に喪失した社会と道徳観に対して、個人の人格と生活を重んじる社会運動を展開した。

戦前の道徳観は、軍国主義が台頭し、「滅私奉公」を謳い、「国民精神総動員」を代表とする国家政策により個人の尊厳は失われ、扇動的で強制的な愛国心であった。その愛国心は、当時の教育者や新聞記者などによって駆り立てられ、より強化されていった。それに対し、石川にとって道徳は個人の問題であると定義し、個人主義がない国で道徳は芽生えないとしている。石川は、個人主義を認めない国では奴隷を育てると指摘している。石川は、道徳の精神を育むには個人主義が必要なもので、自由を享受させ責任を持たせる必要があると論じている。またこの隷属的な国民気質は、東洋豪傑気質に通ずるところがあった。

石川の教育観では、教育は生活の一部として、生活改革の側面を重視したものであった。石川は、「忠君愛国」を掲げた教育によって、個人や人格は喪失していき、権力社会に追従する階級思想や昇給思想が見られるようになったと論じている。それが戦後の無政府主義運動に結びついている。また、石川は、教育者に対して生活改革と新しい道徳観を想像することを求めた。どちらも、個人が生活を自治することを重要視した。

生活改革では喪失した自我を取り戻すために、自分自身との闘いである「内省」を求めた。この真の教育である「内省」によって、「人格の独立」を果たし、生活を自治することが出来るようになる。

新しい道徳では、強権的統一精神ではなく、生命ある自由の精神によって教育することであった。そのためにも、自然と社会と人間が合一した精神で教育する必要があった。教

育者はその精神をもって、自身の思想や経験、知識を教材とし、知情意をもって被教育者を啓発するものであった。

石川の戦後の無政府主義運動では、「無政府主義宣言」を執筆し、天皇の自然の人格による、日本精神の復興を考えたものであった。石川は、昭和天皇が明治時代から累積していた悪弊をその一身に背負う人格に、「土民」の精神性を感じていた。石川は、この天皇の「土民」の精神性に合一した社会によって、ピラミッド型の社会の打破を目指していた。しかし、この考えは無政府主義者たちに受け入れられることはなかった。その後も、石川はピラミッド型社会による出世精神を改革するために、個人が自分の憧れを育て、自力を育て、生活を樹てる精神革命を目指した。その精神革命は、生活に基づくため、時代や環境、各々の活動によって異なり、また個人の能動的な動きが求められた。石川の無政府主義運動は、個人の精神革命を果たすため、「人格の独立」を果たすため伝道と啓蒙を重んじた教育的な社会運動であった。

注

-
- ¹ 石川三四郎「東洋の研究」(『ディナミック』第6巻第53号、1934年3月、3面)『石川三四郎個人紙ディナミック』黒色戦線社、1974年。
 - ² 石川三四郎『自叙伝』(理論社、1956年)『石川三四郎著作集』第8巻、青土社、1977年、492頁。
 - ³ 同上書。
 - ⁴ 詳しくは、第1部第1章第2節で論じている。
 - ⁵ 前掲書『自叙伝』495頁。
 - ⁶ 同上書、504頁。
 - ⁷ 同上書。
 - ⁸ 同上書、505頁。
 - ⁹ 同上書、517頁。
 - ¹⁰ 同上書。
 - ¹¹ 同上書、517-518頁。なお、引用文中の傍点は著者によるもの。
 - ¹² 石川三四郎「回顧五年」(『ディナミック』第6巻第59号、1934年10月、2面)前掲書『石川三四郎個人紙 ディナミック』。
 - ¹³ 同上。
 - ¹⁴ 前掲書『自叙伝』520頁。

- ¹⁵ 同上書、544 頁。
- ¹⁶ 同上書、557 頁。
- ¹⁷ 他に、『石川三四郎著作集』第 3 巻にも『ダイナミック』誌より採録している。しかし解題において「この時期は石川の著作活動の最も充実した時代にあたり、従って著作量も最も多いが、紙数の都合でかなり厳選、割愛せざるをえなかった」と述べるように、未収録となっているものが多い。なお「解題」において「この時期」というのは、石川が千歳村に土着し、東洋史研究に没頭するまでの、1927（昭和 2）年～1941（昭和 16）年までを指している。また、『石川三四郎著作集』第 6 巻には石川が執筆した編集雑記に当たる『千歳村信』や書評に関するものを一部収録している。（引用は「解題」『石川三四郎著作集』第 3 巻、青土社、1978 年、491 頁）。
- ¹⁸ 大沢正道「解説 『ダイナミック』と石川三四郎」前掲書『石川三四郎個人紙ダイナミック』3 頁。
- ¹⁹ 同上。
- ²⁰ 同上。
- ²¹ 同上。
- ²² 同上。
- ²³ 前掲「解題」491 頁。
- ²⁴ 同上。
- ²⁵ 同上。なお、引用文中の括弧内は引用元によるものである。
- ²⁶ 石川は『ダイナミック』において論考以外にも、編集雑記に類する「千歳村信」や中国旅行を報告した「旅信」、図書紹介や書評なども書いている。これらを本稿では「その他」としている。
- ²⁷ 石川三四郎「秦始皇論」（『ダイナミック』第 6 巻第 52 号、1934 年 2 月、1 面）前掲書『石川三四郎個人紙 ダイナミック』。
- ²⁸ 同上。
- ²⁹ 同上。
- ³⁰ 石川三四郎「始皇帝の事業」（『ダイナミック』第 6 巻第 53 号、1934 年 3 月、1 面）同上書。
- ³¹ 同上。
- ³² 同上。
- ³³ 同上。
- ³⁴ 石川三四郎「支那民族「后土」の礼拝」（『ダイナミック』第 6 巻第 55 号、1934 年 5 月、3 面）同上書。なお、引用文中のママは筆者によるものである。
- ³⁵ 同上。
- ³⁶ 同上。
- ³⁷ 本稿では、史料としての東洋豪傑気質を指す場合は鍵括弧を付すこととする。鍵括弧が付していないものは、石川の概念としての東洋豪傑気質を指すこととする。

- 38 石川三四郎「東洋豪傑気質」(『ダイナミック』第6巻第56号、1934年6月、2-3面) 前掲書『石川三四郎個人紙 ダイナミック』。
- 39 同上、2面。
- 40 同上。
- 41 同上、3面。
- 42 同上。
- 43 石川三四郎「東洋文化の歴史的存在」(『日本学藝新聞』第80号、1940年) 前掲書『石川三四郎著作集』第3巻、484頁。
- 44 同上。
- 45 津田左右吉『シナ思想と日本』岩波書店、1978年(1938年初版)、105頁。
- 46 国史大辞典編集委員会『国史大辞典』第1巻、吉川弘文館、1980年、154頁。
- 47 同上書。
- 48 石川三四郎「颱風」(『日本学藝新聞』第68号、1939年)『石川三四郎著作集』第4巻、青土社、1978年、35頁。なお、引用文中の括弧は筆者によるものである。
- 49 同上。
- 50 同上。
- 51 前掲「東洋文化の歴史的存在」484頁。なお、引用文中の三点リーダーは引用元によるものである。
- 52 同上。
- 53 同上、485頁。
- 54 同上。
- 55 前掲書『シナ思想と日本』116-117頁。
- 56 同上書、107頁。
- 57 前掲「東洋文化の歴史的存在」485頁。
- 58 同上。
- 59 湯原静雄「「東洋」概念をいかに受け止めるか—小野清一郎と津田左右吉の東洋観」『国体文化』第1164号、2021年、29頁。
- 60 同上。
- 61 前掲「東洋文化の歴史的存在」487頁。
- 62 同上、486頁。なお、引用文中のママは筆者によるものである。
- 63 同上、486-487頁。
- 64 家永三郎『津田左右吉の思想的研究』岩波書店、1972年、62頁。
- 65 同上書。
- 66 前掲「東洋文化の歴史的存在」487-488頁。
- 67 同上、488-489頁。
- 68 前掲書『シナ思想と日本』156頁。
- 69 前掲「東洋文化の歴史的存在」489頁。

- 70 坂口茂『近代日本の愛国思想教育』（上巻）、株式会社ストーク、1999年、2頁。
- 71 同上。
- 72 石川三四郎「如何に祖国を愛すべきか」（『ダイナミック』第3巻第26号、1931年）前掲書『石川三四郎著作集』第3巻、345-346頁。
- 73 同上、346頁。
- 74 石川三四郎「紛失された個人主義」（『政界往来』第7巻第9号、1936年）同上書、421頁。
- 75 同上、416頁。
- 76 石川三四郎「教育家の進むべき道」（『教育時論』第1645号、1931年）前掲書『石川三四郎著作集』第3巻、328頁。
- 77 同上。
- 78 同上、329頁。
- 79 同上。
- 80 石川三四郎「傘の雪」（『山陽堂商報』第12号、1952年）前掲書『石川三四郎著作集』第4巻、432頁。なお、引用文中の括弧内は引用元によるものである。
- 81 前掲「教育家の進むべき道」330-331頁。
- 82 同上、331頁。
- 83 同上、332頁。
- 84 同上。
- 85 同上、333頁。
- 86 同上、334頁。
- 87 同上。
- 88 同上、335頁。
- 89 石川三四郎「自由と必然」（『虚無思想研究』4、1951年）前掲書『石川三四郎著作集』第4巻、301頁。
- 90 同上。
- 91 石川三四郎「私の精神史」（思想の科学研究会編『私の哲学』中央公論社、1950年）前掲書『石川三四郎著作集』第4巻、295頁。
- 92 前掲書『自叙伝』544頁。
- 93 同上書。
- 94 石川三四郎「無政府主義宣言」（未発表、1946年と推察される）前掲書『石川三四郎著作集』第4巻、74頁。
- 95 石川三四郎「平和の秋」（『山陽堂商報』第9号、1951年）同上書、424頁。
- 96 前掲「無政府主義宣言」76頁。
- 97 同上。
- 98 石川三四郎「付 座談会「平和はどうして出来るか」（抜萃）」（『PAX』第1巻第1号、1948年）前掲書『石川三四郎著作集』第4巻、82頁。

⁹⁹ 同上。

¹⁰⁰ 前掲「無政府主義宣言」75頁。

¹⁰¹ 前掲「付 座談会「平和はどうして出来るか」(抜萃)」82頁。

¹⁰² 前掲書『自叙伝』550頁。

¹⁰³ 石川三四郎「解放の力学」(『平民新聞』第8号、1952年)前掲書『石川三四郎著作集』第4巻、182頁。なお、引用文中の中略は筆者によるものである。

¹⁰⁴ 同上、183頁。なお、引用文中の括弧内は引用元によるものである。

終章

第1節 本研究の結論

石川の教育思想の核として「人格の独立」が挙げられる。石川は社会と個人の間を考察し、民主主義の社会を構築する上では、社会的協同と個人的自治の重要性を考えていた。石川は特に、個人的自治を重んじ、その個人的自治を果たすためには「人格の独立」が必要であると論じていた。石川の「人格の独立」は、論考によって「自我の自治」や「自性」という表現が変わることもあったが、その内容は個人的自治を果たすという点で一貫していた。石川は、「人格の独立」を果たすために、個人の「内省」を求めた。そして、個人の「内省」をするために、個人が生活を自治し、自由と道徳的責任を享受し自覚する必要があると石川は考えた。石川がこの考えに至った経緯はその生涯からも見られる。以下からキリスト教社会主義期、「土民生活」思想期、東洋史研究・戦後社会運動期の三期で明らかになった内容をまとめる。

キリスト教社会主義期の石川は、1906（明治39）年の「堺兄に与えて政党を論ず」の発表以前は、キリスト教社会主義運動に傾倒する論考が目立っていた。キリスト教社会主義運動に傾倒していた頃の石川は、幸徳秋水や堺利彦、木下尚江らとともに活動をし、社会運動の基礎や社会問題を追及する姿勢を養い、海老名弾正との関りからキリスト教的精神である博愛平等の精神を培った。また、幼少期の「埼玉硫酸ふりかけ事件」によって、暴力を持って訴える運動に対しては否定的な立場をとるようになった。このように、キリスト教社会主義運動に傾倒していた頃から、石川の社会運動は非暴力と全人類的な博愛平等的な視座に立っていた。

しかし、上記の論考「堺兄に与えて政党を論ず」の発表後はキリスト教社会主義運動からは距離をとるようになり、石川は社会運動において、自らを省みず扇動的な社会運動ではなく、民衆の生活に根差した啓蒙的な活動が必要であると論じた。その背景の一つには、田中正造の社会運動の視察が挙げられる。石川は田中の社会運動を視察した中で、田中の共同体による協同的な自治活動と自然による生活に根差した社会運動に感銘を受けた。それは1908（明治41）年に執筆した『虚無の靈光』にも反映されることになった。石川は『虚無の靈光』によって、「人格の独立」の必要性に気付き個人が生活を自治することと社会的協同の重要性について指摘した。ただし、キリスト教社会主義期の石川は自身の生活と社会運動が一致していない問題を克服できず、「土民生活」思想期のエドワード・カーペンターやルクリュ家との交流によって克服することになる。

キリスト教社会主義期に石川が教育について論じた「小学教師に告ぐ」では、当時の教師の職務が、権力社会に組み込まれる教育になっている点を見抜き、教師、児童たちにとって本来行われるべき教育ではない点を言及していた。これらを踏まえて、キリスト教社会主義期の石川の教育思想として、教育は国家主義に組み込むための「機械化された教育」ではなく、子供という個人に教育を施すことの重要性を示した。ただし、「小学教師に告ぐ」を発表した時点の石川は、「人格の独立」という視点に至って論じてはいない。しかし、石川は教育者が本来の行わなければいけない職務を把握していない実態、つまり、教育者自身が教育の自治を行っていない点を指摘していたとも読み取れる。石川の「小学教師に告ぐ」は、「人格の独立」の思想の兆しを示した論考であったとも言える。

「土民生活」思想期の石川は、ヨーロッパ・アフリカ亡命によるエドワード・カーペンターやルクリュ家との交流と第一次世界大戦を現地で体験が思想形成に大きな影響を与えた。石川はカーペンターとの交流によってデモクラシーの語源を知り、そこから「土民生活」思想を示した。また、石川はカーペンターの自我の分裂状態では真の民主主義は成立しない点に共感し、民主主義の成立には自我と自然の統一を果たす必要性を認識した。ルクリュ家との交流によって、エリゼ・ルクリュの歴史学や地理学の影響を受けて、東洋史研究に取り掛かる一つの要因となったと言えよう。最後に第一次世界大戦を通じて、石川は機械的な社会生活をもたらす物質的文明社会の醜悪さを実感した。石川の「土民生活」思想はキリスト教社会主義期で培った非暴力、博愛平等の精神、啓蒙的な社会運動に「土民」という個人の生活の自治を徹底した個人主義の要素が加わった。

「土民生活」思想に基づき石川は、「土」に根差した実生活に適した教育を施し、「人格の独立」を芽生えさせることの重要性を説いた。この時期の石川は、日本人の気質として、西洋の「模倣」をしているのであって、「摂取」に至っていないと指摘している。石川は、「模倣」の一例として、「自由教育」による西洋風の教授法を挙げた。石川は自主の精神の差によって「模倣」と「摂取」は異なるとして、「模倣」するものを耕し、自身の生活を耕すことによって「摂取」になる。石川は、自主の批判をするためには、「内省」によって「人格の独立」を果たすことを求めた。

石川は、「土民生活」思想に基づいて、「自然」による教育を重視している。石川によると、自然は教育者であるとともに無尽蔵の図書館として、自然の持つ芸術的な側面を教育者にして、芸術家にして智識の包蔵者と論じている。石川の自然観は、『エミール』の著者であるルソーの「自然に還れ」の理念を用いて論じている。ルソーの自然観を基に、石

川は自然による教育によって、個人の自治が成り立つと論じている。そのため、大正期に行われていた教育について石川は、「自由教育」の声によって建てられた有力な私立小学校を「教育術上の試験所」と指摘した。このような教育は、石川によれば教育方法の「真似事」の教育であるとして、権力構造に組み込む「機械化された教育」であるとしている。

東洋史研究・戦後社会運動期の石川は、古代中国から続く「后土」と東洋豪傑気質の精神性によって、ファシズムの精神性が支配する原因を考察していった。この東洋豪傑気質によって、日本の国民は奴隷気質となって、自我が社会や自然と合一していない点を論じてきた。このような社会において、石川は「人格の独立」は果たせず、自我が社会に埋没している点を感じとっていった。そのため、石川は自然と自我を合一し、その自我によって新たに社会を構築していくことを求めていった。

戦後、日本国憲法により個人の権利が認められるようになったが、石川は一部の知識層が作り上げたピラミッド型の社会構造や精神性は変わっていないとした。このような社会構造は日本社会や共産主義社会に見られた。それに対し、石川は生まれながら持つ人格によって自由とそこから生じる責任を自ら享受するために、自分の生活を自治することの重要性を示した。この個人主義を重視した論考と社会運動が石川の特徴であった。

東洋史研究・戦後社会運動期の石川は、「機械化された教育」から脱却することを望んだ。石川は、「忠君愛国」を掲げた教育によって、個人や人格は喪失していき、権力社会に追随する階級思想や昇給主義が見られるようになったと論じた。そのために、石川は個人の尊厳を徐々に喪失した社会と道徳観に対して、個人の人格と生活を重んじる社会運動を展開した。石川の教育観では、教育は生活の一部として、生活改革の側面を重視したものであった。石川の道徳観や教育観はどちらも個人が生活を自治することを重要視した。このことから、石川は「人格の独立」を果たすため伝道と啓蒙を重んじた教育的な社会運動家であった。このような「人格の独立」を果たすために個人の人格の解放と育成、そして憧れを実現しようとする能動的な力は、政府の権力構造や社会主義、共産主義が指導する権力闘争では培われないものであった。

本稿では、問題の所在で示した石川の生涯を三期に分けて論じたことにより、キリスト教社会主義の理念を「土民生活」思想へと深化させていき、「人格の独立」を果たすための個人主義を重視した社会運動を展開したことが明かになった。加えて、社会における個人のあり方、それに対する教育のあり方を模索し考え、「共学社」や「近代学校」など社会教育的な実践的な活動も行い、「人格の独立」を果たすことを追求した人物であった。

また、キリスト教社会主義者や無政府主義者の枠組みに囚われずに論じた結果、石川の社会運動の特徴として、指導者となって人々を扇動するのではなく、教育者となって「人格の独立」を芽生えさせるために被教育者とともに伝道と生活をし、人情を啓発する性質を持っていたことが明かになった。

石川の社会教育的な実践活動や社会運動は理想的な社会像を追求していたため、その社会実践や社会運動は成功せず、未完で現実的な社会運動としては成功し得ない側面をもっていた。しかし、石川は二度の世界大戦が起こる混迷した社会で個人の人格が社会に埋没していき機械化していく社会生活に対して、「人格の独立」という徹底的な個人的自治に根差した社会生活の重要性を、石川自身の生活態度や社会的実践で示そうとしたことが評価できる。

第2節 今後の研究課題

本研究において、石川は個人主義に基づき「人格の独立」を重視した社会運動を展開していたことを明らかにした。しかし、本研究では石川の詳細な社会運動の実態や教育者の自治の詳細な実践方法や理論、教育思想史上の位置づけが不十分である。その点を踏まえると今後の課題としては、主に次の五点が挙げられる。

一点目は、小田義隆の「明治社会主義者石川三四郎と教師のしごと」で石川の論考が教員組合の源流に位置付けられるという点である。石川は、「小学教師に告ぐ」や「教育家の進むべき道」で教師の待遇やその生活改善を示したものであった。また、キリスト教社会主義期で扱った平民社での活動からも同様なことが言える。石川の論考は、教師の待遇や生活改善のために、教師たちが協同で自治するための組織である、教員組合を作ること示唆していた。石川の教員組合の組織論を押さえることにより、教員の自治がより明瞭になると考える。

二点目は、西山拓の研究で論じられている社会教育的側面である。西山は、石川の社会運動や「共学社」、「近代学校」、その他自主的に主催していた研究会から、社会教育的側面が見られると指摘している。特に、「共学社」の実践や「近代学校」の授業の実態がより具体的に判明すれば、実践としての教育思想がより射程が広まると考えられる。

三点目は、石川の思想形成において影響が見られるカーペンターとエリゼの原典や活動の調査不足である。石川にとってカーペンターとエリゼの思想的影響は大きいことは先行

研究や本研究でも言及されている。カーペンターの活動としてはフェビアン協会の設立者の一人であり、石川の社会運動の理念に類似している部分も見られる。しかし、この両者は日本での研究が進んでいるとは言えない。石川への思想影響を論じるにあたって両者の原典に当たる必要性が考えられる。

四点目は、今日の教育学において教育思想家として評価されているルソーやペスタロッチ、フレーベルの影響である。石川は、その三者を無政府主義者として評価しており、教育者としての評価の側面はあまり見られない。しかし、今日の教育学の視点から見ると、石川の論考でそれらの思想の一部を受容していたことが窺える。石川がどのように思想を受容し、どの程度反映されたかを探る必要性がある。加えて、石川の論考のいくつかにはルソーの引用が見られた。どの著作の引用か、または当時のルソーの著作の翻訳なのか特定できていない。ルソーの原典と当時の日本でのルソーの評価を調査することも求められる。

五点目は、石川と教育雑誌の『教育時論』との関係である。石川は主に昭和初期にかけて『教育時論』へ論文の投稿を行っている。石川がどのような経緯で『教育時論』に論考を投稿したのか、その経緯は十分に明らかにされていない。また、石川が『教育時論』に投稿した論考の幾つかは『石川三四郎著作集』に収録されておらず、未だ検討されていない論文も存在する。そこで、石川と『教育時論』との関係や未検討の論考を検討することにより、石川の教育思想史研究をより補完できると考えられる。

参考資料

石川三四郎年譜

年	石川三四郎の経歴（著作・論稿）
1876年 0歳	○5月23日、埼玉県児玉郡山王堂村(現本庄市)の父・五十嵐九十朗・母シゲの三男として生まれる。
1880年 4歳	○6月22日、石川半三郎・ヨネ夫婦の養子となる。
1882年 6歳	○4月、本庄小学校初等科に入学。
1884年 8歳	○5月、高崎線が開通。 ○父が本庄町停車場前に運送店を開くが、間もなく失敗。 ○この頃、父は漢学の家庭教師を雇い「四書五経」「三字経」「大統歌」などを習わす。
1890年 14歳	○3月、本庄小学校高等科卒業。 ○9月、父に伴われて上京、茂木虎次郎・粕谷義三宅の玄関番となる。 ○山本芳翠の画塾「生巧館」に2,3ヶ月ほど通う。
1891年 15歳	○4月、「自由新聞」社が分裂し、茂木虎次郎や粕谷義三が地方に去ったため、福田友作宅に寄宿する。 ○12月24日、埼玉硫酸(ふりかけ)事件。
1892年 16歳	○国語伝習所で落合直文、小中村義象、関根正直らの講義を受ける。
1894年 18歳	○帝国教育会内の文学会で、漢学者根本通名や倫理学者の元良勇次郎の講義を聴く。 ○哲学館(後の東洋大学)に入学。
1895年 19歳	○哲学館を中退。
1896年 20歳	○4月6日、群馬県室田高等小学校の代用教員となる。 ○8月、赤痢に感染し、しばらくして帰郷。 ○9月15日、父が赤痢にかかり、62歳で死亡。
1897年 21歳	○春、中学校教員の検定試験を受けるが失敗。 ○9月3日、室田小学校教員を辞職、郷里へもどる。 ○間もなく上京し、再び一家を構えた福田家に寄宿した。
1898年 22歳	○9月、東京法学院(後の中央大学)に入学。 ○同時に、神田錦町の英語専修学校に通学。

1899年 23歳	<ul style="list-style-type: none"> ○実業家の石川家の養子となり、石川家の長女と婚約を結ぶ。 ○5月頃、福田家に泊まることが多く、同家に寄留中の19歳の娘と情交を結ぶ。7月、娘は妊娠する。
1900年 24歳	<ul style="list-style-type: none"> ○1月頃、本郷教会で英子とともに海老名弾正の説教を聞き、キリスト教に近づく。 ○5月、福田家に居留していた娘との間に幸子が生まれる。 ○夏、実業家の石川家の養子縁組解消。
1901年 25歳	<ul style="list-style-type: none"> ○7月、東京法学院を卒業。 ○本郷教会で海老名弾正から洗礼をうける。 ○下宿先の娘、清水澄子(仮名・本名茂子)を愛すが、弁護士試験など次々と失敗、結婚を諦める。
1902年 26歳	<ul style="list-style-type: none"> ○本郷教会の青年組織「明道会」に属して信仰生活開始。 ○11月、堺利彦、弁護士花井卓蔵の紹介で萬朝報社に入社。 ○理想団の事務員も担当し、木下尚江らを知る。
1903年 27歳	<ul style="list-style-type: none"> ○1月、萬朝報社の理想団演説会で初めて演壇に立つ。 ○10月12日、幸徳秋水・堺利彦・内村鑑三が「退社の辞」を発表、後を追って三四郎も退社し、平民新聞社に入社。 ○11月15日、週刊「平民新聞」創刊。
1904年 28歳	<ul style="list-style-type: none"> ○9月、小田原海岸で10日間ほど療養。 ○11月、「小学教師に告ぐ」は当局に告発される。 ○「小学教師に告ぐ」他2編が新聞紙条例違反で告発され、西川光次郎、幸徳秋水が入獄する。
1905年 29歳	<ul style="list-style-type: none"> ○1月、週刊『平民新聞』廃刊。日本平民新聞発行届を受理されず。 ○2月、『直言』創刊。 ○7月、本郷教会で海老名弾正の説教「社会主義と基督教」をめぐる論争。 ○9月、『直言』廃刊。 ○10月、平民社が解散。 ○11月、木下にすすめられ、キリスト教社会主義の雑誌『新紀元』創刊。 ○平民社解散。
1906年 30歳	<ul style="list-style-type: none"> ○3月、逸見斧吉とともに初めて栃木県谷中村を訪れ、田中正造らに会い、深く感激し、仮堤防上で一場の演説を試みる。 ○10月、幸徳、堺より日刊『平民新聞』の創立人となることを懇請され、協議の末これを受諾。 ○11月、『新紀元』廃刊。
1907年 31歳	<ul style="list-style-type: none"> ○1月、『世界婦人』創刊。 ○1月、日刊『平民新聞』創刊。 ○2月、社会党第2回大会の評議会の幹事に選出。

	<ul style="list-style-type: none"> ○2月、社会党結社禁止。 ○4月、日刊『平民新聞』廃刊。 ○4月、市ヶ谷の東京監獄に下獄。 ○5月、巣鴨監獄に移される。
1908年 32歳	<ul style="list-style-type: none"> ○5月、出獄後、福田英子宅に住む。 ○9月、「世界婦人」社より出版せんとした、『虚無の靈光』が、製本中に没収され発禁となる。
1909年 33歳	<ul style="list-style-type: none"> ○2月、獄中で書いた「西洋社会運動史」の清書が完成するが、出版できず。 ○7月、「世界婦人」が廃刊。「墓場」他2編が新聞紙法違反で告発され、三三四郎は禁錮4ヶ月、罰金60円に処される。
1910年 34歳	<ul style="list-style-type: none"> ○2月、母・シゲが75歳で死去。 ○3月、『世界婦人』の筆禍事件で東京監獄へ下獄。 ○4月、千葉監獄に移される。5月末、大逆事件の検挙。 ○7月28日、出獄後、大逆事件の容疑者として調べられる。
1911年 35歳	<ul style="list-style-type: none"> ○夏、気管支炎の療養のため、福田一家と別れて、横浜の根岸海岸へ転居。 ○12月、徳富蘆花が『哲人カーペンター』の序文を書く。
1912年 36歳	<ul style="list-style-type: none"> ○2月、『哲人カーペンター』を東雲堂書店より刊行。 ○12月、「西洋社会運動史」を東雲堂より自費出版する。
1913年 37歳	<ul style="list-style-type: none"> ○1月、『西洋社会運動史』が発禁となる。 ○3月、ベルギー領事ゴーベル夫人の付添いで横浜港を出る。 ○4月、ベルギーのブリュッセル着。 ○初夏、ポール・ルクリュと対面。 ○11月、イギリスでカーペンターに会う。
1914年 38歳	<ul style="list-style-type: none"> ○ブリュッセルのポール・ルクリュ家に寄宿。 ○6月、ブリュッセル市で人権連盟に大会が開かれ、大会に参加。 ○7月、第一次世界大戦勃発。 ○7月、チェルケゾフと共にブリュッセルで反戦大会に出席。 ○8月、ドイツ軍ブリュッセルに入る。
1915年 39歳	<ul style="list-style-type: none"> ○1月24日、ブリュッセルを脱出し、オランダを渡りイギリスへ渡る。 ○後にフランスへ渡り、リアンクールに住み、そこで島崎藤村としばしば交流する。
1916年 40歳	<ul style="list-style-type: none"> ○2月、社会主義者十六人の声明に参加。 ○6月ドルドーニュ県ドム町へ移転、「晴耕雨読」生活を始める。
1917年 41歳	<ul style="list-style-type: none"> ○春、椎名其二がルクリュ家を尋ね、石川三四郎と初めて会う。 ○ポール・ルクリュがパリから持参した柿の苗木を石川三四郎・椎名其二で植える。

	○片山潜よりロシア革命に参加するように勧められるが応じず。
1919年 43歳	○11月、ルクリュ夫人の病氣療養のため、夫妻と共にカザフスタンに着き、モロッコに向かう。 ○12月、カサブランカ入港、自動車でモロッコ市へ。 ○以後6ヶ月間滞在し、古事記神話の研究を始める。
1920年 44歳	○6月、モロッコより飛行機でフランスに向かう。 ○7月、ドンムのルクリュ家を出発、パリを経てブリュッセルに滞在。 ○8月、カーペンター家を訪問し、4泊する。 ○9月、テムズ川のアルバート・ドックから「因幡丸」に乗船。 ○10月、神戸に到着。 ○この頃、「読売」婦人記者・望月百合子がインタビューのため訪問。 ○11月、東大新人会の席で座談会。 ○11月、同じく東大三十二番教室で「土民生活」と題して講演。
1921年 45歳	○石本恵吉の依頼で本を輸出するため、ヨーロッパに行くことになる。 ○11月、神戸発の「箱根丸」で、望月百合子を伴い、再びヨーロッパに行く。徳川義親らも同船し、会話する。
1922年 46歳	○3月頃、ブリュッセルで図書運搬の作業を続ける。 ○7月末、日本人クラブのサロンでポール・ルクリュと記念写真、裏面に「お別れ!」と記す。 ○フランス船で帰国、滝野川区中里三九二の借家に住む。
1923年 47歳	○春、徳川義親に家庭教師として招かれ、絹子・春子・百合子の三姉妹にフランス語を教え始める。 ○この頃、椎名其二宅で週二回ずつの研究会を始める。吉江孤雁・東大や早大の学生など二十名ほど参加。 ○夏、北海道の徳川農場に行く。 ○9月16日、滝野川署に検束される。約1週間後に、徳川義親が石川を救出。
1924年 48歳	○阿部磯雄、山崎今朝彌とともに日本フェビアン協会を結成。 ○日本フェビアン協会が『社会主義研究』を出す。 ○この頃、アナーキストによるテロが横行し始める。
1925年 49歳	○3月、望月百合子がヨーロッパより帰国。 ○秋、執筆完了した『西洋社会運動史・復刻版』の原稿を盗まれる。 ○12月、日本フェビアン協会解散。
1926年 50歳	○7月頃、下中弥三郎や中西伊之助らと共に農民自治会を結成、第1回講習会を上高井戸の大西悟一宅で開く。 ○7月、1週間、京橋の印刷連合会本部で関東自由連合による夏期講習があり、岩佐朔太郎・下中弥三郎らと共に講師となる。

	<ul style="list-style-type: none"> ○12月、神田キリスト教青年会館で「土の権威」と題して講演。 ○12月、大阪印刷工組合南支部の座談会に招かれる。 ○東京府多摩郡千歳村八幡山に新居の普請を始める。
1927年 51歳	<ul style="list-style-type: none"> ○1月、長野県北御巻村の農民自治会・冬期講習会に招かれ、「農民自治の理論と実際」と題して講演。 ○多摩郡千歳村に転居。 ○9月、神戸から「上海丸」で密かに上海校外の江湾労働大学へ講義に行く。約3ヶ月後に帰宅。
1928年 52歳	<ul style="list-style-type: none"> ○1月、関東労組自連で「弁証法的唯物論の批評」と題して講演。 ○2月、関東労組自連で「弁証法の心理学・倫理的批評」と題して講演。 ○6月、「自由聯合」に、「西洋社会運動史・普及版」の紹介文が載る。
1929年 53歳	<ul style="list-style-type: none"> ○7月、カーペンターの死にちなんだ一文を雑誌『矛盾』に寄稿。 ○7月、ジャック・ルクリュが北京より来日、新宿中村屋で石川三四郎を中心に歓迎会を開く。 ○7月、千歳村・共学社(不尽書房とも呼ぶ)の家族構成は、石川三四郎・望月百合子・奥谷松治・森熊ふじ子の4人と雌犬テロ及びヤギー頭。 ○11月、『ダイナミック』創刊、約千部印刷。
1930年 54歳	<ul style="list-style-type: none"> ○3月、「ダイナミック」エリゼ・ルクリュ生誕百周年記念号を発行。 ○6月、「ダイナミック」カーペンター特集号。 ○9月、ジャック・ルクリュが再び来日。
1931年 55歳	<ul style="list-style-type: none"> ○3月15日、エリゼ・ルクリュ百年祭を記念し、某喫茶店「ルクリュ会」を開く。 ○これ以降、新宿の古川時雄宅などで時々「ルクリュ研究会」をもつ、中西悟堂、小川末明なども参加。 ○7月頃、望月百合子との分裂状態が進行する。
1932年 56歳	<ul style="list-style-type: none"> ○1月、社会経済研究会を結成。 ○3月、徳川春子が学習院卒業、家庭教師をやめる。 ○9月、『ダイナミック』第35号発禁。 ○12月、同志・小池英三が翌年夏まで、同居する。
1933年 57歳	<ul style="list-style-type: none"> ○3月、ポール・ルクリュたびたび渡欧の勧め来る。 ○4月頃、望月百合子は四谷区新宿一丁目で古川時雄と同居、仏英塾を開く。 ○8月、望月百合子ら、古本屋「フランス書房」を開く。 ○10月、3度目の渡欧を志し、正午に神戸港を出港。 ○10月、北京に着く。 ○11月、ジャック・ルクリュらたちと泰山に登る。 ○11月頃、新津志寿(後の石川永子)が望月百合子のもとへ来る。

1934年 58歳	<p>○1月、在中国3ヶ月で渡欧を断念し、渡欧を断念し、東洋研究史を志して、帰国。</p> <p>○2月、新津志津が千歳村で家事を手伝うようになる。</p> <p>○7月、望月百合子の仏英塾が千駄ヶ谷駅前に転居し、フランス書房は閉鎖。</p> <p>○10月、「ダイナミック」を第59号で廃刊。</p>
1935年 59歳	<p>○東洋史研究に専念。</p> <p>○『自由聯合新聞』が第98号で廃刊となる。</p> <p>○6月、中山益子との結婚を希望、石川永子に使いを頼む。</p>
1938年 62歳	<p>○5月、望月百合子が満州へ渡る。</p>
1941年 65歳	<p>○3月、旧友、褚民誼の招待で上海・南京へ。</p> <p>○10月、田中正造翁百年祭に逸見菊枝と共に出席。</p> <p>○12月、『古事記神話の新研究・改訂増補』12版を印刷中、軍部の圧迫で中止させられる。</p>
1944年 68歳	<p>○8月、野菜類の配給を辞退し自給自足の生活を続ける。</p>
1945年 69歳	<p>○3月30日、石川永子の実家である山梨県西八代郡上野村・新津友造宅へ疎開する。</p> <p>○6月、島田宗三へ「戦争は間もなく終ろう。反省すべき好機。」と書く。</p> <p>○8月、敗戦の詔勅を聞き、翌日上京。</p> <p>○11月、「地上論」出版の件で徳川家の恒久平和研究所を訪問。</p>
1946年 70歳	<p>○5月、東京・芝・赤十字社講堂で開かれた日本アナーキスト連盟の結成大会で演説、連盟顧問となる。</p> <p>○8月、甲府市で開かれた夏季大学へ。「日本ルネッサンスとデモクラシー」のテーマで6時間講義。</p> <p>○9月、有楽町・保険協会講堂で「大杉栄追悼・無政府主義講演会」が開かれ、岩佐朔太郎・近藤憲二・岡本潤・秋山清らと共に講師となり、「民主主義と無政府主義」と題して講演。</p> <p>○10月、上田中学校で「日本のルネッサンス」について語る。</p> <p>○10月、唐沢降三の郷里小県郡滋野村で青年団・婦人会合同の集会、「民主主義と無政府主義」と題し講演。</p> <p>○11月、化佐久郡御牧原の公民館で座談会。</p> <p>○11月、滋野村で教師の会「近世社会思想の2大潮流」と題し講演。</p> <p>○11月、北佐久郡南大井村の寺院で「無政府主義について」語る。</p>
1947年 71歳	<p>○2月、神田駿台文化学院で開かれた「クロボトキン記念・無政府思想講演会」で講演。</p>

	<p>○5月、神田共立講堂で開かれた「無政府主義思想講座」で「無政府主義の歴史的発展」と題して講演。</p> <p>○6月、東大で同校アナーキズム研究会の講演会が開かれ「西洋社会主義思想史」と題して講演。</p> <p>○8月、文化学院講堂で「八・一五記念講演会」開かれ、岩佐朔太郎らと共に講演。</p> <p>○8月、靖国神社で神主たちに座談会。</p>
1948年 72歳	<p>○1月、山梨・長野方面の講談旅行を行う。</p> <p>○7月、山陽方面の公演旅行に出発。</p> <p>○11月、『わが非戦論史』の序文を執筆。</p>
1949年 73歳	<p>○1月、長野方面へ旅行、各地で講演会や座談会を開く。</p> <p>○3月より山梨方面を講演旅行、甲府青年文化会で座談会。</p> <p>○10月、岡山市で開かれたアナーキスト連盟の全国委員会に参加のために出発。</p>
1950年 74歳	<p>○1月、徳川義親家に年始に行き、徳川春子らと語る。</p> <p>○5月、京都で開かれた日本アナーキスト連盟の第5回大会が終わり、立命館大学で講演。</p>
1951年 75歳	<p>○9月、自宅の研究会、次回より「近代学校」へ発展的解散。</p> <p>○10月、新宿・中村屋で「近代学校」へ講師団の打合せ、大江満雄・佐藤豊・唐沢柳三・村松正俊・大門一樹・鶴見俊輔・大沢正道・石川三四郎の8名が出席。</p> <p>○10月、「近代学校」開校式、10数名出席。</p> <p>○10月、第2回「近代学校」を開く、この回で中断。</p> <p>○10月、「幻影の美学」を書き上げ「地上論」の翻訳完成をめざし書齋にこもる。</p>
1953年 77歳	<p>○3月頃から、『自叙伝』の口述を始める。</p>
1956年 80歳	<p>○6月9日、自叙伝の口述を終えて序文を完成。</p> <p>○11月28日、死去。</p>
備考、 死去後	<p>○11月29日、出棺、遺言により葬儀は行わない。</p> <p>○12月7日、四谷の主婦会館で「石川三四郎をしのぶ会」が開かれる。</p>

参考文献・引用文献一覧

石川三四郎の著作

石川三四郎『石川三四郎著作集』第1巻、青土社、1978年

石川三四郎『石川三四郎著作集』第2巻、青土社、1978年

石川三四郎『石川三四郎著作集』第3巻、青土社、1978年

石川三四郎『石川三四郎著作集』第4巻、青土社、1978年

石川三四郎『石川三四郎著作集』第5巻、青土社、1978年

石川三四郎『石川三四郎著作集』第6巻、青土社、1978年

石川三四郎『石川三四郎著作集』第7巻、青土社、1979年

石川三四郎『石川三四郎著作集』第8巻、青土社、1977年

石川三四郎『石川三四郎選集』第1巻、黒色戦線社、1976年

石川三四郎『石川三四郎選集』第2巻、黒色戦線社、1980年

石川三四郎『石川三四郎選集』第3巻、黒色戦線社、1980年

石川三四郎『石川三四郎選集』第4巻、黒色戦線社、1984年

石川三四郎『石川三四郎選集』第5巻、黒色戦線社、1983年

石川三四郎『石川三四郎選集』第6巻、黒色戦線社、1978年

石川三四郎『石川三四郎選集』第7巻、黒色戦線社、1977年

石川三四郎『石川三四郎個人紙ダイナミック』黒色戦線社、1974年

石川三四郎『近世東洋文化史』大雅堂、1948年

石川三四郎『時の自画像』育成社弘道閣、1940年

石川三四郎『東洋文化史百講・上』育成社弘道閣、1939年

石川三四郎『東洋文化史百講』第2巻、育成社弘道閣、1942年

石川三四郎『東洋文化史百講』第3巻、育成社弘道閣、1944年

石川三四郎『近世土民哲学』共学社、1933年

石川三四郎『放浪八年記』三徳社、1922年

エリゼ・ルクリュ・石川三四郎『アナキスト地上論 エリゼ・ルクリュの思想と生涯』書肆心水、2013年

参考文献

- 秋山清「解説」石川三四郎『虚無の靈光』三一書房、1970年、303-315頁
- 赤尾利弘「石川三四郎の見た滞仏中の藤村」、『亜細亜大学教養部紀要』第37号、1988年、39-53頁
- 有山輝雄「理想団の研究〔I〕」『桃山学院大学社会学論集』第13巻1号、1979年、37-64頁
- 飯島勤「自学の系譜（1）石川三四郎の教育志操：『小学校教師に告ぐ』をめぐって」『社会臨床雑誌』第20巻第1号、2012年、59-82頁
- 家永三郎『津田左右吉の思想的研究』岩波書店、1972年
- 石戸谷哲夫『日本教員史研究』講談社、1967年
- 板垣哲夫「昭和期における石川三四郎の思想」『山形大学紀要 人文科学』第11巻第4号、1989年、403-450頁
- 板垣哲夫「大正期における石川三四郎の思想」『山形大学史学論集』第8号、1988年、1-42頁
- 板垣哲夫『『新紀元』廃刊（明治39年11月）後における石川三四郎の思想』『日本歴史』通号470号、1987年、72-96頁
- 板垣哲夫「石川三四郎（一八七六～一九五六）における思想的出発」『歴史』通号68、1987年、94-114頁
- 板垣哲夫「石川三四郎『虚無の靈光』の思想」『日本歴史』通号466、1987年、90-93頁
- 稲田敦子「先駆的共生思想の日英比較研究：エドワード・カーペンターを中心に」『2010-2012年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書』、2013年
- 稲田敦子「近代文明批判における『陰』認識：石川三四郎とエドワード・カーペンターの思想的接点をめぐって」『聖学院大学論叢』第24巻第2号、2012年、55-64頁
- 稲田敦子『共生思想の先駆的系譜 石川三四郎とエドワード・カーペンター』木魂社、2000年
- 稲田敦子「内発的発展論の比較思想的考察：エドワード・カーペンターと石川三四郎の思想的接点をめぐって（II）」『聖学院大学論叢』第12巻第2号、2000年、43-51頁
- 稲田敦子『『養芽論』における内発的発展論：エドワード・カーペンターと石川三四郎の思想的接点をめぐって（I）』『聖学院大学論叢』第11号第3号、1999年、13-24頁

- 稲田敦子「石川三四郎における歴史意識の基底—エドワード・カーペンターとの接点をめぐって—」『聖学院大学論叢』第7巻第2号、1995年、1-12頁
- 稲田敦子「非戦論の一系譜—石川三四郎の土民思想—」古典共同研究会編『古典共同研究会論集:関屋光彦教授退任記念』古典共同研究会、1980年、133-144頁
- 岩崎正弥『大正・昭和前期農本思想の社会史的研究』京都大学博士論文、甲第5864号、1995年
- 岩崎正弥「石川三四郎の『土民生活』と農本主義—権力への抵抗思想—」『農林業問題研究』第24巻第2号、1988年、66-73頁
- 大沢正道「石川三四郎のなかの三つの問題」『初期社会主義研究』第18号、2005年、38-49頁
- 大沢正道編「石川三四郎年譜（第二版）」『初期社会主義研究』第18号、2005年、161-180頁
- 大沢正道編『土民の思想 大衆の中のアナキズム』思想の海へ〔解放と変革〕17、社会評論社、1990年
- 大沢正道「石川三四郎論」『石川三四郎集』筑摩書房、1976年、423-458頁
- 太田雅夫「石川三四郎と本郷教会・平民社」『初期社会主義研究』第18号、2005年、58-75頁
- 大原緑峯（大沢正道）『石川三四郎—魂の導師』リプロポート社、1987年
- 小澤萬記「石川三四郎の反進化論」『高知大学学術研究報告、人文科学』第43号、1994年、165-172頁
- 唐沢柳三「とりとめのない思い出—石川三四郎のこと」『初期社会主義研究』第18号、2005年、6-17頁
- 川上哲正「石川三四郎のみた中国」『初期社会主義研究』第18号、2005年、137-160頁
- 北沢文武「『石川三四郎伝』執筆余話」『初期社会主義研究』第18号、2005年、18-29頁
- 北沢文武『学問と愛、そして反逆 石川三四郎の生涯と思想 上』鳩の森書房、1974年
- 北沢文武『愚かな彼、愚かな道 石川三四郎の生涯と思想 下』鳩の森書房、1974年
- 北沢文武『帝力、我に何かあらんや 石川三四郎の生涯と思想 完結編』鳩の森書房、1974年
- 北村正光『新人』第2巻、龍溪書舎、1988年

- 木下英司「石川三四郎のキリスト教社会主義形成とその意義」『比較思想研究』第 30 号、2003 年、20-23 頁
- 木村直弘「〈摩擦〉〈震動〉〈感染〉—宮澤賢治『セロ弾きのゴーシュ』におけるトルストイの芸術論と石川三四郎の動態社会美学のインターフェイス—」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第 10 号、2011 年、55-84 頁
- 近代史研究所編『週刊平民新聞』近代史研究所、1982 年
- 黒川貢三郎「『新紀元』に集うキリスト教徒たち」『初期社会主義研究』第 19 号、2006 年、6-12 頁
- 後藤彰信『石川三四郎と日本アナーキズム』同成社、2016 年
- 後藤彰信「田中正造と石川三四郎」小松裕・金泰昌編『田中正造：生涯を公共に献げた行動する思想人』東京大学出版、2010 年、73-80 頁
- 後藤彰信「石川三四郎と吉野作造の思想的軌跡とその交差—本郷教会時代と石川の帰国をめぐって—」『国史談話会雑誌』第 47 号、2007 年、75-92 頁
- 後藤彰信「特集『新紀元』—社会主義と基督教 石川三四郎の神観念と統合原理の模索—『新紀元』から一九三〇年代へ」『初期社会主義研究』第 19 号、2006 年、74-83 頁
- 後藤彰信「石川三四郎の思想形成と伝統思想」松永昌三編『近代日本文化の再発見』岩田書院、2006 年、81-110 頁
- 後藤彰信「石川三四郎の自由恋愛論と社会構想—本郷教会と平民社における自由恋愛論争と国家魂論争」『初期社会主義研究』第 18 号、2005 年、76-86 頁
- 小松裕・金泰昌編『田中正造：生涯を公共に献げた行動する思想人』東京大学出版、2010 年
- 坂井健「石川三四郎と宮沢賢治—『非進化論と人生』と『農民芸術概論』—」『宮沢賢治研究 annual』第 14 卷、2004 年、129-147 頁
- 坂口茂『近代日本の愛国思想教育』上巻、株式会社ストーク、1999 年
- 坂本忠芳・柿沼肇編『社会運動と教育』国土社、1974 年
- 七理重恵『聖詔謹解』積文館、1926 年
- 志村正昭編「特集資料 石川三四郎著訳書目録稿」『初期社会主義研究』第 18 号、2005 年、181-188 頁
- 杉淵洋一「ヨーロッパ体験が開示する石川三四郎の人的ネットワーク—ルクリュ家との交流を中心として」『社会文学』第 33 号、2011 年、178-190 頁

- 鈴木範久編『内村鑑三選集』別巻第1巻、岩波書店、1990年
- 高崎市市史編さん委員会編『新編 高崎市史 通史編4 近代現代』高崎市、2004年
- 多賀秋五郎『学校の歴史』中央大学生協同組合出版局、1974年
- 竹内則之「石川三四郎の『土民生活（デモクラシー）』思想—その生成と構造をめぐって」
『武蔵大学人文学会雑誌』第12巻第1号、1980年、39-70頁
- 田中真人、山泉進、志村正昭「岩崎革也宛書簡（一）—幸徳秋水（その1）・北一輝・大石誠之助・森近運平・石川三四郎・西川光次郎・西川文子・赤羽一・座間止水・一木幸之助・前田英吉・丹後平民倶楽部—」『キリスト教社会問題研究』第54号、2005年、123-156頁
- 田村紀雄編『海外へユートピアを求めて 亡命と国外根拠地』思想の海へ〔解放と変革〕26、社会評論社、1989年
- 辻野功「石川三四郎—海老名弾正との関連において—」『キリスト教社会問題研究』通号23号、1975年、83-115頁
- 辻野功「明治社会主義運動に関する一考察：直接行動論の台頭を中心にして」『同志社法学会』第15巻第2号、1963年、115-130頁
- 津田左右吉『シナ思想と日本』岩波書店、1978年（1938年初版）
- 土屋基規『近代日本教育労働運動史研究』労働旬報社、1995年
- 綱澤満昭『日本近代と民族的原質』風媒社、1976年
- 鶴見俊輔『方法としてのアナキズム』鶴見俊輔集9、筑摩書房、1991年
- 鶴見俊輔編『石川三四郎集』近代日本思想体系16、筑摩書房、1976年
- 鶴見俊輔「解説」鶴見俊輔編『石川三四郎集』近代日本思想体系16、筑摩書房、1976年
- 寺崎昌男・前田一男編『日本の教師22 歴史の中の教師1』ぎょうせい、1993年
- 中内敏夫・大田堯・民間教育史料研究会編『民間教育史研究事典』評論社、1975年
- 中尾正己『大正文人と田園主義』近代文芸社、1996年
- 中村勝範編『帝大新人会研究』慶應義塾大学法学研究会、1997年
- 中村勝範「『ダイナミック』総目次と解説」『法学研究：法律・政治・社会』第49号第12号、1976年、33-54頁
- 中村勝範「週刊新聞「直言」総目次と解説」『慶應義塾大学法学研究会 法学研究』第32巻第8号、1959年、46-66頁

- 中村勝範「直接行動論の台頭：幸徳秋水の理論をめぐって」『法学研究：法律・政治・社会』第31巻第10号、1958年、35-58頁
- 中村勝範「木下尚江における近代思想の展開：日露戦争前後を中心として」『法学研究：法律・政治・社会』第29巻第8号、1956年、40-64頁
- 西山拓『協同社会の構築と教育 包括的教育学の試み』シーエービー出版、2011年
- 西山拓『石川三四郎のユートピア構想—近代日本の知識人による理想社会論構築と社会改革の試み—』早稲田大学博士論文、甲第2763号、2009年
- 西山拓『石川三四郎のユートピア—社会構想と実践—』冬至書房、2007年
- 西山拓「特集石川三四郎 ユートピアンとしての石川三四郎—知識人の田園回帰と社会実験」『初期社会主義研究』第18号、2005年、121-130頁
- 西山拓「石川三四郎の非進化論—共生社会の探求」『社会思想史研究』第27号、2003年、118-135頁
- 西山拓「石川三四郎の理想社会論—新興共同体の連帯について—」『ソシオサイエンス』第8巻、2002年、227-240頁
- 野澤秀樹「石川三四郎におけるエリゼ・ルクリュの思想—その受容と差異—」『地理学評論』第79巻第14号、2006年、837-856頁
- 野澤秀樹「エリゼ・ルクリュの地理学とアナーキズムの思想」『空間・社会・地理思想』第10号、2006年、20-36頁
- 服部之総・小西四郎監修『平民新聞〔一〕』創元社、1953年
- 林彰「初期社会主義者たちと田中正造—幸徳秋水・木下尚江・石川三四郎・福田英子を中心に—」『田中正造と足尾鉍毒事件研究』第15号、2009年、37-52頁
- 林彰「石川三四郎の修養主義批判」『初期社会主義研究』第18号、2005年、131-136頁
- 榛名町誌編さん委員会編『榛名町誌 通史編 下巻 近世・近代現代』榛名町誌刊行委員会、2012年
- 平島敏幸「石川三四郎の社会哲学」『学習院史学』第32号、1994年、35-49頁
- 平島敏幸「石川三四郎の「土民思想」」『学習院大学文学部研究年報』第37号、1990年、95-130頁
- 平島敏幸「石川三四郎に於ける社会主義とキリスト教」『学習院大学文学部研究年報』第36号、1989年、43-75頁
- 福田英子『明治社会主義文学集（二）』明治文学全集84、筑摩書房、1965年

- 船寄俊雄編『近現代日本教育史研究』風間書房、2021年
- 洪伊杓「海老名弾正の「植民地民」理解：海老名弾正の『土人』と吉野作造・石川三四郎の『土民』の比較を中心に」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第50号、2018年、123-155頁
- 本庄市立本庄西小学校沿革史（http://edu-honjo.com/nishisyo/?page_id=35）
（2022/11/26に確認）
- 本庄市立本庄東小学校沿革（http://edu-honjo.com/higashisyo/html/htdocs/?page_id=29）
（2022/11/26に確認）
- 松岡文平「石川イズムの形成とその特質」『黒の手帖』第7号、1969年、46-64頁
- 松村寛之「石川三四郎と「愛国心」」『大阪府立大学人文学論集』第39巻、2021年、13-35頁
- 三原容子「農本的アナーキズム」本山幸彦教授退官記念論文集編集委員会『日本教育史論叢』思文閣出版、1988年、471-490頁
- 宮原浩二郎「社会美学のコンセプト（3）—石川三四郎の社会交響楽=複式網状組織—」『関西学院大学社会学部紀要』第108号、2009年、29-49頁
- 室田町誌編集委員会編、『室田町誌』室田町史編纂委員会、1966年
- 茂木恵太「石川三四郎の思想形成と仏教—内山愚童との関係を契機として—」『社会学論集』第27号、2016年、53-68頁
- 森元斎「ロシア革命からみた石川三四郎における『土民生活』について」『初期社会主義研究』第27号、2017年、35-47頁
- 文部科学省『学制百年史』
（http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318016.htm）（2022年11月26日参照）
- 山泉進「初期社会主義と Free Love—石川三四郎の「自由恋愛私見」をめぐって」『初期社会主義研究』第18号、2005年、87-108頁
- 山口晃「特集石川三四郎 土民生活—放浪と居場所のふれあうところ」『初期社会主義研究』第18号、2005年、50-57頁
- 山口晃「モロッコの石川三四郎とその後：地理的環境論への道」『近代日本研究』17号、2000年、177-223頁

- 山崎好裕「大陸と反逆：宮崎滔天と石川三四郎のアナーキズム」『福岡大学経済学論叢』
第 67 巻第 1 号、2022 年、1-12 頁
- 山本克郎「書評・歴史哲学序論（石川三四郎著、暁書院発行）」『史学』第 12 巻第 3 号、
1933 年、568-571 頁
- 吉岡諒「石川三四郎と木下尚江の思想交渉—社会運動と内省のはざままで」『初期社会主義
研究』第 26 巻、2016 年、217-234 頁
- 米田俊彦編『近代日本教育関係法令体系』港の人、2009 年
- 米原謙「亡命時代の石川三四郎—その周辺」『阪大法学』第 48 巻第 3 号、1998 年、829-
855 頁
- 米原謙「第一次世界大戦と石川三四郎—亡命アナキストの思想的軌跡」『阪大法学』通号
182 号、1996 年、199-320 頁
- 米原謙『日本的「近代」への問い—思想史としての戦後政治』新評論、1995 年
「萬朝報」刊行会編『萬朝報』第 36 巻、日本図書センター、1985 年
「萬朝報」刊行会編『萬朝報』第 42 巻、日本図書センター、1985 年
「萬朝報」刊行会編『萬朝報』第 45 巻、日本図書センター、1986 年
労働運動史研究会編『新紀元』明治文献資料刊行会、1961 年

本論文は下記の学術雑誌に掲載された論文、研究ノートに加筆と修正を行い、序章、第
1 部、第 2 部、第 3 部を書き下ろしてまとめたものである。

- 「「小学教師に告ぐ」から見る石川三四郎の小学校教師観」『総合社会科学研究』第 3 巻第
10 号、2018 年、21-31 頁
- 「週刊『平民新聞』の再検討：教育、子どもに関する記事に焦点を当てて」『明星大学大学
院教育学研究科年報』第 3 号、2018 年、71-79 頁
- 「「土民生活」思想における石川三四郎の教育観」『総合社会科学研究』第 4 巻第 2 号、
2020 年、1-11 頁
- 「石川三四郎の道德観：愛国心に関する論考の検討を中心に」『明星大学大学院教育学研
究科年報』第 5 号、2020 年、43-51 頁
- 「個人紙『ディナミック』に見える石川三四郎の社会思想—特に「土民生活」思想に基づ
く古代東洋史への着目の意義—」『比較文化史研究』第 20 号、2021 年、19-32 頁